

B. 出土遺物(第16図～第47図)

15-1 地区出土遺物のうち、方形周溝墓の溝を中心に多量の弥生土器が出土した。また、石器についても相当量が出土しているが、図化作業が十分に実施できなかったため、詳細については期を改めて報告を行うこととし、各地区の弥生土器について遺構単位で観察を行うこととする。

S D 523(第16図1～第17図11) 破片を中心に多く出土している。1の無頸壺は細かいハケメ調整のあとに櫛描直線文で飾る。2はどういった形式であるか不明である。中央に大きな円窓をもつ可能性があり、先端は絞られ閉じられていたものと考えられる。3～5・9は壺体部である。いずれも体部の半ばで張り、縦に長い形状を呈す。甕は折り曲げ口縁のものがある(6)。「く」字口縁の鉢は、口縁端部に刻目をもつ8ともたない7がある。7の体部下半にはミガキ調整がみられる。10の水平口縁高杯は、口縁内にわずかな段差をもつ。

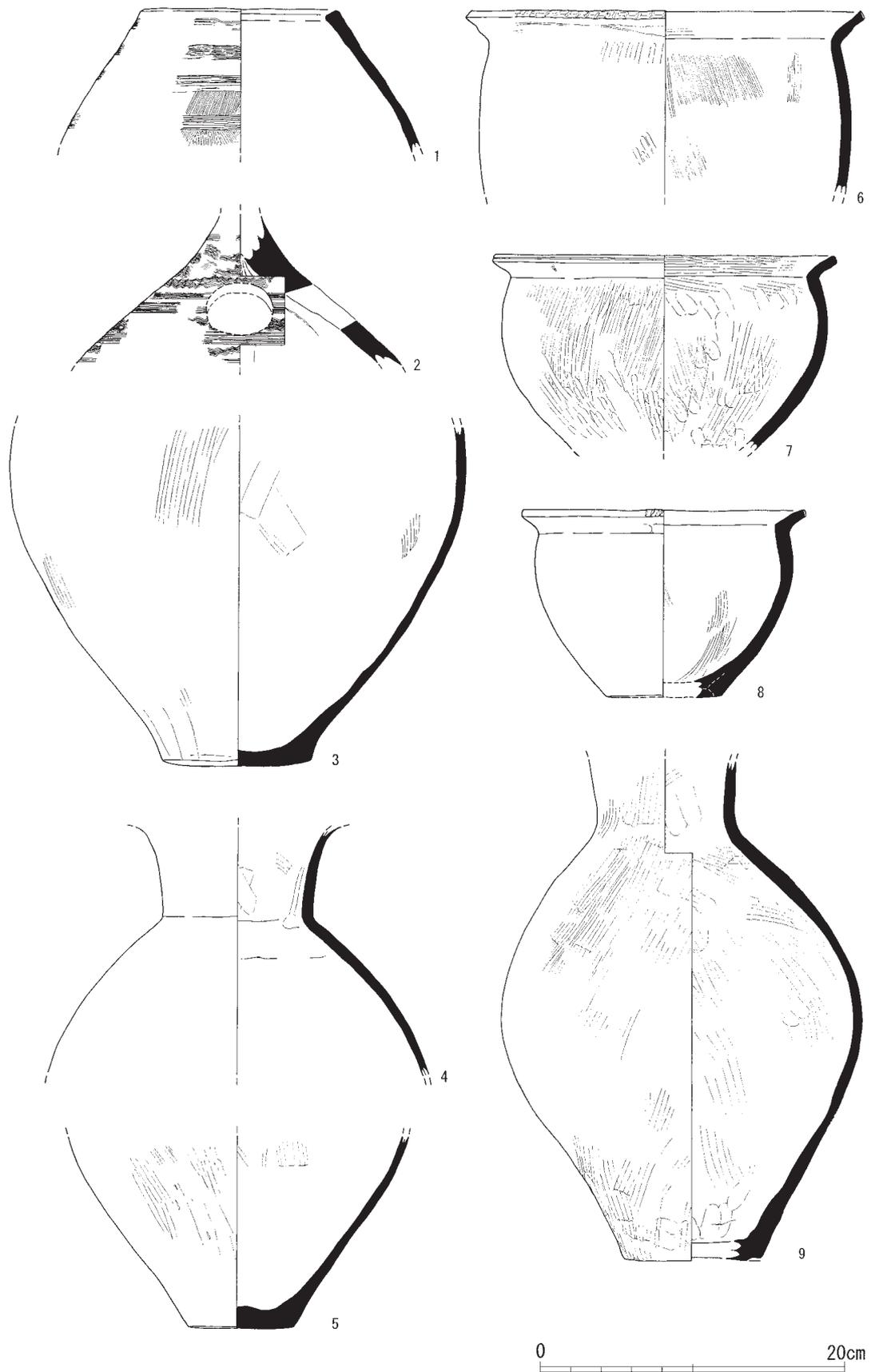
S D 517(第17図12～第20図61) 南溝から水差し形土器2個体と、受口状口縁壺が1個体潰れた状態で出土した(13～15)。水差はいずれも口縁端部に刻目を入れるが、14は櫛描直線文で飾る。ゆるやかに片口をもつ形状である。15は底面に靨の圧痕を残す。切り込んだような明瞭な片口である。13の受口状口縁壺は、水差の上層から出土したものである。全体をハケメ調整するが、口縁部に強いヨコナデが見られる。口縁上端と下端の刻目は上下の単位が揃っていることから、同一の工具で一度に施したものであることが分かる。

北溝からは、完形の土器数点と破片が多く出土した。20を始め、無文の壺が目立つ。体部は半ばでやや張る形状を呈する(20)。甕は折り曲げ口縁と「く」字状口縁のものが見られる(23～25)。内外共にハケメ調整のものが主体だが、25は外面をミガキ調整する。大型甕の口縁端部には若干の拡張が見られる(27・29)。34の水平口縁高杯は杯部外面をハケメ調整し、脚部内面をナデ調整する。33は器種不明である。円板充填法を用いない。26は蓋であると思われる。

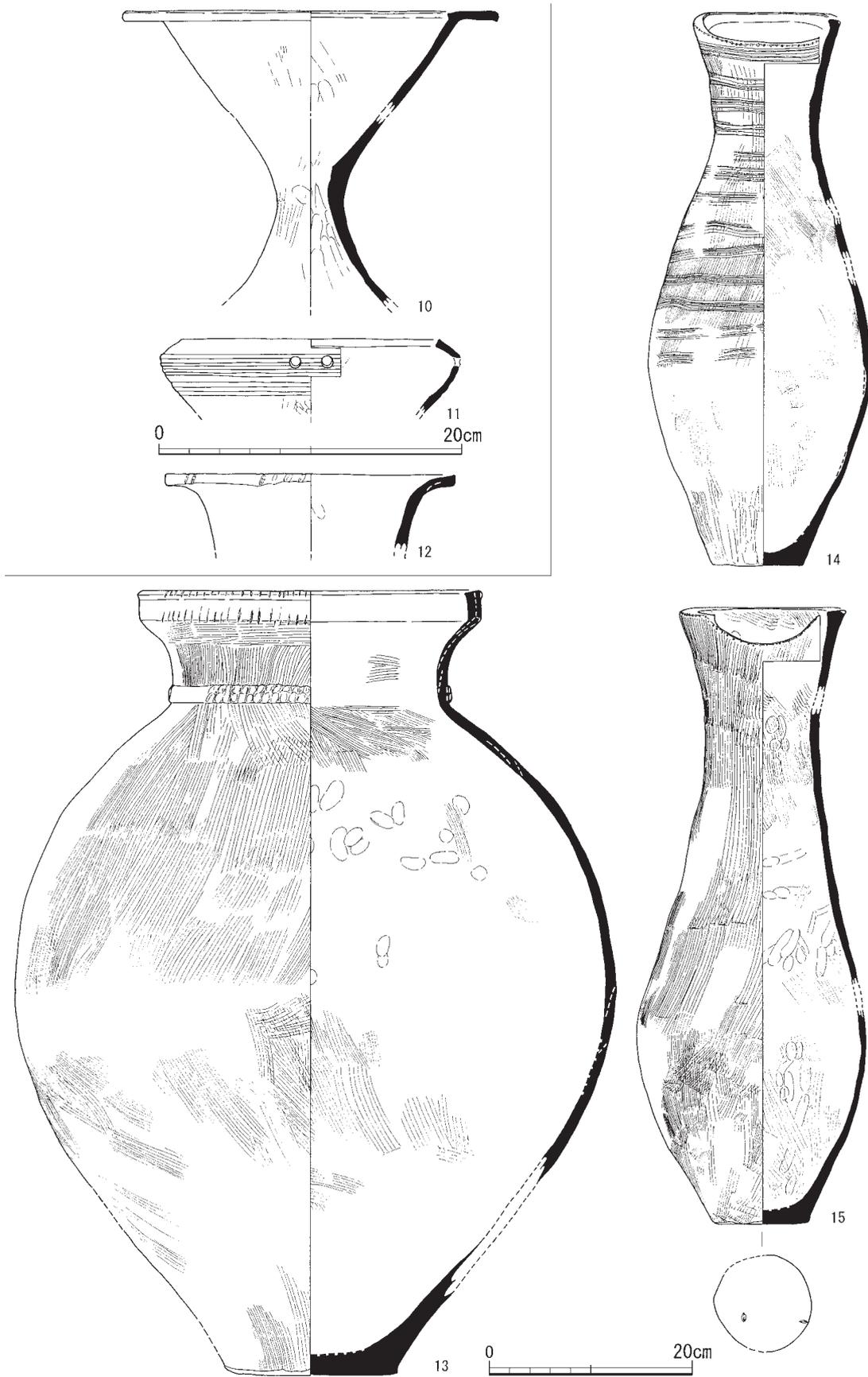
東溝からは土器が破片の状態で大量に出土し、数点が完形に近い形まで復原できた。35の広口壺は口縁端部には刻目を、体部には櫛描直線文と波状文が交互に施される。40の広口壺体部は、内外共に粗めのハケメ調整を行う。38の口縁内面には瘤状の突起が付けられている。39は頸部に2条の突帯が付けられる。42の水差は、体部を櫛描直線文と列点で飾られる。把手の断面は楕円形である。43は細頸壺の体部で、頸部以上を欠く。甕は大小共に口縁端部に刻目を施すものが多く見られる(44～46・48・50・51)。46の体部には、ナデ調整の後にハケメ調整を施す。48は、目の細かいハケメ調整が施される。高杯の脚部が2個体出土している。54は柱状で、櫛描文で飾られる。56は無文で粗いハケメ調整をする。円板充填法である。小型の鉢(55)もある。

58～61は、S D 517に囲まれる周溝墓の上面から出土したものである。口縁内に3条の突帯をもつ広口壺(58)や、口縁部が大きく垂下する形状のもの(59)がある。60の甕底部は内面をケズリ調整する。

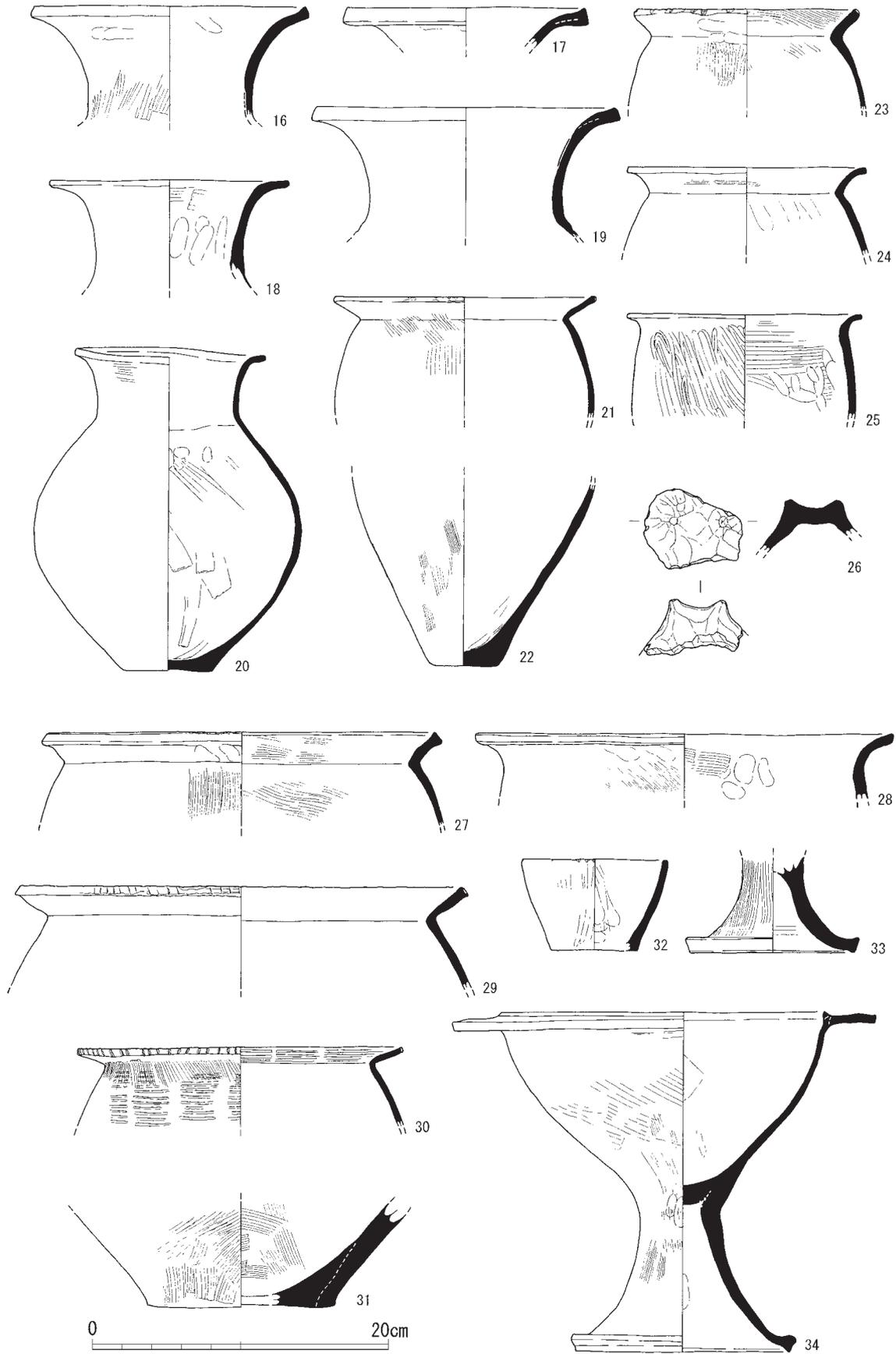
S D 534(第21図62～第24図105) 大量の土器片が出土した。広口壺は、口縁内を櫛描扇形文で、口縁端面を櫛描波状文で飾るものがほとんどである(62～66)。S D 534北半から出土した完形品66には、底部穿孔が見られ供献土器であると考えられる。頸部には指圧痕文突帯を施す。67は口



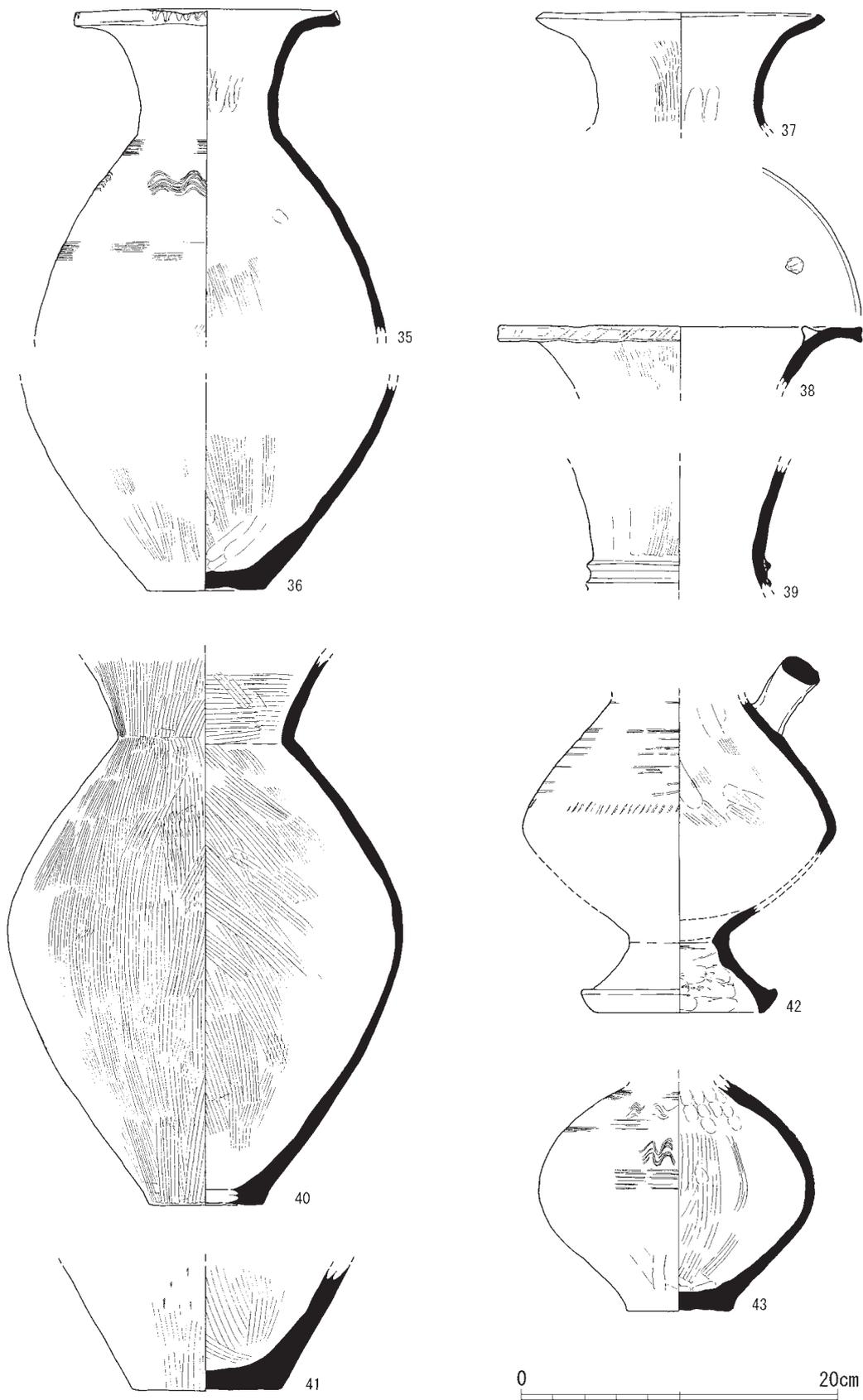
第16図 1地区出土遺物実測図(1)



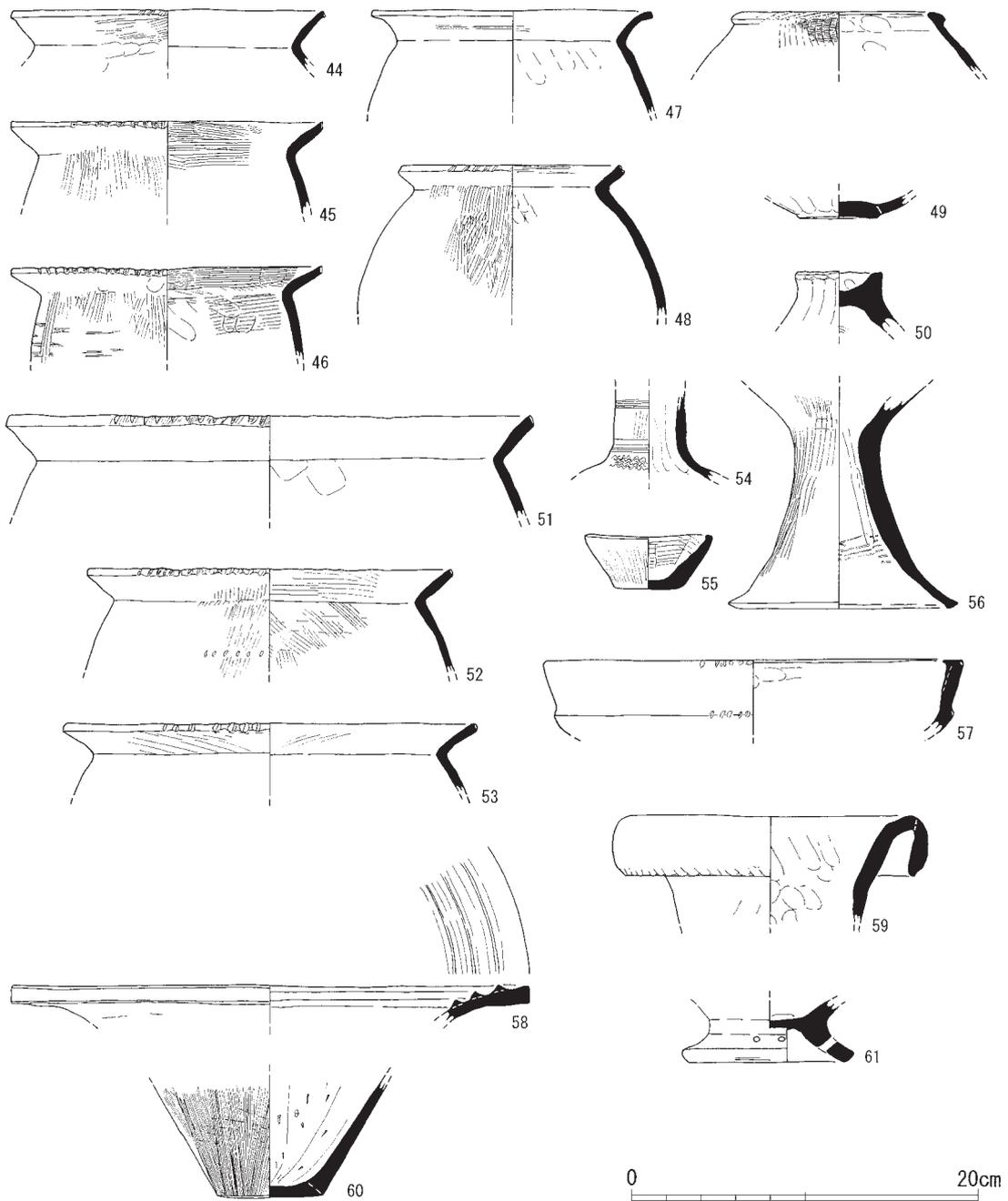
第17図 1地区出土遺物実測図(2)



第18図 1地区出土遺物実測図(3)



第19図 1地区出土遺物実測図(4)



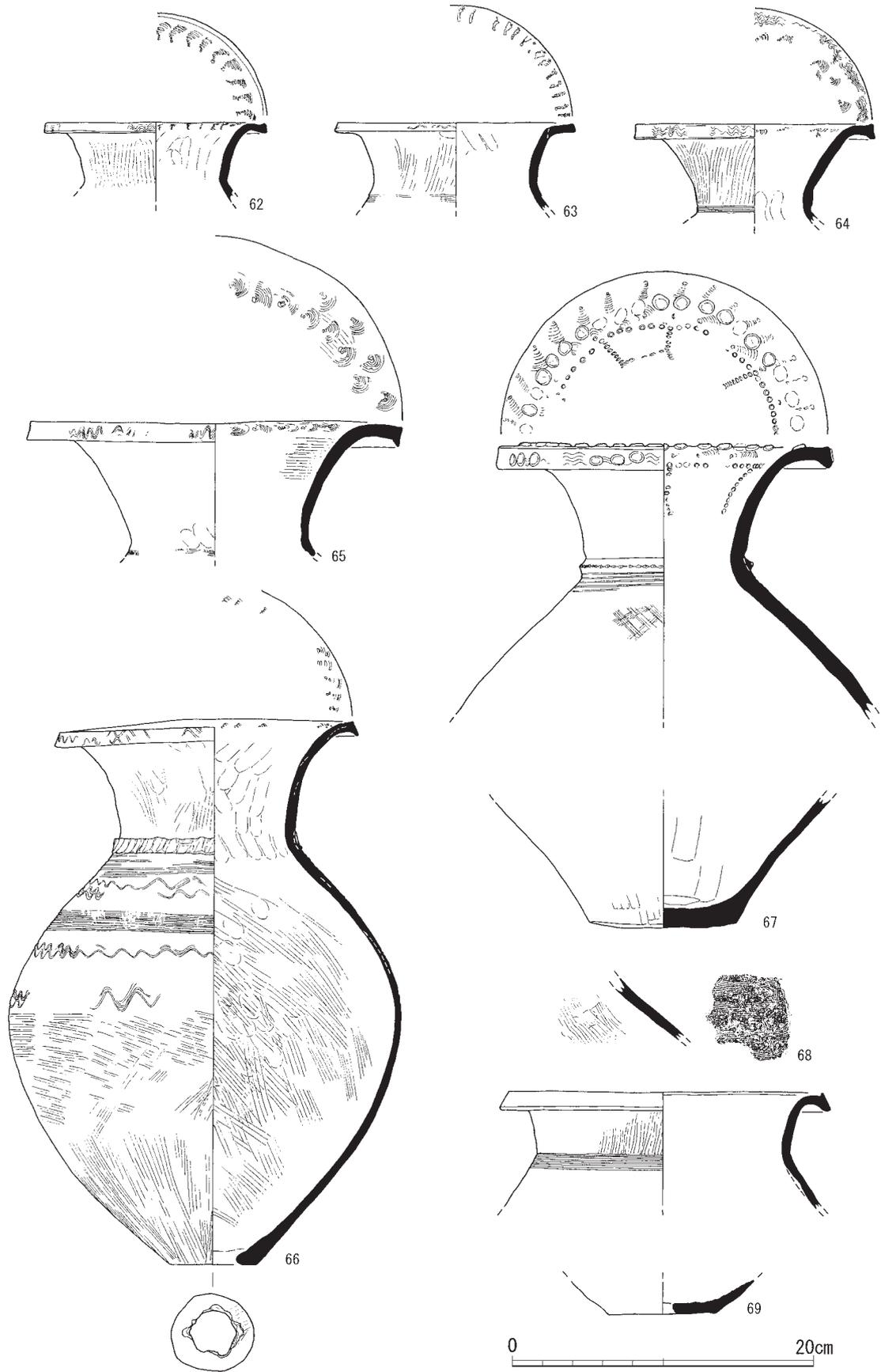
第20図 1地区出土遺物実測図(5)

縁内面に櫛描扇形文・円形浮文・円形竹管文を、端面にも波状文・円形浮文を、頸部には刻目をもつ突帯を、体部には櫛描斜格子文を施すという高い加飾性がみられる。無文で短頸の広口壺も出土している(69~73)。69のみは頸部に櫛描直線文を施している。受口状口縁壺も多く出土している(75~79)。S D534南半から出土した79は口縁部が直立する形状と強いヨコナデが見られないことから、他の個体より古い形状であるといえる。76の口縁端には凹線文が施される。いずれも頸部には指圧痕文突帯が付けられる。大型の細頸壺(80・81)や直口壺(83)も出土している。83は3条の刻目突帯に棒状浮文を貼り付けており、播磨方面の装飾と共通している。甕は小型のも

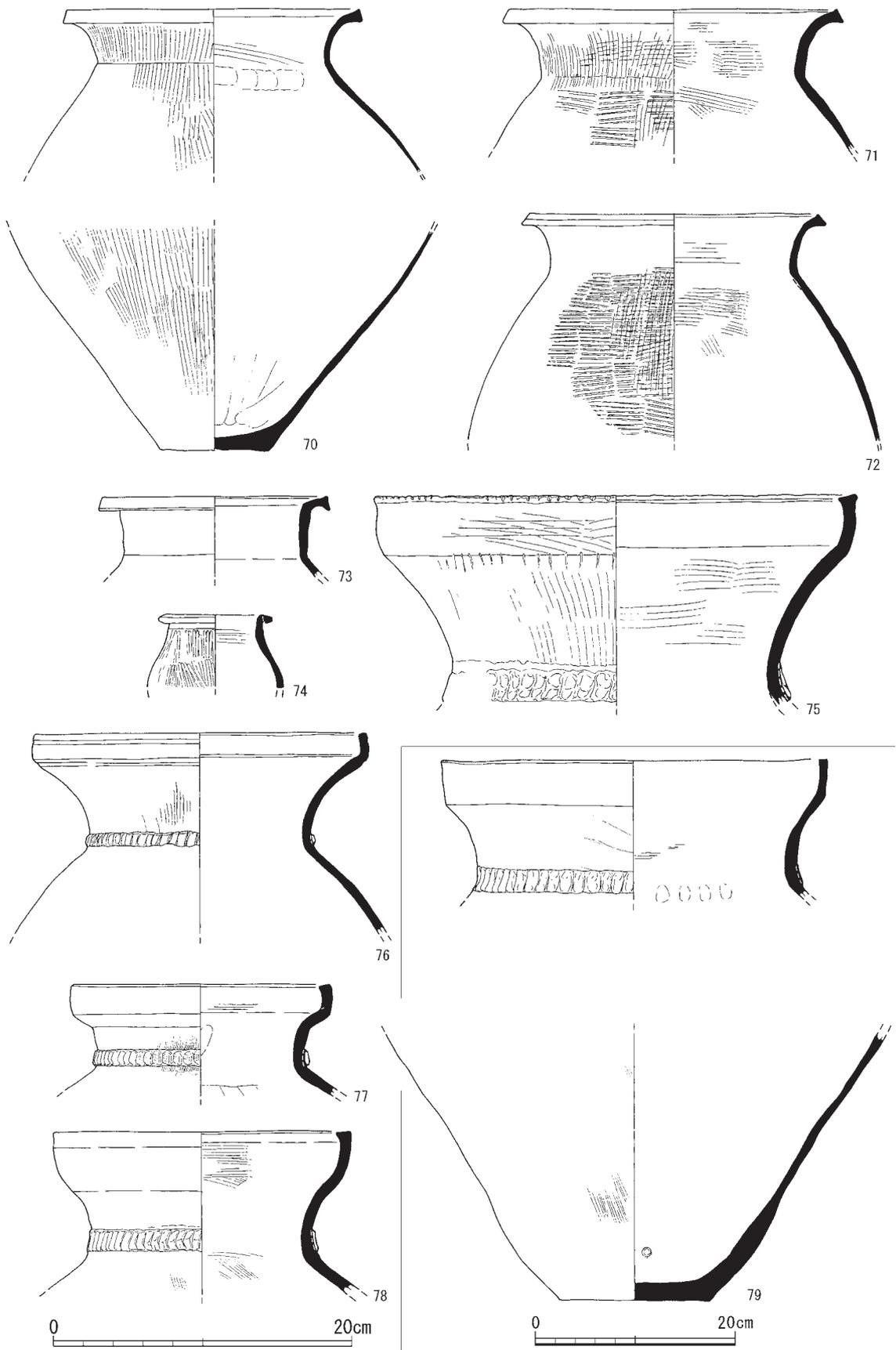
のが目立つ(86~91)。口縁端部に面をもち、刻目をもつものと無文のもの、無文で上方に拡張するものがある。タタキ調整のものも多くみられる。87はいわゆる近江系の受口状口縁甕である。口縁部は直立し、内面に横方向のハケメ調整をする。褐色の胎土である。93は凹線文の口縁端部をもつ「く」字状口縁の鉢であり、櫛描直線文と波状文で飾る。ほかに、凹線文をもつ台付きと考えられる鉢(95)や無文の「く」字状口縁の鉢(97)、把手付きの鉢(96)が出土している。高杯は、単純な水平口縁をもつもの(103)、水平口縁先端が大きく垂下し、そこに凹線文を施すもの(104)と3個一組の円形浮文をもつもの(105)があり、後の2点は脚部内面をケズリ調整する。98は器台の体部であると思われる。

S D 549(第24図106~第28図156) この遺構からも多くの土器片が出土した。広口壺の多くは、口縁内面を扇形文で、端面を波状文で飾るものが多い(106~109)。端部を上下に広げるものと、途中で折れ曲がり先端が垂下するものがある。108は口縁部に2列の円形竹管文を施す。109は口縁端面上下に刻目を施す。110は口縁内に瘤状の突起と円孔をそれぞれ二つもつ。頸部に断面三角形の突帯を1条もつものが多いが、大型の広口壺では指圧痕文突帯を付けている。調整は外面をハケメ調整するものが主体である。112は播磨などで見られる口縁内に突帯をもつ垂下口縁の広口壺である。胎土は在地のものと同じ。垂下部に凹線文を施し、その上に棒状浮文を貼り付けている。頸部には断面三角形突帯を6本貼り付けている。一方で、口縁端部に刻目をもつものもある(116~119)。117・119のようにタタキ調整のみられるものもある。広口短頸壺は頸部が直立する113と、頸部がゆるやかに外反する114・115がある。受口状口縁壺は、頸部の締まりが強く、口縁部が直立(121)もしくは強く内湾(120・122)する。122は口縁部外面が櫛描斜格子文で飾られる。123の細頸壺はS D 549半ばで出土した供献土器である。頸部と体部の境界に円孔が穿たれ、底部が打ち欠かされている。125の大型細頸壺は、諸種の櫛描文で飾られる。126の短頸壺は口縁部に凹線文状のヨコナデが施される。体部にはヘラによる「コ」字状の刻みがみられる。甕は口縁端部に刻目をもち、体部上半が張る形状のものが主流で、タタキ調整を施すものが多い(129~134、136~141)。133は口縁端部を上方に拡張する。大型の甕は口縁端部に面をもつ(136~138)。135は甕蓋である。145の椀状の鉢は口縁直下を突帯と円形竹管、ヘラ描斜格子文で飾る。146の脚部は突帯と円形竹管文で飾り、三角形の透しをもつ。文様構成の類似から145・146は同じ型式の土器であると考えられる。胎土は類似するが、同一個体かどうかは不明である。高杯脚部はヘラ描きによる施文をもつもの(143)、無文のもの(144・150~152)、裾部先端に刻目をもつもの(149)とがある。143のヘラ描き文様は丹波では見られない施文法である。台形土器が3点出土している(154~156)。調整や形状が個体によって異なる。154はS D 534から出土した端部片と接合した。

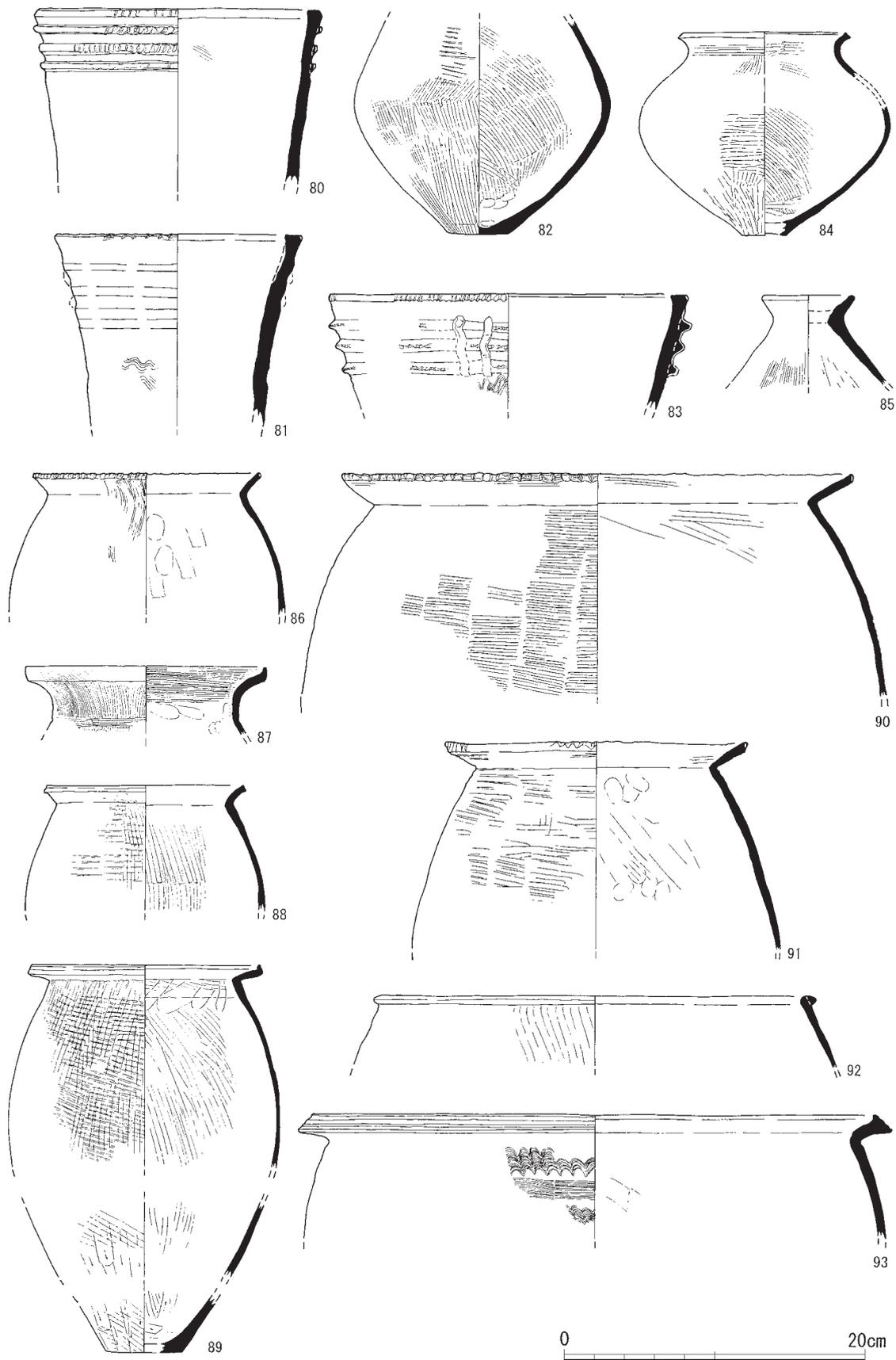
S D 198(第29図157~第36図233) S D 198からは、完形や残存率の高い個体が多量に出土した。広口壺は、1点が完形近くまで復原できた(159)。広口壺は、全体的に口縁部を大きく垂下させる形状のものが多く(157~163)、タタキの後にハケメ調整を行うものが多い。158や162など、口縁端面に凹線文をもつものが見られるが、157や159のように波状文と扇形文の組み合わせも見



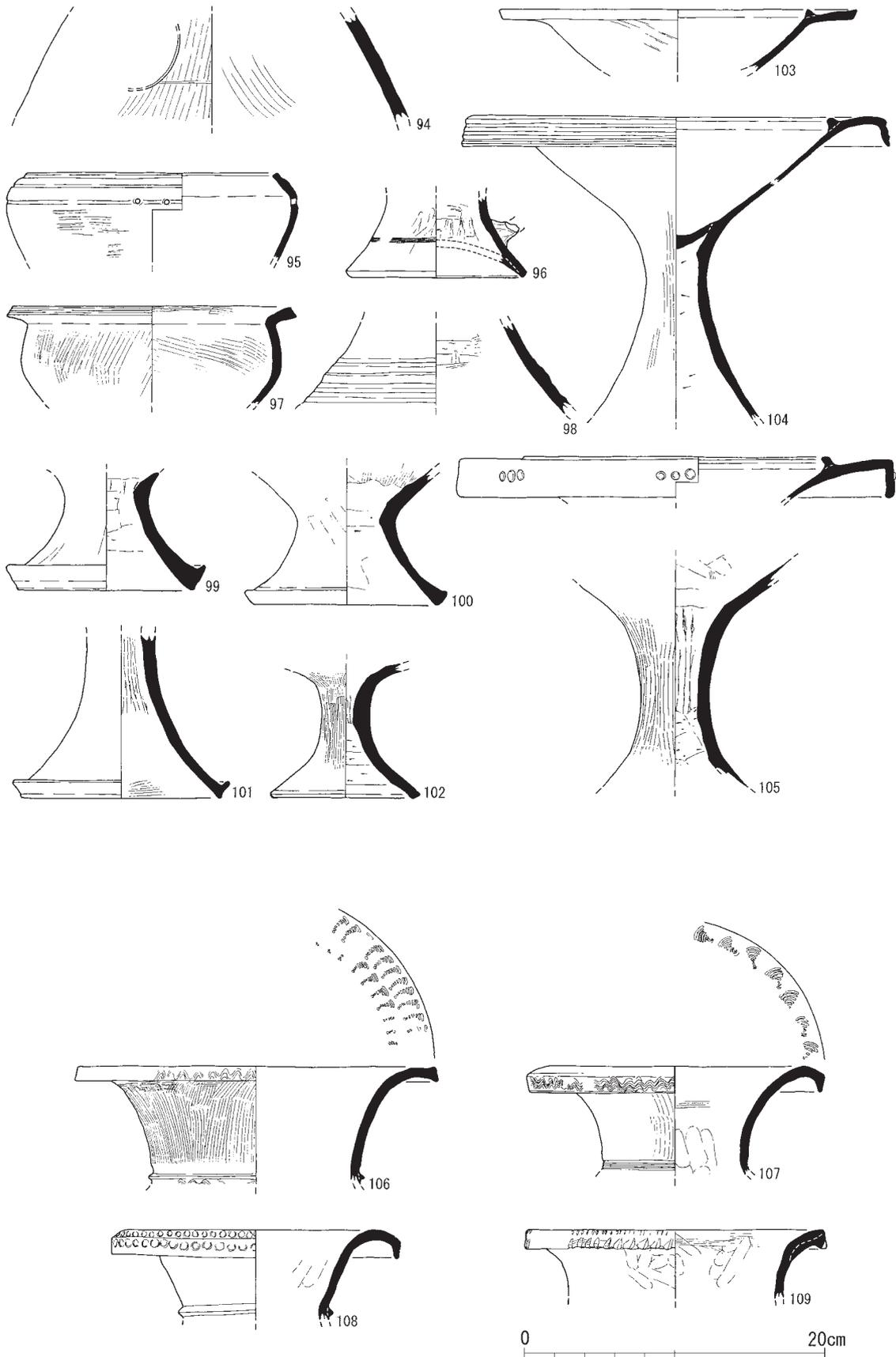
第21図 1地区出土遺物実測図(6)



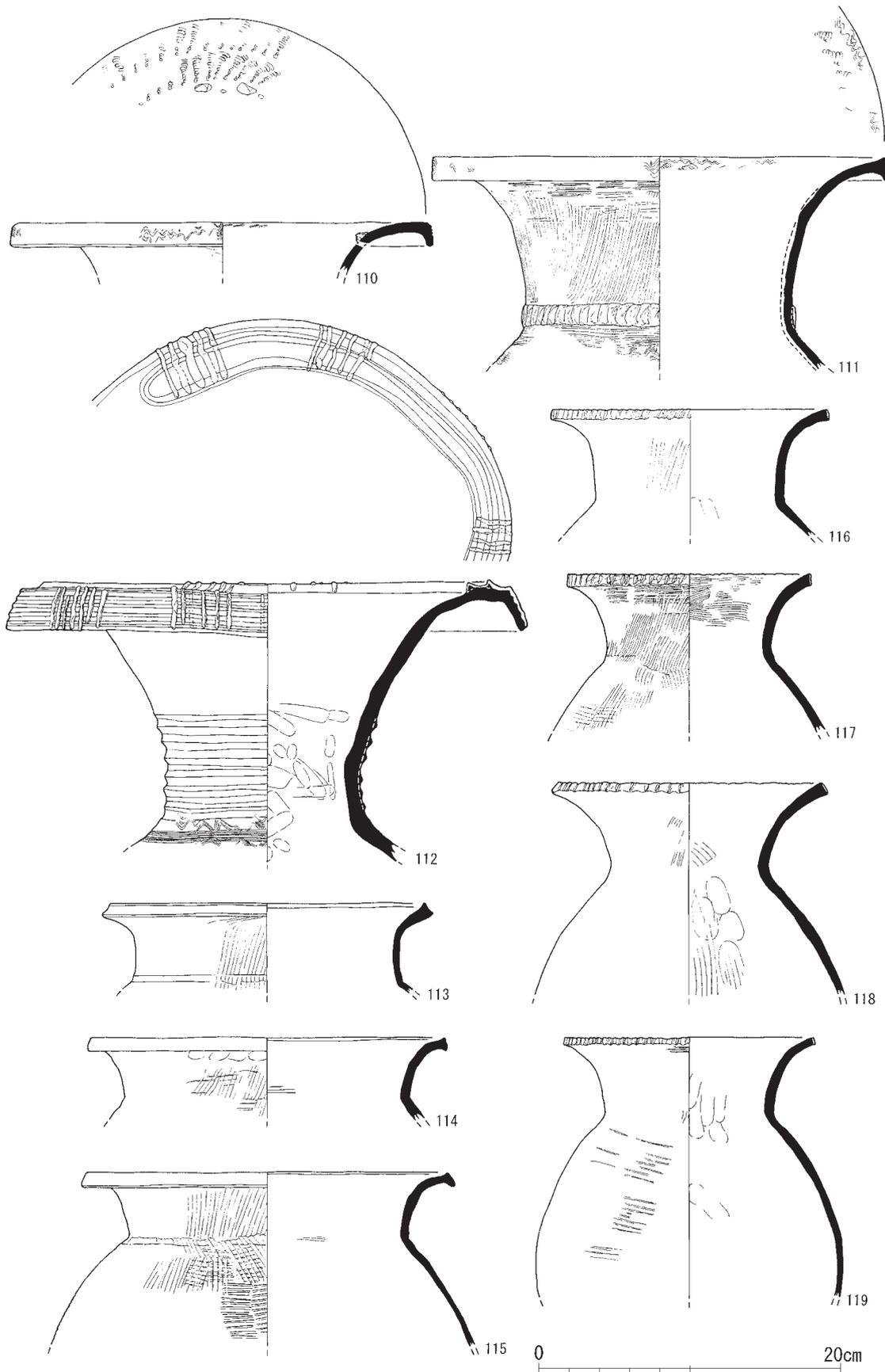
第22図 1地区出土遺物実測図(7)



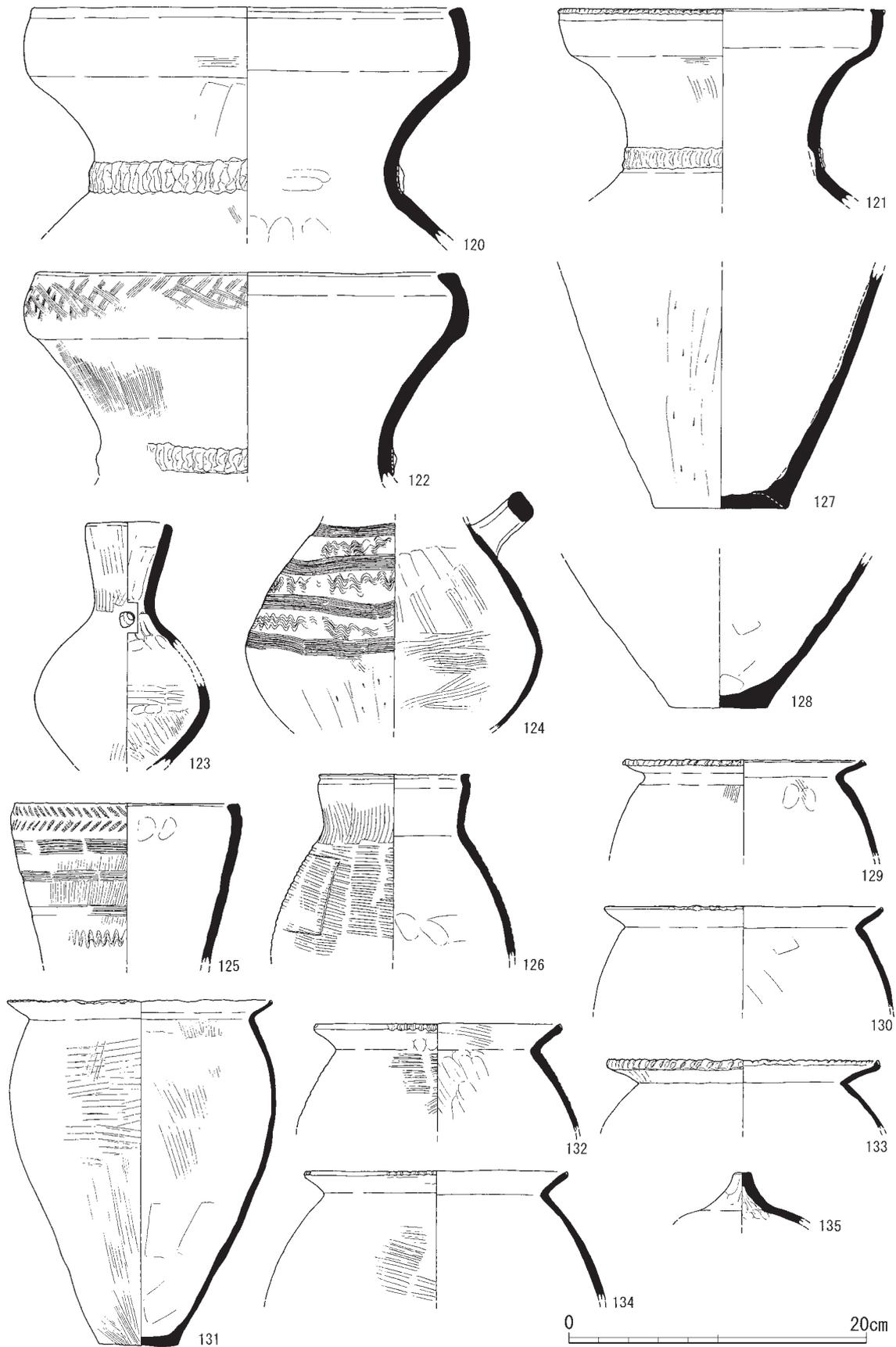
第23図 1地区出土遺物実測図(8)



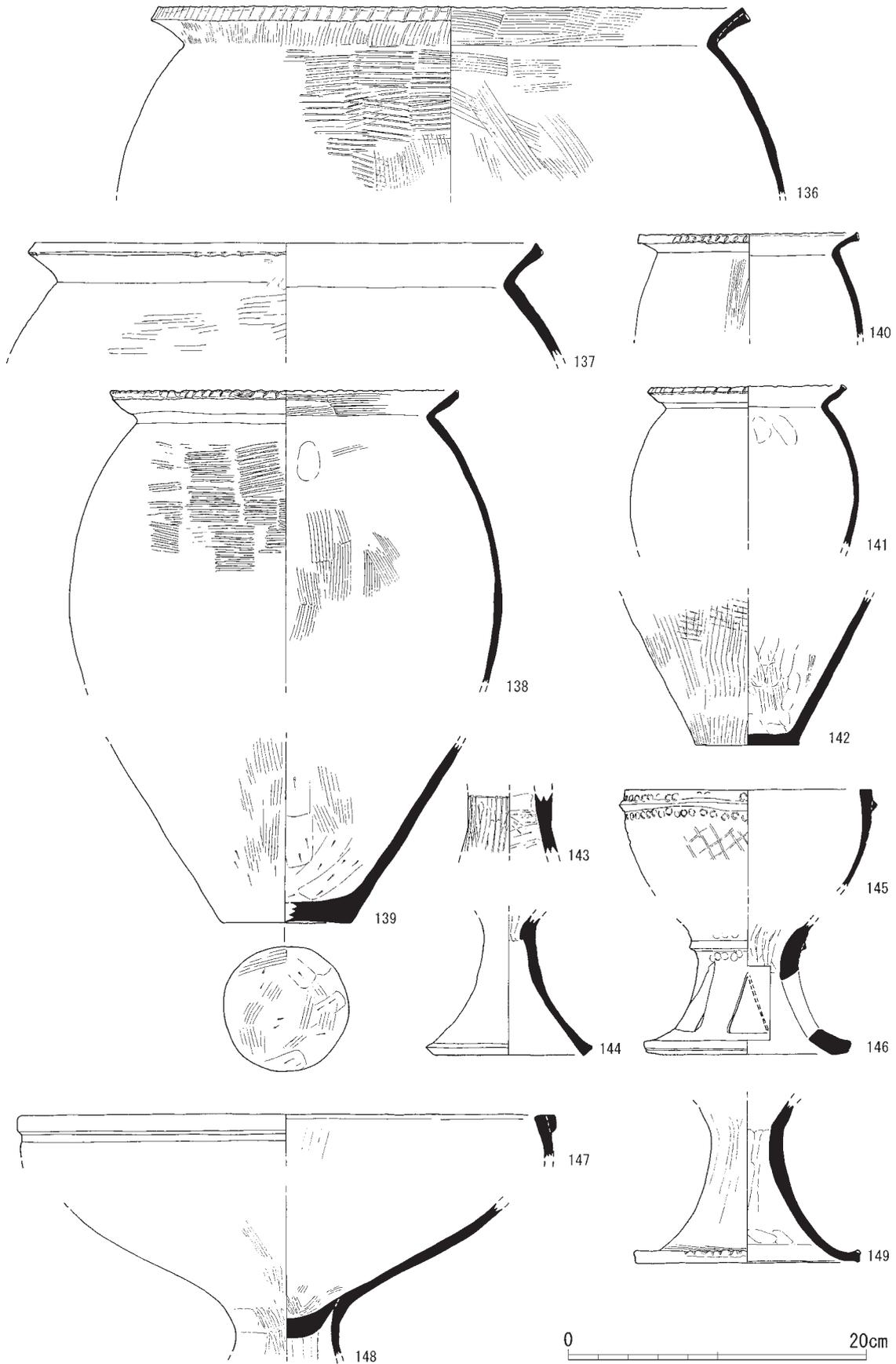
第24図 1地区出土遺物実測図(9)



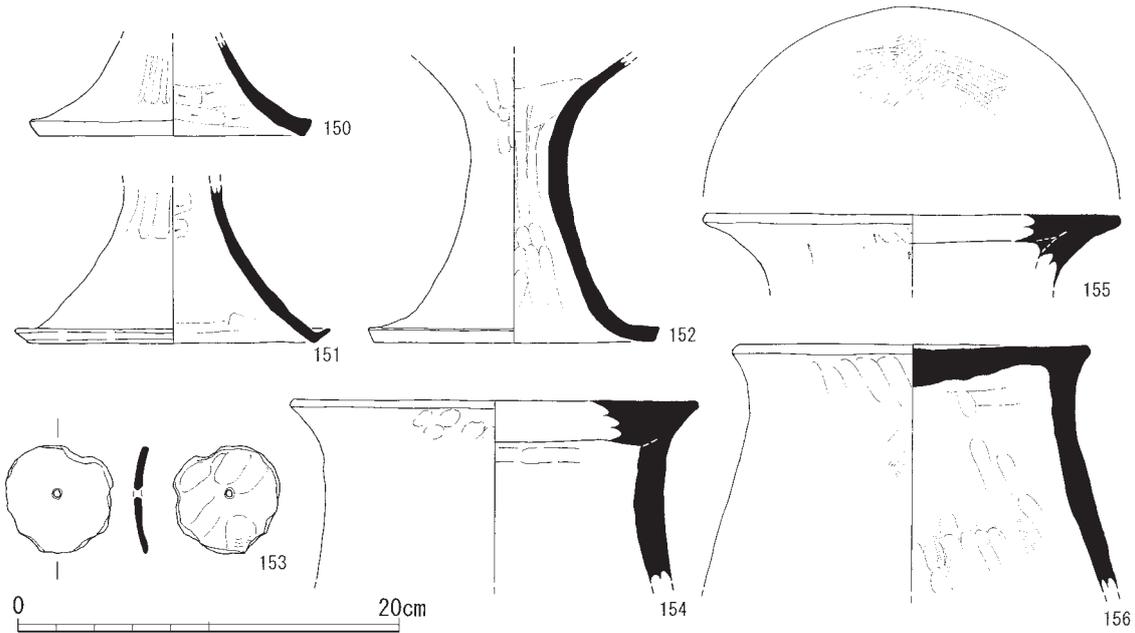
第25図 1地区出土遺物実測図(10)



第26図 1地区出土遺物実測図(11)

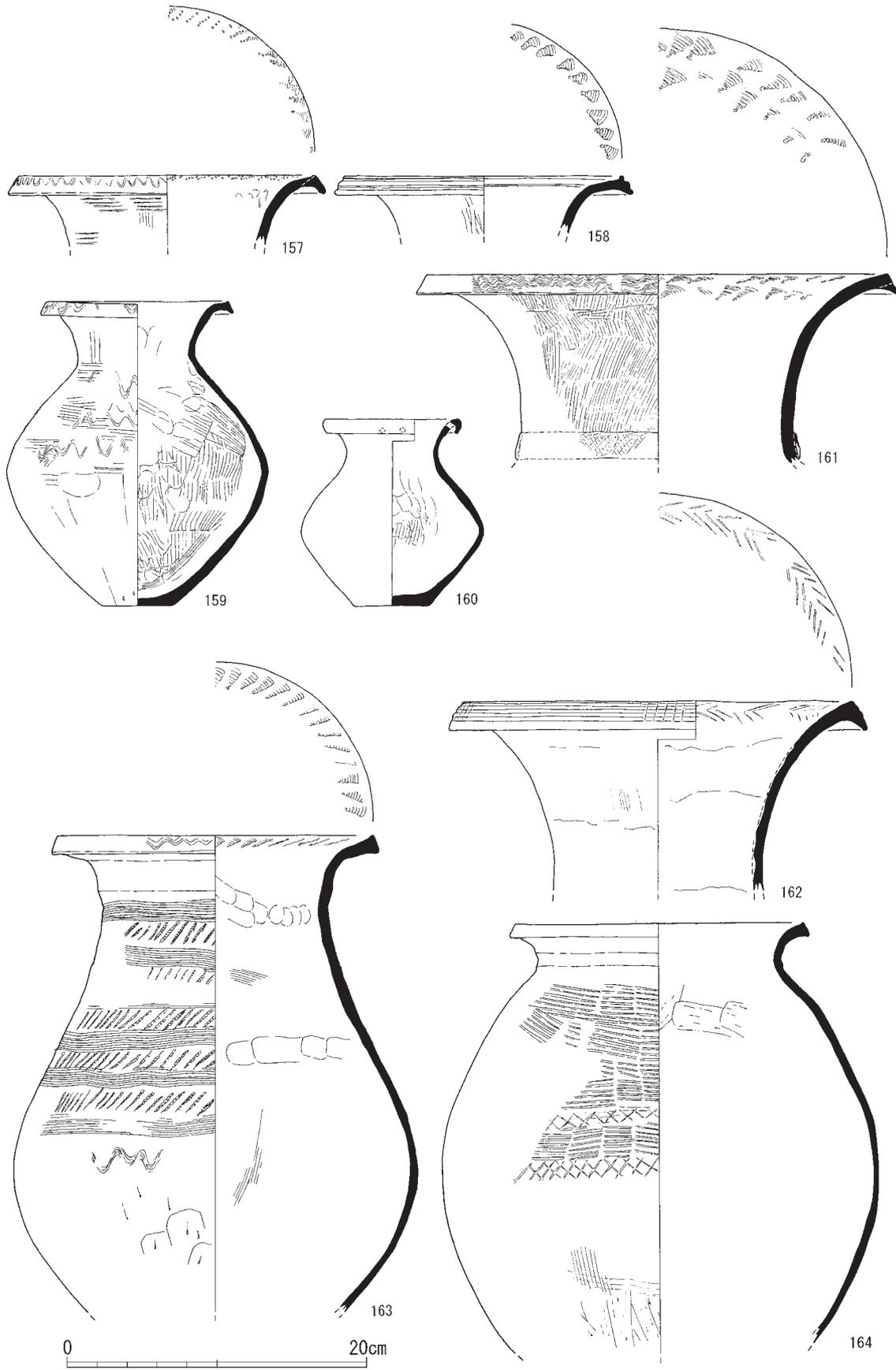


第27図 1地区出土遺物実測図(12)

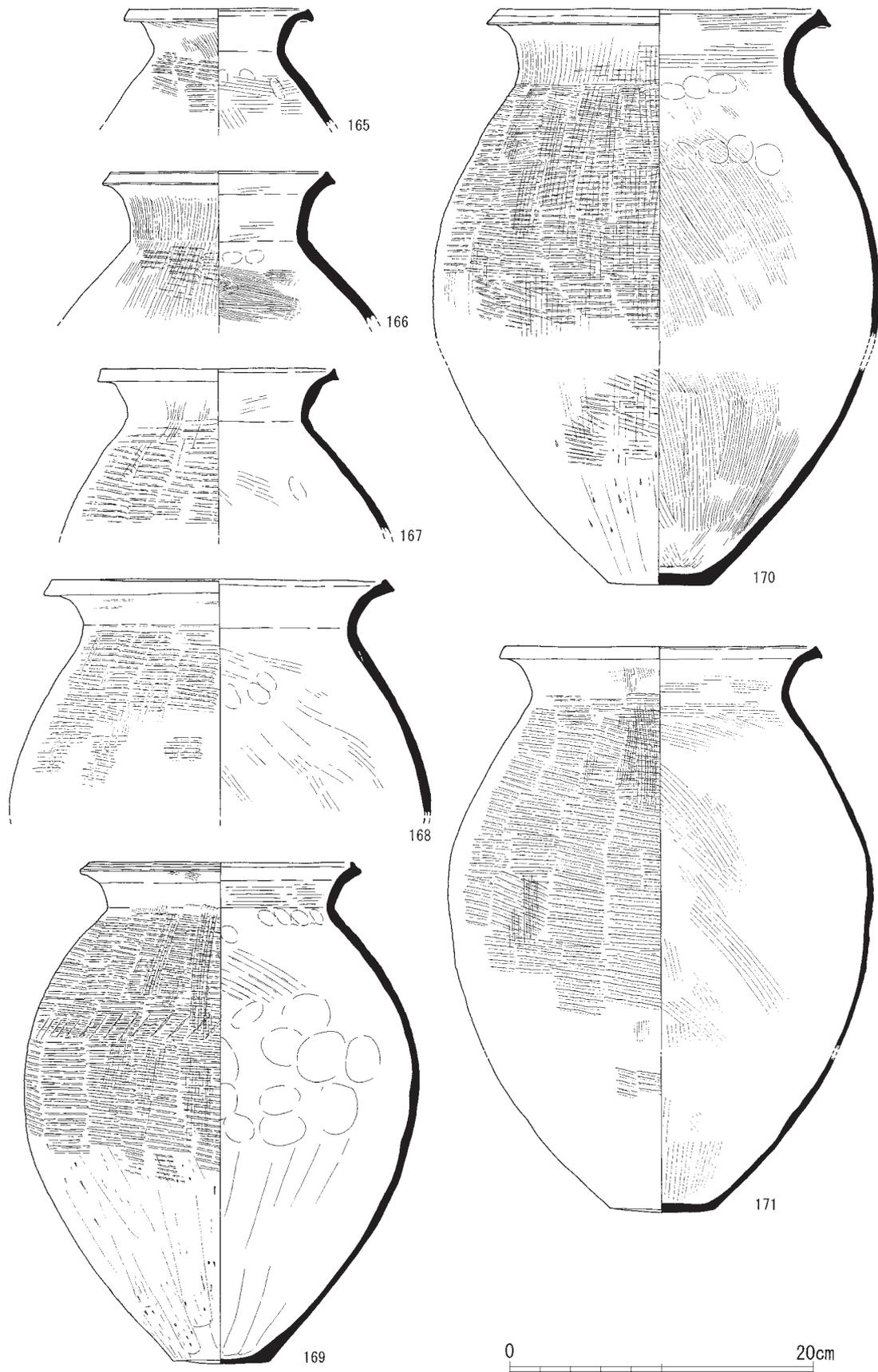


第28図 1地区出土遺物実測図(13)

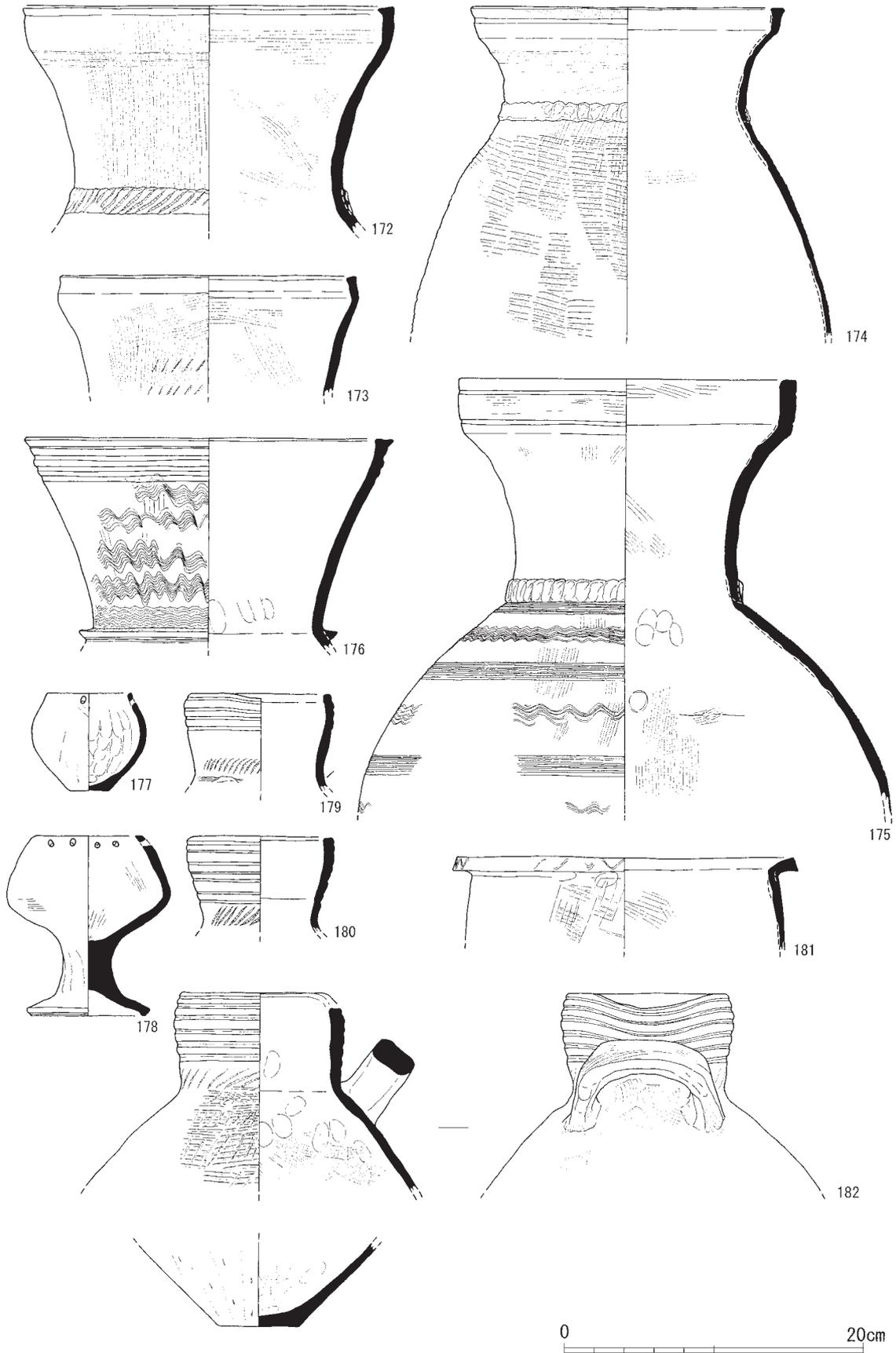
られる。161の頸部突帯には、ハケメ工具原体による刻みが施されている。162の口縁端面は凹線文の後に5本一組の刻みが入れられ、棒状浮文の名残りかと思われる。163の太頸の広口壺は体部下半に下方から上方にかけてのケズリ調整を施す。胎土は在地胎土と変わりはないが、あまり見られない形態である。一方、口縁部の文様構成こそ丹波で一般的に見られるものの、体部の櫛描直線文・列点文と最下段の波状文という文様構成もまたまれである。広口短頸壺も多く出土している(164~171)。その形状は、口縁端部が上下もしくは上方に拡張し、頸部がゆるく外反する。頸部の締めりは弱く、体部は倒卵形を呈する。調整は外面がタタキ後ハケメおよびケズリ調整で内面がハケメおよびナデ調整である。この種の壺は無文が基本であるが、体部半ばに施文を施すものもある。164はヘラによる格子状の刻みで、169は櫛状工具による列点文で飾られる。受口状口縁壺は、口縁部の屈曲がゆるいものが目立つ(172~175)。頸部外面をハケメ調整し、内面をハケメおよびナデ調整する。172の頸部には櫛状工具による刻目突帯が体部と同一化するほどに貼り付けられる。173は頸部に櫛状工具による刻目をもつ。174は指圧痕文突帯をもつが、172同様強く押し付けられている。体部は恐らく倒卵形であることが推測される。受口状口縁壺は、体部が無文のものが主体であるが、175は櫛描直線文と波状文が交互に施されるというめずらしい例である。口縁部上下端には凹線文を、頸部は立体的な指圧痕文突帯をもつ。176は大型の直口壺で、口縁部から凹線文、波状文、断面三角形の貼付突帯で飾る。摂津や播磨の中期末に類例が存在するが、それらには櫛描文をほとんど採用しない。177の小型の無頸壺は、紐孔が二つついていたものとみられる。178の台付無頸壺は、S D 198の中央付近で出土している。中実の脚部をもつ。2個一組の紐孔をもつ。裾部が一部打ち欠かれており、供献土器であると考えられる。179・180は水差の頸部である。体部の大きさは不明である。共に凹線文と櫛描列点文で飾られる。文様構成は大型の水差においても共通する(182)。182の把手の断面は、角の丸い長方形の中央が潰れた



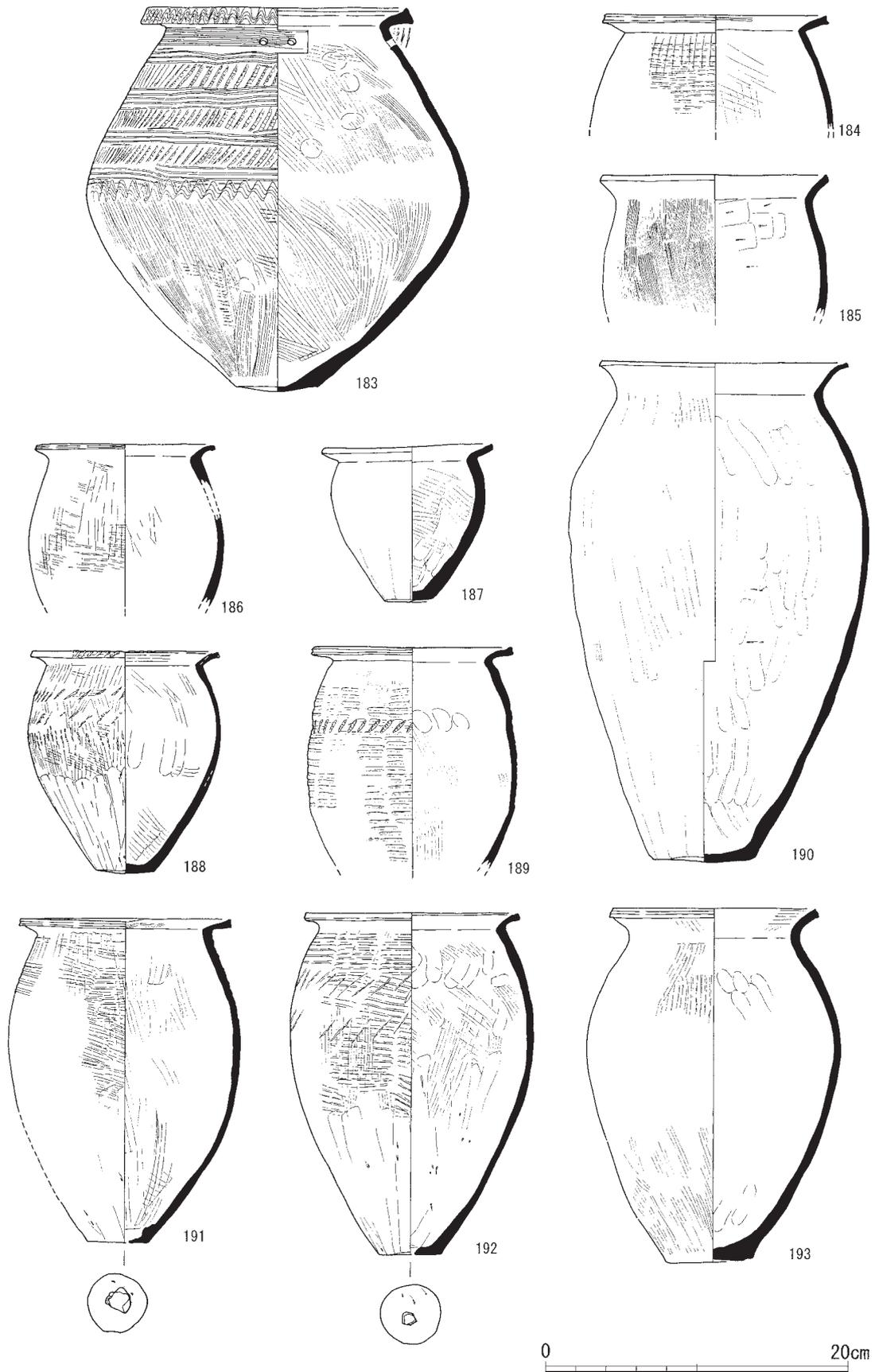
第29図 1地区出土遺物実測図(14)



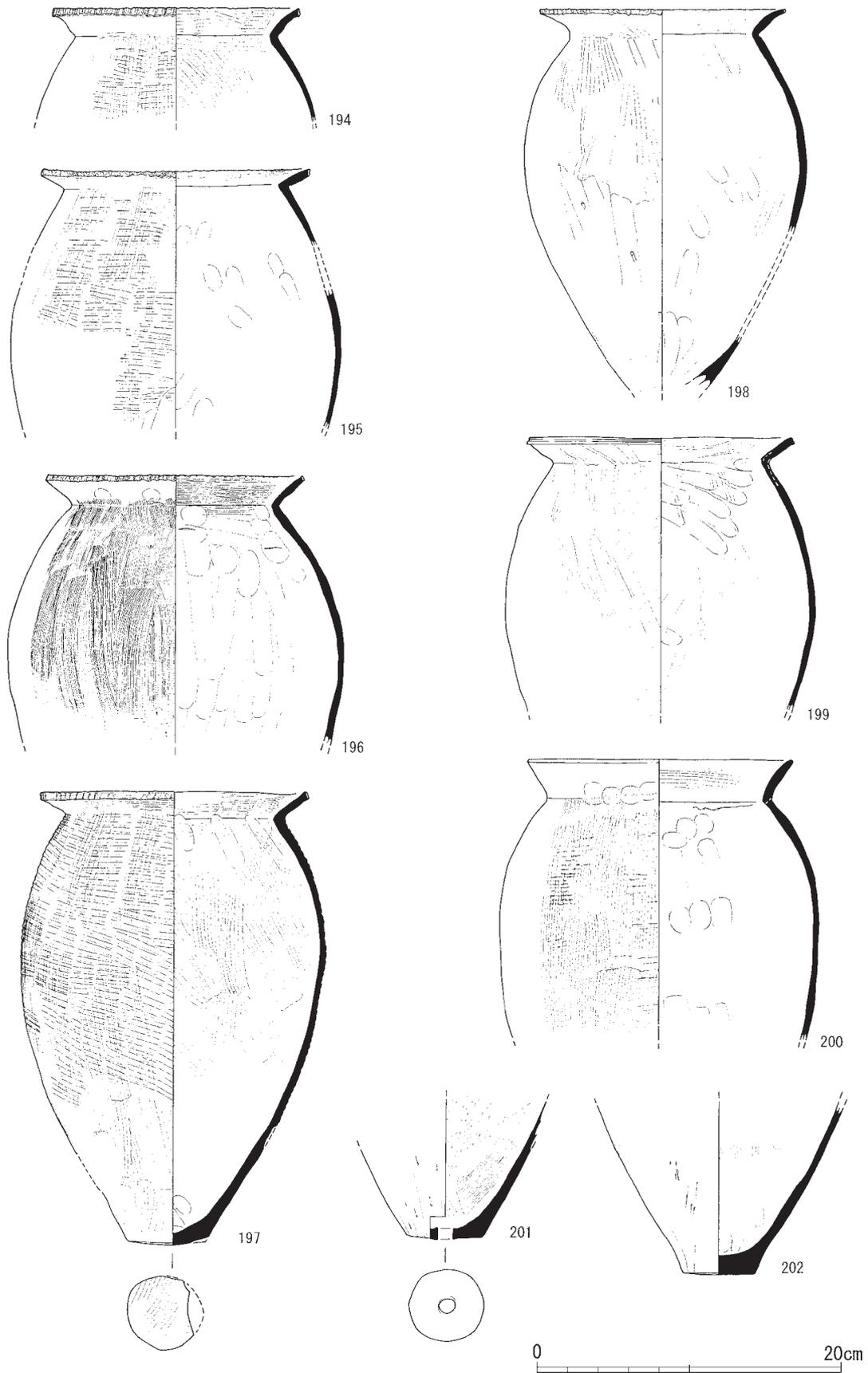
第30図 1地区出土遺物実測図(15)



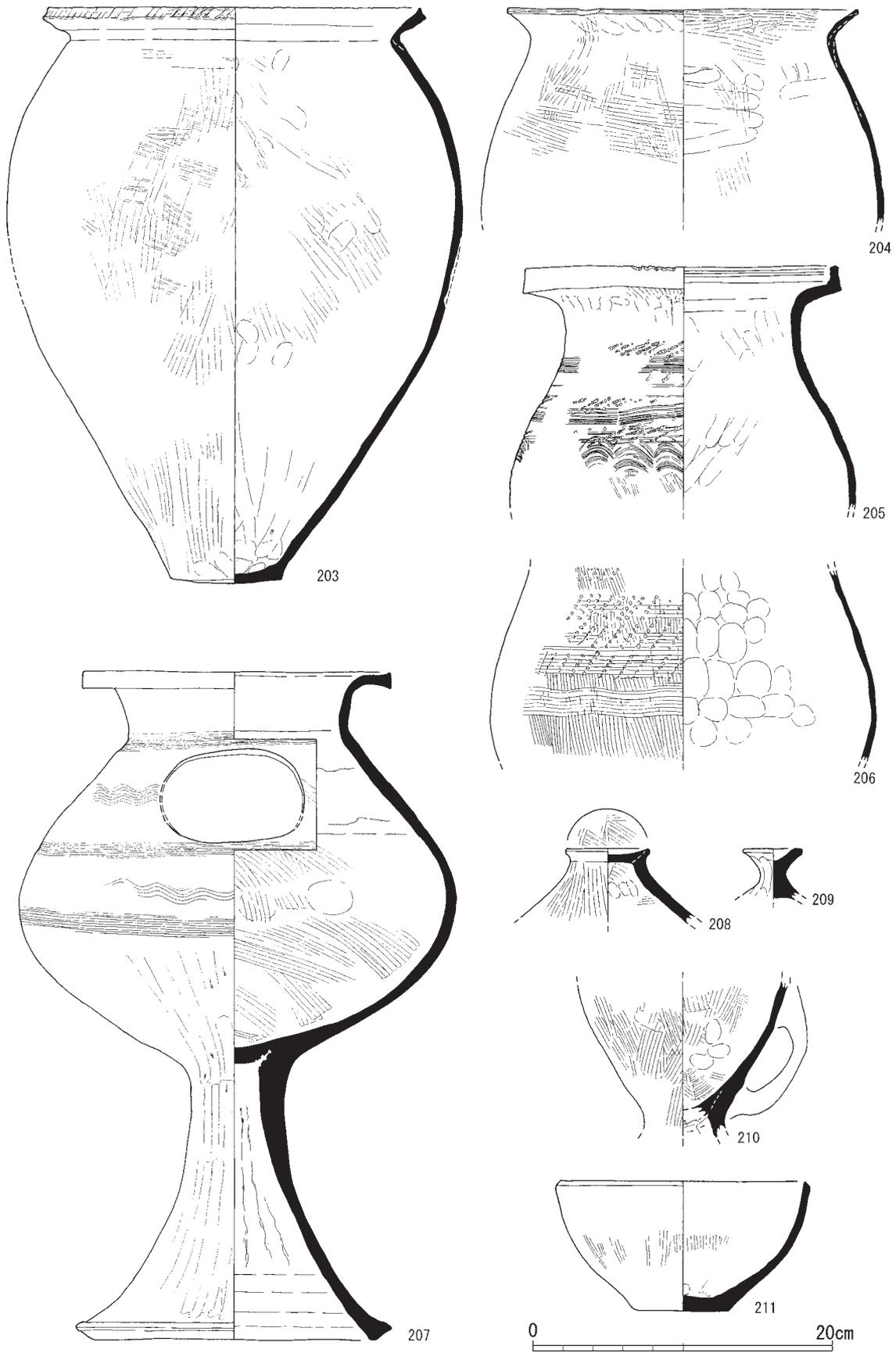
第31図 1地区出土遺物実測図(16)



第32図 1地区出土遺物実測図(17)

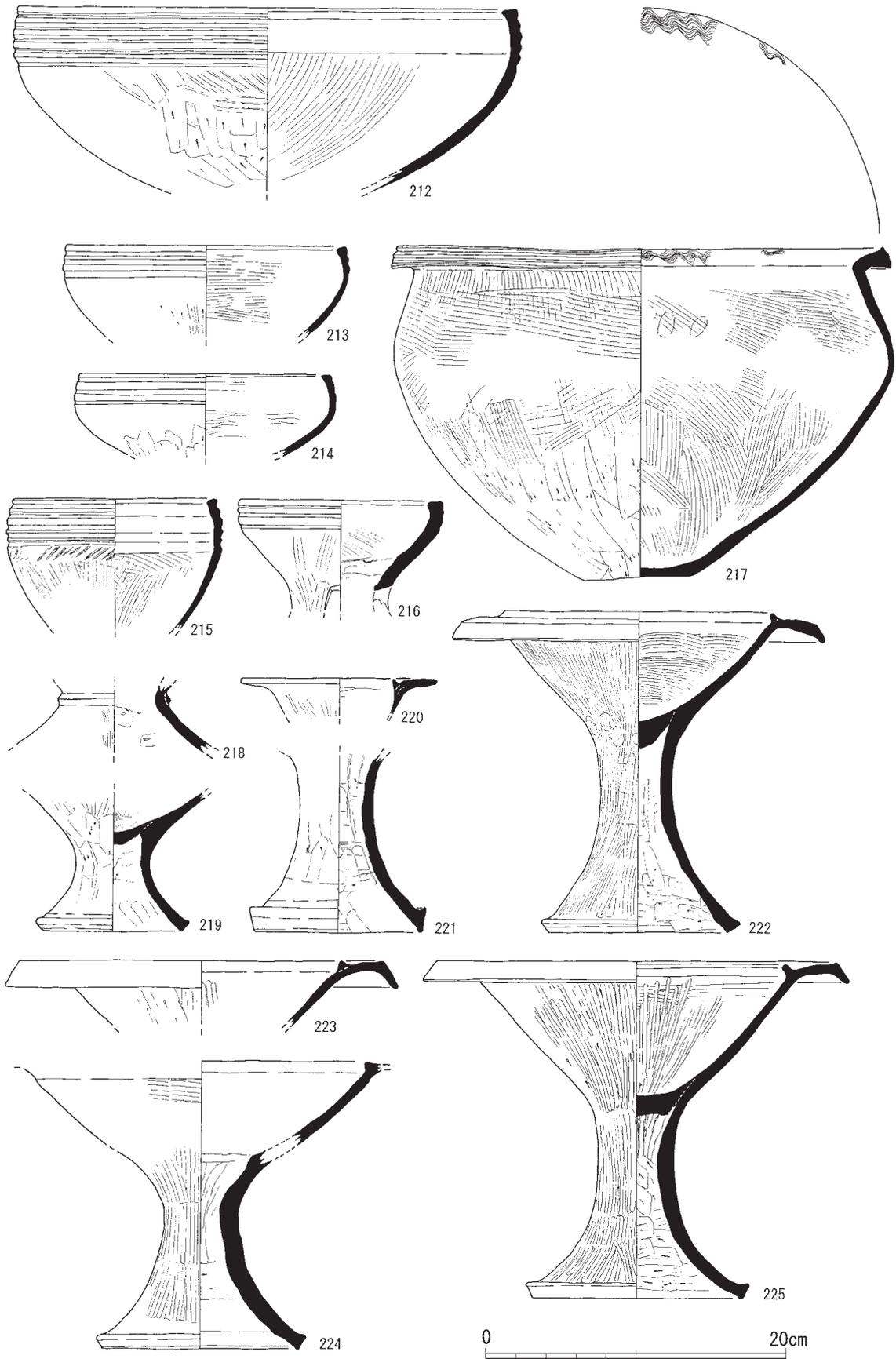


第33図 1地区出土遺物実測図(18)

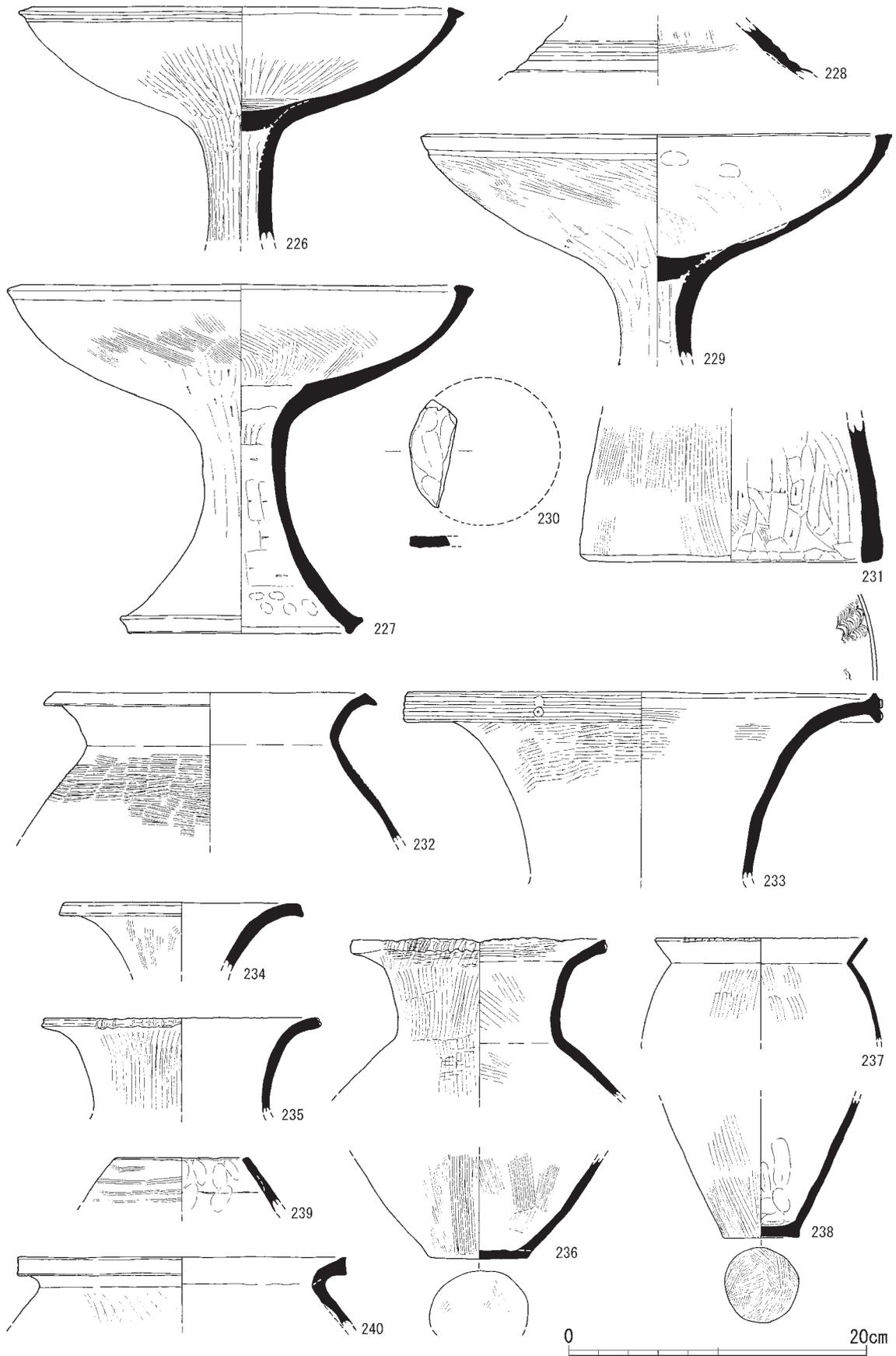


第34図 1地区出土遺物実測図(19)

形状である。外面は上半がタタキ調整のみで、下半がケズリ調整を施す。内面はハケメ調整である。183は「く」字状口縁をもつ広口の壺である。2個一組の紐孔をもつ。体部の文様構成は163の太頸の広口壺と同様で、櫛描直線文、列点文と最下段に波状文というものである。内外共に最終調整はハケメであるが、外面下半には、タテミガキを意識したような原体幅の狭い折り返しのあるタテハケがみられる。甕はばらつきが存在するが、概ね大中小に分かれるようである。口縁部を強く「く」字状に曲げるものと、緩く折り曲げるものがある。体部上半か、半ばで最大径を迎えるものが主体である。小さなものを中心に体部に櫛描列点文を施す個体が存在する(188・189・192)。184はミニチュアの甕で、明らかな二次被熱が認められる。188はほぼ完形の極小の甕で、口縁端部に部分的に刻目を施す。小型の甕(184～186・187・191～193)は、口縁端面に凹線状の凹みをもつか、単純に面をもつのみのもので占める。185は外面を細かなハケメで、内面をケズリ調整する。191・192は底部に穿孔がみられる。中型の甕は、口縁端部に刻目をもつものとそうでないものが半々である。いずれにしても口縁端部の拡張はそれほど認められない。体部をタタキ調整した後ハケメやケズリ調整するもののほかに、タタキ目の目立たないものがある。189は完形の中型の甕で、口縁端部には狭い面をもつ。内外共にナデ調整で、粗雑な作りをしている。189・193は他の個体に比べ、広い底部をもつ。196は非常に目の細かいハケメ調整を施す。197は完形で出土している。体部半ばで張り、やや突出する小さな底をもつ。194・195はこれと同様の個体である。200は、口縁端部に面をもたない。外面はタタキ後ハケメ調整で、内面はナデ調整である。201の甕底部は、焼成前の底部穿孔がみられる。202の甕底部は他の個体と比べ、やや厚めの底をもつ。203・204は大型の甕である。203の口縁端部はやや上方に拡張し、そこに刻目を施す。外面はタタキの後にハケメ調整を施し、内面下半にはケズリ調整がみられる。一方、204は非常に狭い口縁端部をもち、一部指による圧痕がみられる。体部は外面がヨコハケの後にタテハケを施し、内面はナデとハケメ調整である。205はいわゆる近江系の受口状口縁甕である。胎土は在地のものより黒めで長石を多く含む。強い稜をもち、やや内傾気味に直立する口縁部には一部刻目を施す。文様構成は櫛描列点文、直線文で、最下段に近江に特徴的な波状文を施文する。しかしながら粗いハケはみられず、内面はナデ調整である。206の甕体部は205と同様の胎土をもつ。207は胎土が在地のものなので、東海地方を中心に分布する円窓付土器を模倣したものと考えられる。長い脚部に短頸の壺をのせた形状である。玉葱状の形状である上半部は薄い櫛描直線文と波状文で飾られる。脚部の内面はナデ調整のみで、外面にケズリ調整が施される。209は蓋のつまみであると思われる。210は把手付きの鉢で、作りが粗雑である。211は直口の鉢である。台付鉢の多くが凹線文をもつ。212は大型の鉢で、恐らく脚部が付くものと考えられる。外面にはケズリ調整が、内面にはハケメ調整が施される。213・214は212の小型の型式である。215は深めのもので、凹線文の下に櫛描列点文が施される。216は脚部に方形の透しをもつようである。217は「く」字状口縁をもつ大型の鉢で、口縁端部に凹線文を、口縁内部に櫛描波状文を飾る。外面上半はタテハケの後にヨコハケを行い、下半部は上方から下方に向かうケズリ調整をする。219は台付鉢の短い脚部で、外面をケズリ調整する。221・222・224・225の水平口縁高杯はいず



第35図 1地区出土遺物実測図(20)



第36図 1地区出土遺物実測図(21)

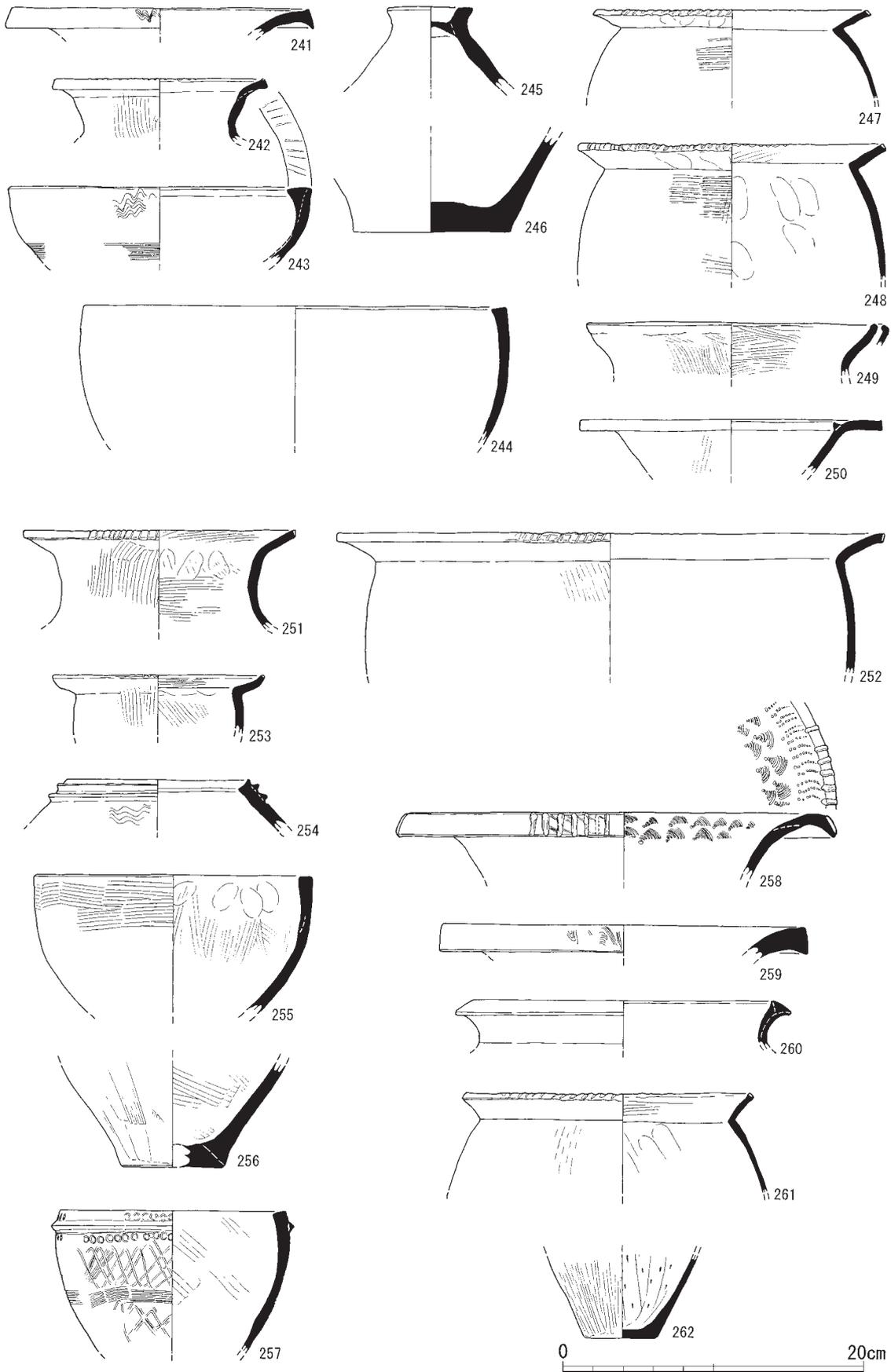
れも脚が長めで、裾端部に拡張気味の面をもつ。224以外は水平部先端が斜め下方に向かって飛び出す形状をしている。220のようなミニチュアの水平口縁高杯も存在する。脚部内面にケズリ調整を行うことが共通するが、杯部や脚部外面の調整についてはバラエティに富む。222・224(杯内面は器壁の摩耗のため不明)は全体がハケメ調整である。221、223は外面ケズリ調整である。225は内外共にミガキ調整である。浅い皿状の高杯(226・227・229)は、杯部内外に拡張気味の口縁端部をもち、その直下に凹線文を施すか、強いヨコナデによって杯部と区別を明確にしている。こちら調整が個体によって異なる。226は内外共にミガキ調整を施し、227・229は杯内面をハケメおよびナデ、杯外面をハケメ調整し脚部外面をケズリ調整する。227は脚部内面は高いところまでケズリ調整を行う。他の2個体も失われた部分にケズリ調整がみられたであろうことが考えられる。台付鉢も高杯もいずれも円板充填法を用いている。228は器台の体部であると思われる。内面にケズリとハケメ調整がみられる。凹線文は浅めである。230は不明の土製品である。231は台形土器の脚部であると思われる。外面をハケメ調整し、内面に上方から下方に向けてのケズリ調整がみられる。

232の広口短頸壺と233の大型広口壺の口縁部は、S D 198とS D 534の境界から出土している。層位は前者の下層と後者の中層にあたるため、S D 198に伴うものとして扱う。土器の形状からみても齟齬はない。232は短く外反する形状で、口縁端部が斜め下方に広がる。233は上下に拡張する口縁端面に凹線文を施し、その上に2個一組の刺突のある円形浮文を貼り付ける。外面の口縁直下にタタキ調整が施されている。

S D 111(第36図234~238) 装飾の無い広口壺(234)と、口縁端部に刻目のみをもつ広口壺(235、236)がある。236の口縁直下と体部にはタタキ目が認められる。237の甕は、体部上半で最大径をもつと考えられる「く」字状口縁甕である。狭い面をもつ口縁端部には刻目をもつ。238は甕底部であるが、236底部と同様に底面にハケメ調整を行っている。

S D 289(第36図239・240、第40図325~328) 239の無頸壺は体部を櫛描直線文で飾る。直線文1本に対する櫛の条数が少ない。内面は接合痕が顕著である。240は口縁をゆるく折り曲げた形状を呈す。口縁端部が上下に広がるが、器壁が厚く、「く」字状口縁甕の初期のものであると思われる。327の広口壺は、口縁端部が斜め下方に大きく垂下する。端面には2条の凹線文が施される。甕は3点掲載した。326は体部にタタキ目をもつが、体部があまり張らない形状である。

S D 540(第37図241~250) 241の広口壺は、口縁端部が上下に大きく拡張し、そこに櫛描波状文を施す。242の広口短頸壺は、外湾気味に立ち上がり折れ曲がって先端の開く形状を呈す。口縁上端を刻目で飾る。246は大きめの壺の底部であると思われる。245は底部にしては充填部が不安定であることから、蓋であると考えられる。247の甕は口縁部の「く」字状の折り曲げが強く、上半で強く張る形状のようである。一方、248は「く」字の折り曲げは強めだが、体部があまり張らない形状である。調整は共通する。249は、ゆるい受口状を呈する甕口縁で、内外に顕著なハケメ調整を施す。作りは粗雑である。鉢は有文のもの(243)と無文のもの(244)があるが、いずれも直口である。水平口縁高杯(250)は、口縁部先端がわずかに上方に飛び出す。



第37図 1地区出土遺物実測図(22)

S D 571 (第37図251～254) 251の広口壺は、筒状の頸部に外反する口縁部をもつ。調整はハケメ、ナデのみである。253の小型甕は、体部最大径が口径を下回る。器壁が厚めである。252の大型甕の体部も張りが見られないようである。いずれも刻目をもつ。254の無頸壺は口縁直下を2条の突帯で飾る。

S D 548 (第37図255・256) 直口で無文の鉢(255)は、内外をハケメ調整している。256の底部は、その粘土板の周囲に粘土紐を積み上げる成形法が断面から観察できる。外面は放射状のタテハケを施す。

S D 342 (第37図257) 257の鉢は、円形竹管文や断面三角形の突帯、櫛描斜格子文と直線文で飾る。類似の文様構成のものがS D 549でも出土している。

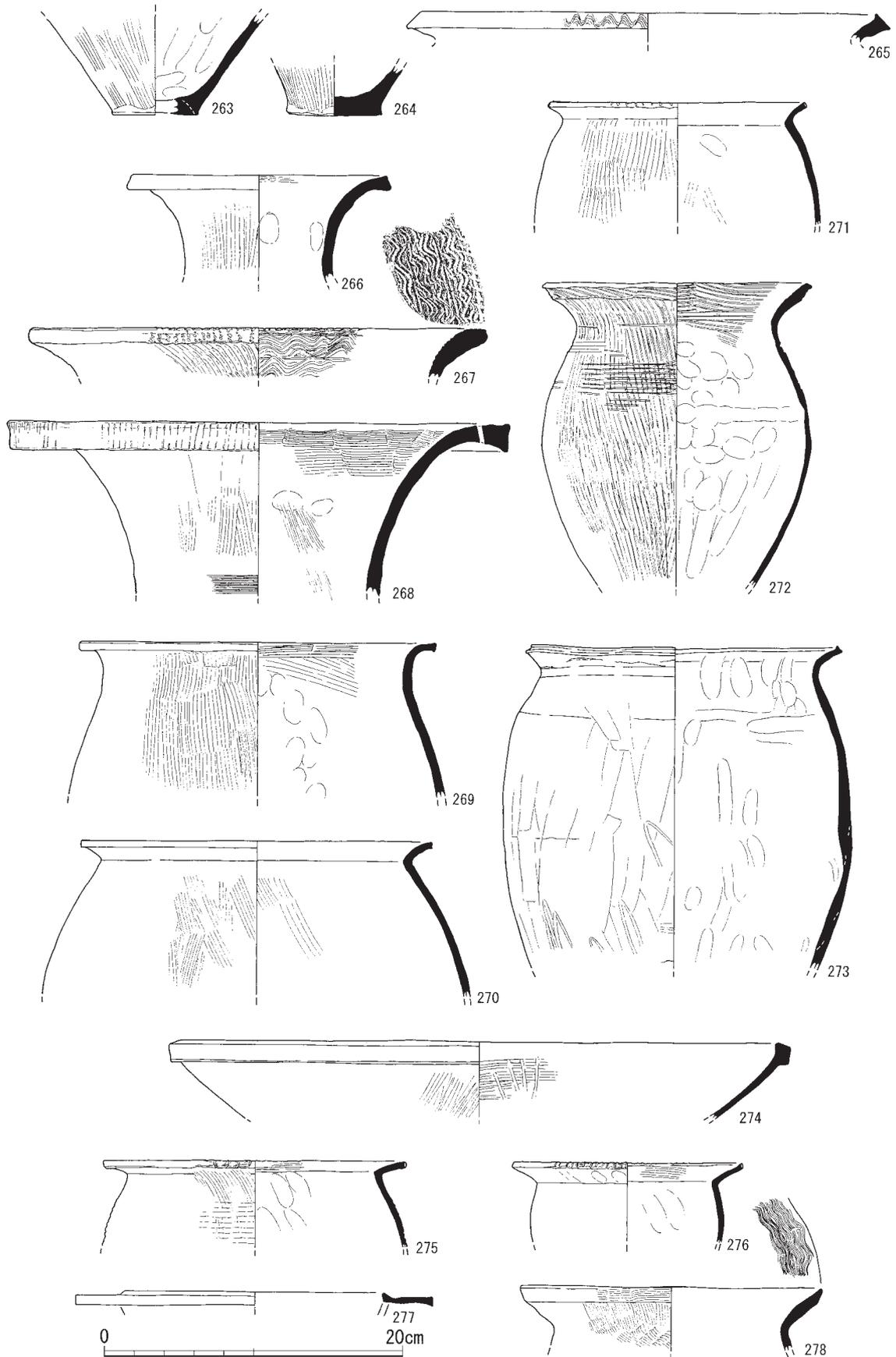
S D 320 (第37図258～262) 258の広口壺は、口縁部が大きく垂下し、そこに櫛描波状文と棒状浮文を施す。口縁内面は扇形文と列点文で飾られ、高い加飾性が窺われる。259の広口壺口縁は、断面が三角形を呈する。端面には櫛描波状文が施される。260は広口短頸壺の口縁であると思われる。261の甕は、口縁部先端が狭まる形状である。外面はハケメ調整のみである。262は甕底部で、外面をハケメ、内面をケズリ調整する。

S D 13 (第38図263～265) 263・264の底部はいずれも底が厚い。265は、上下に拡張する口縁端面に櫛描波状文を施す。恐らく「く」字状口縁の鉢の口縁部であろう。

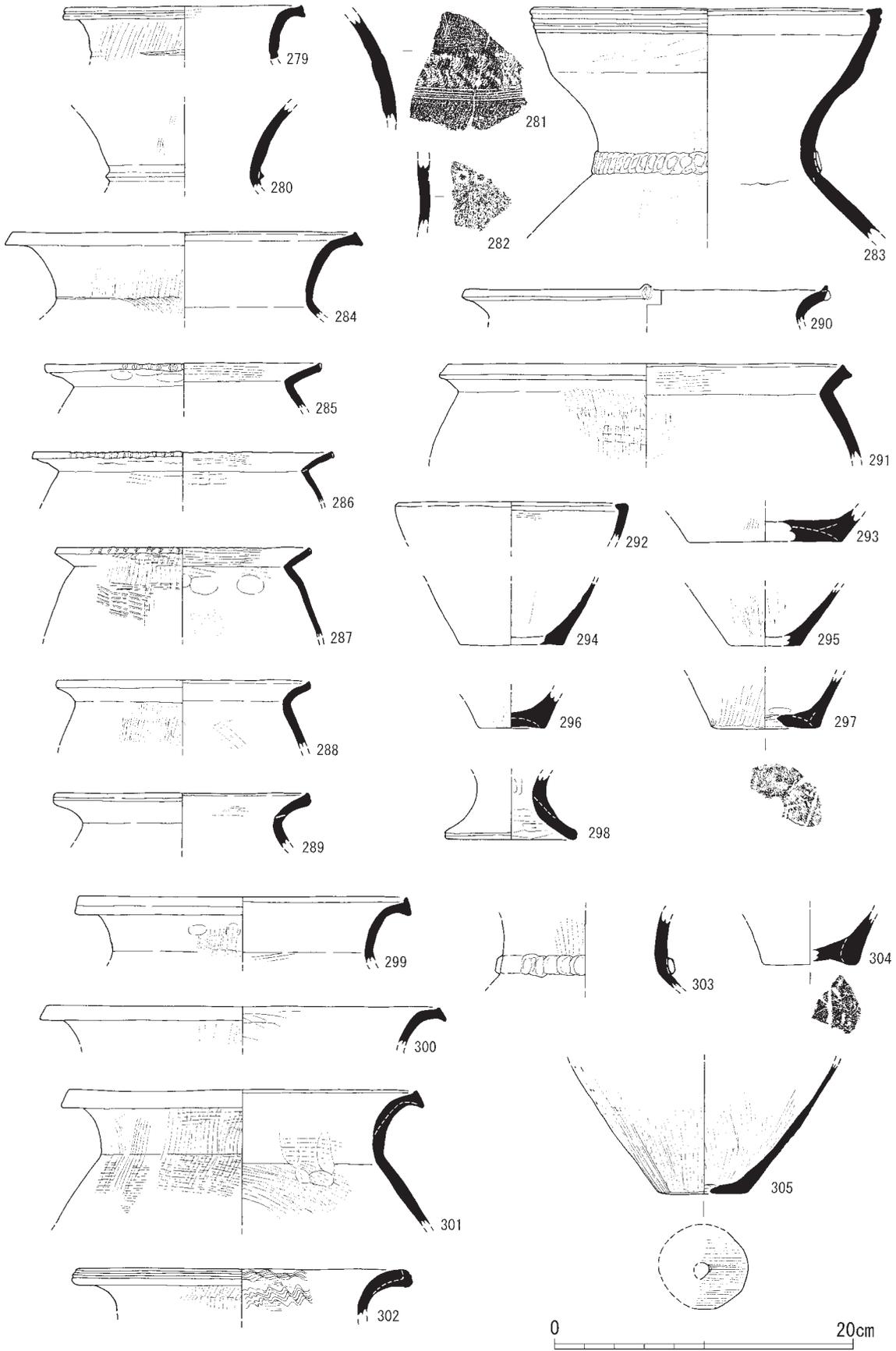
S D 96 (第38図266～274) 多数の破片が出土し、なかには完形に近い個体もみられた。無文の広口壺(266)と有文の広口壺(268)がある。いずれもハケメ調整である。268は大型の広口壺で、口縁端部に刻目を、頸部に櫛描直線文をもつ。また、2個一組の紐孔が穿たれている。甕は大きなものが多く、折り曲げ口縁のもの(269・273)、「く」字状口縁のもの(270・271)、近江系の受口状口縁のもの(272)がある。271のみ口縁端部に刻目が入る。269と270はハケメ調整を施す。272は口縁端部が上方につまみ上げられた形状であるが、器壁の厚さに部分的な差があり、接合痕も目立つという粗雑な作りである。外面は板、内面は指による全面ナデ調整であるが、外面には一部ミガキ調整がみられる。273は粗いハケメ調整をもつ。頸部直下にばらつきのある直線文をもつ。胎土からみても、褐色系で長石や雲母を含み、在地とは明らかに異なる胎土をもつ。同様の胎土をもつ267は、厚い口縁部をもち、外面には粗いハケメを施す。口縁内面には強い櫛描波状文をもつ。口縁先端のみの残存なので、断定はできないがこちらも近江系の甕であると思われる。274は、貼り付け口縁の大型鉢である。

S D 157 (第38図275～278) 甕3点と高杯1点を掲載した。甕は体部の張る275、体部最大径が口径を下回る276、近江系の278がある。275・276はともに口縁端部に刻目をもつ。278は粗いハケメと口縁内に粗い櫛描波状文をもつ。胎土は褐色で石英や長石が目立つ。

S K 538 (第39図279～298) 広口壺頸部280は断面三角形の突帯をもつ。広口短頸壺は標準的な口径のもの(284)と小型(279)のものがあり、279は頸部と体部の境界に櫛描直線文を施す。受口状口縁壺283は、口縁部の屈曲がゆるく、口縁部上端には凹線文が入る。甕は「く」字口縁の強い屈曲のもの(285～287・291)、ゆるい屈曲のもの(288・289)、折り曲げ口縁のものがある(290)。



第38図 1地区出土遺物実測図(23)



第39図 1地区出土遺物実測図(24)

口縁端部は面を広くもつものが主体である。288・289は口縁端部を上方に軽くつまみ上げている。290は甕口縁の破片であるが、一部何らかの工具を押しあてている。292は椀形の鉢であるが、口縁端部を内面に突出させる。底部が多数出土しており(294～297)、断面から様々な成形法が観察可能である。297は底面に木葉痕がみられる。298の脚部は内面をケズリ調整する。

S K 572(第39図299～第40図311) 広口壺頸部303には、指圧痕文突帯が貼り付けられる。広口短頸壺はゆるく立ち上がり、端部を上下に拡張している(299～301)。302の広口壺口縁は、内面に櫛描波状文を、口縁端面に凹線文をもつ。304の底部には、木葉痕が上げ底部に及ぶ。305の底面には穿孔がみられる。306の「く」字状口縁甕は、タタキの後にハケメ調整を施す。口縁端部には刻目をもつ。底部(308・310・311)はいずれも作りが薄く、底面にも調整を行っている。307の「く」字状口縁鉢は、口縁端部に7個一組の刻目を施す。体部は櫛描列点文で飾る。309の高杯は、体部中位で屈曲し立ち上がる形状である。屈曲部に1条の凹線文を施す。杯部外面はケズリ調整である。脚部は柱状のようで、絞り痕がみられるものの、器壁が薄い。

S K 591(第40図312・313) 313は小型の広口短頸壺で、口縁部が強い屈曲をもって外方にのびる形状である。312は近江系の受口状口縁の甕で、明瞭な屈曲をもち、立ち上がる。口縁内面に櫛描列点文を施す。褐色胎土である。

S K 569(第40図314・315) 甕はいずれも「く」字状口縁で、口縁端部に刻目をもつ。

S K 563(第40図316) 大型甕の口縁部である。口縁部の裏側までタタキ目が及ぶ。

S K 502(第40図317～323) 折り曲げ口縁の甕(318・321)と「く」字状口縁の甕(322)があるが、いずれも体部の張りが弱い。323は大型の直口壺である。口縁端面にヘラ描斜格子文が施される。底部は、円板充填で薄く作った319と厚底の320がある。320は底面に木葉痕がみられる。

S K 584(第40図324) 薄い壺底部である。

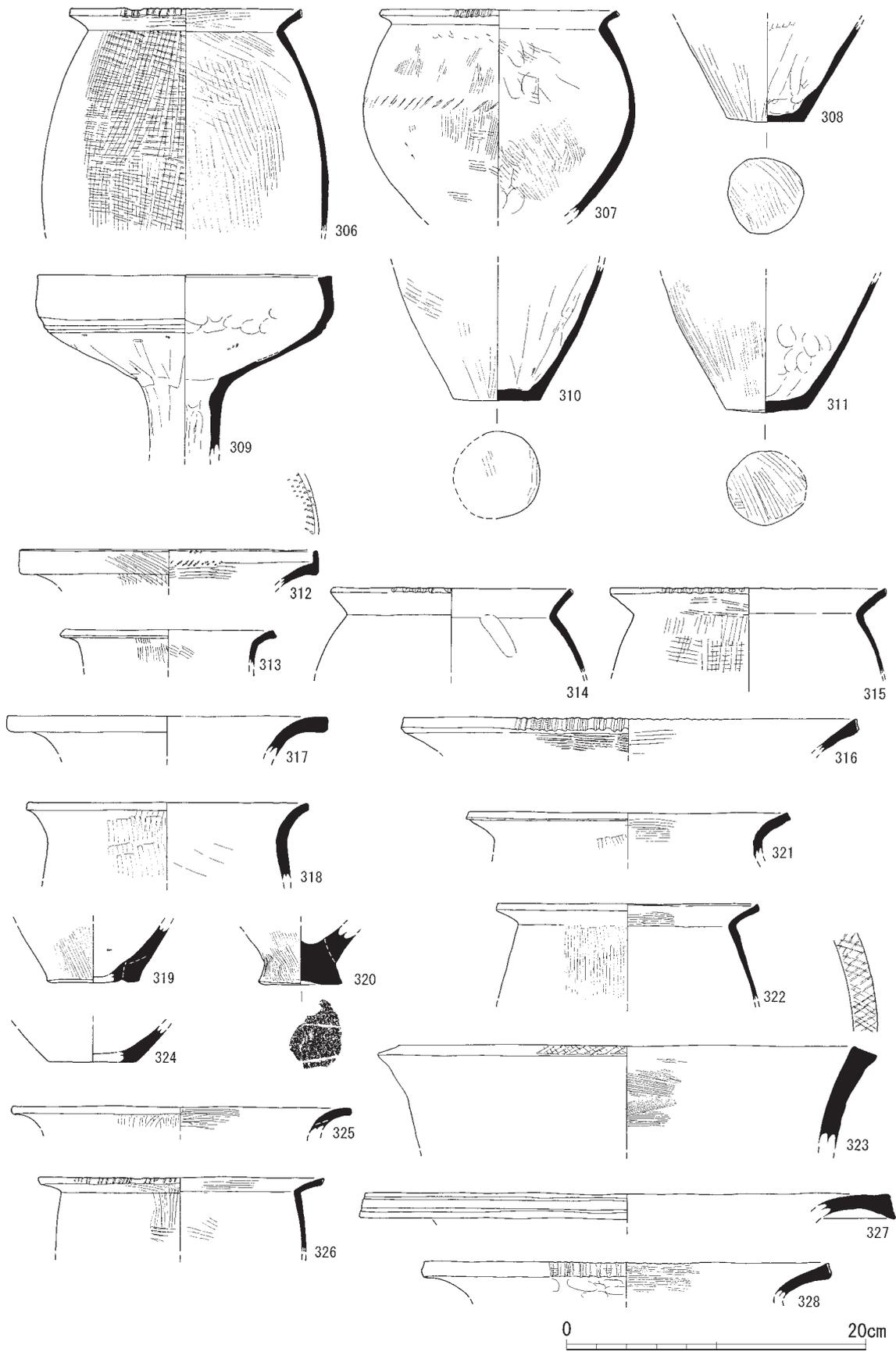
S K 257(第41図329～332) 329の広口壺頸部は、櫛描直線文が数条にわたって施文される。330は甕底部である。厚めの上げ底で、木葉痕が顕著である。

S K 620(第41図333) 厚い口縁端部をもつ広口壺である。

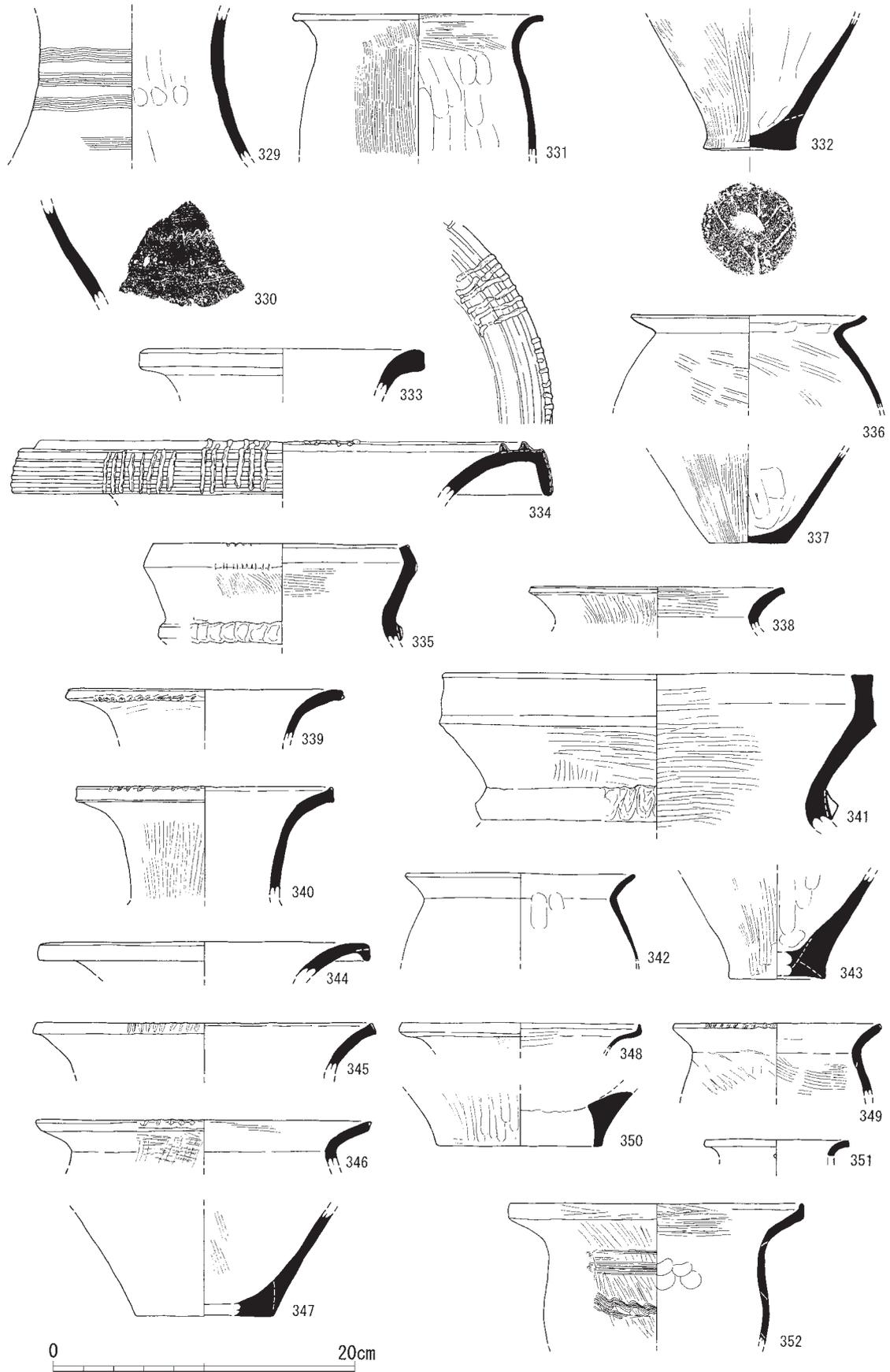
S K 428(第41図334～337) 334は口縁内突帯をもつ垂下口縁の広口壺である。垂下部に凹線文と棒状浮文を施す。類似の個体がS D 549で出土している。335の受口状口縁壺は、口縁部が内傾気味に立ち上がる。頸部には立体的な指圧痕文突帯が貼付けられる。336の「く」字状口縁甕は、口縁部が外湾する。体部が半ばで張る形状であると考えられる。337の底部は内面ケズリ調整である。

S K 419(第41図338) ゆるい「く」字状口縁壺の口縁部である。内外共に強いハケメ調整を施す。

S K 61(第41図339～343) 339・340の広口壺口縁は刻目をもつ。341の受口状口縁壺は、口縁部の立ち上がりが明瞭な個体である。頸部の指圧痕文突帯は強く貼り付けられるが、立体的である。342の「く」字状口縁甕は、口縁部が外反する形状である。343の底部は厚く、作りが複雑である。



第40図 1地区出土遺物実測図(25)



第41図 1地区出土遺物実測図(26)

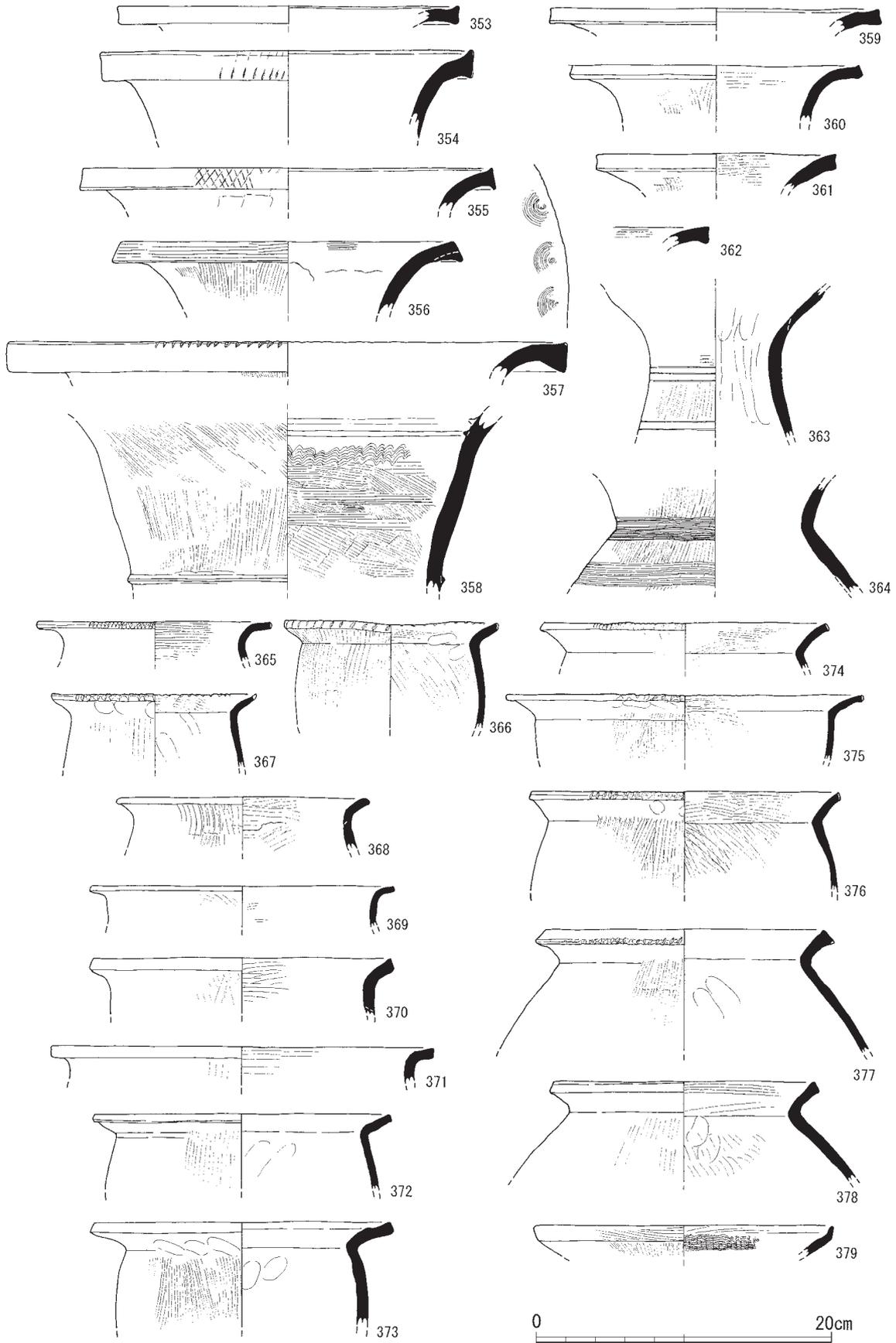
S K 64 (第41図344~348) 344は垂下口縁をもつ無文の広口壺である。345は刻目をもつ単純な形状の広口壺であると思われる。346は、口縁の折り曲げがややゆるい「く」字状口縁甕である。口縁外面に及ぶタタキ目がみられる。347は壺底部である。348は受口状口縁甕の口縁部であると考えられる。胎土は在地の胎土に近いものである。

S K 69 (第41図349) 349の折り曲げ口縁甕は、口縁端面に刻目を施す。体部は内外ともにハケメ調整である。

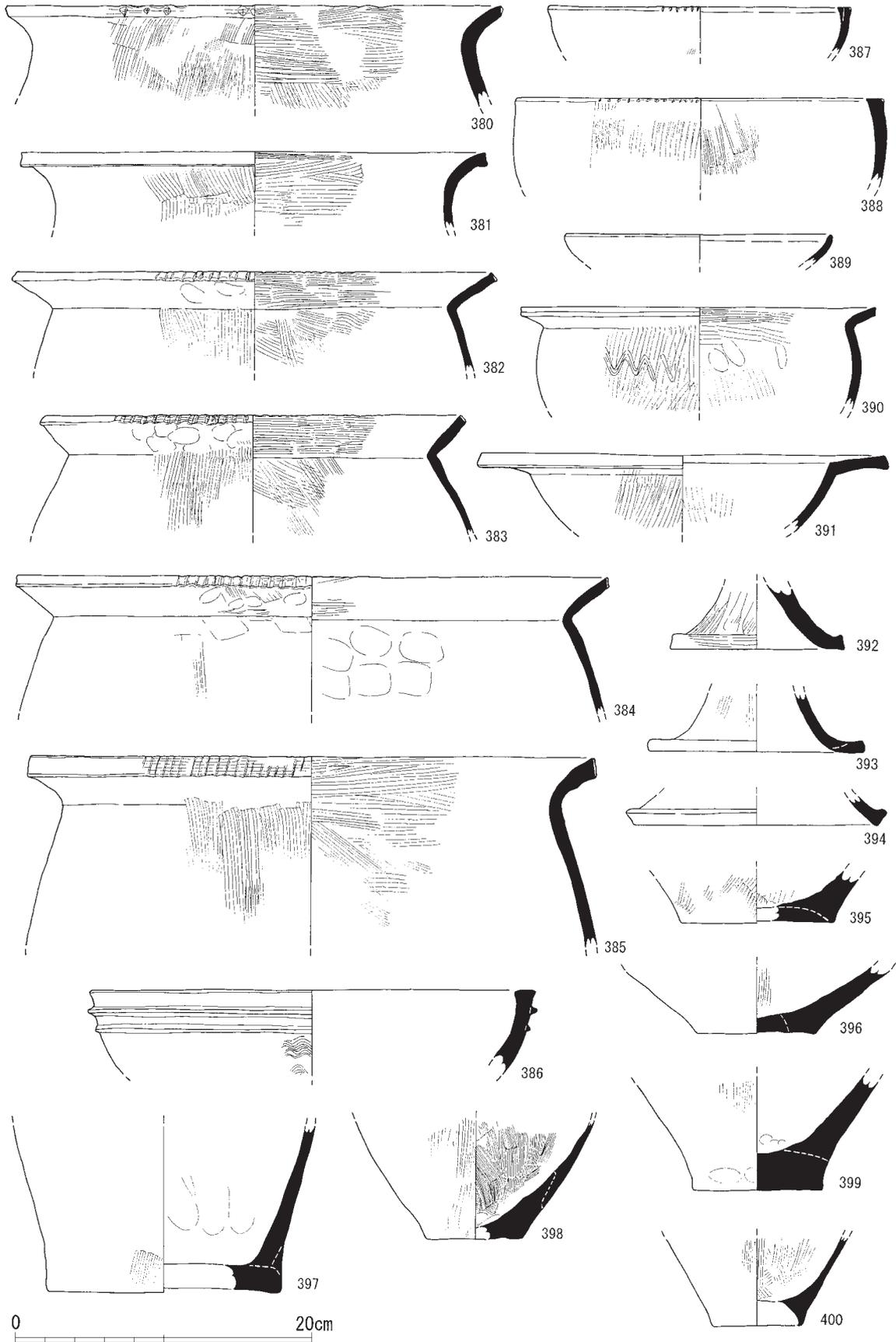
S K 1080 (第41図350・351) 大型壺底部が出土している(350)。外面はタテミガキ調整である。成形時の接合部で剥離している。351の小型の壺は、口縁直下に穿孔があり、2個一組の紐孔が穿たれていたものと思われる。

S K 1147 (第41図352) 近江系の受口状口縁甕である。ややゆるめに直立する口縁部をもつ。細かい櫛描直線文と波状文で飾る。褐色胎土で石英と長石を多く含む。

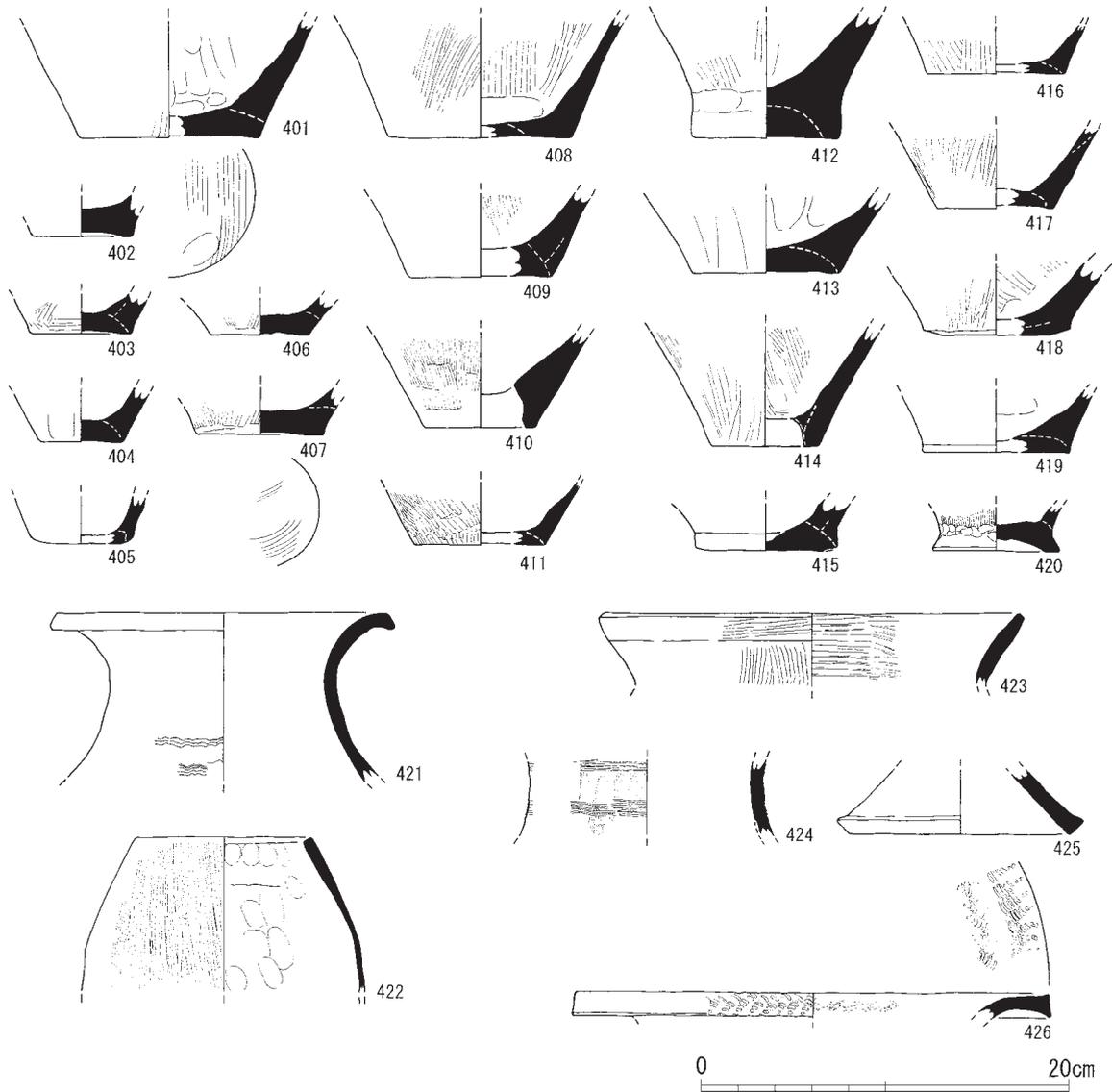
S K 420 (第42図353~第46図420) 破片を中心に土器が大量に出土した。この遺構に関しては、口縁と底部を全て図化し掲載した。装飾の比較的希薄な広口壺(353~356、359~361)と、装飾豊かな大型広口壺(357・358)がみられる。口縁端部の形態は、上方もしくは上下に拡張するものや広い面をもつものなど多様である。調整はハケメが主体である。353・354をはじめ、口縁端部に刻目をもつものがある。大型の357は口縁内に半円に近い櫛描扇形文が描き出される。358は粗い作りであるが、口縁内に櫛描波状文をもつなど装飾的である。363・364は広口壺頸部から体部にあたる。櫛描文は直線文のみがみられる。甕(365~385)は折り曲げ口縁のものと、張りのない「く」字状口縁のものが主体であるが、まれに張りの強い「く」字状口縁をもつものが存在する(377・378)。いずれの形態も内外をハケメおよびナデ調整をする。口縁端部に刻目をもつものともたないものがほぼ同数である。367はほかより深い刻目をもつ。385は櫛状工具を用いて刻目を施している。また、形状の特徴として、端部に面をもつ個体も多い。379は近江系の受口状口縁甕で、粗いハケメと口縁内面に細かい波状文をもつ。褐色の胎土である。鉢は、直口碗形のもの(386~388)と「く」字状口縁をもつもの(390)がある。前者は口縁端部をやや内外に拡張する。後者は面をもつ形状である。いずれも、内外共にハケメ調整を施すものが多い。386は2条の突帯をもつ。387・388は刻目をもつ。390は、体部最大径付近に暗文のような波状文が施される。391の水平口縁高杯は、口縁内に強い稜をもち、端部の垂下しない水平口縁がのびている。内外共にハケメ調整である。脚部は個体差が大きい。392は裾端部に大きな面をもち、そこにハケメ調整をする。形状や器壁の厚さから、円板充填法を用いない形状のものであると推測される。393は、裾端部がゆるく曲がって、広い面積が接地する形状である。394は、裾端面がやや上方に拡張を見せる。底部が多数出土している。成形法の分かるものが多くあり、いずれも底面となる粘土円板の周りに粘土紐を巻いて作るものであり、底部円板充填はみられない。400・410は、接合部で剥離している。396~399は、その形状から、確実に壺底部であるといえる。397は張りのない特異な形状を呈する。多くは平らな底面から斜め上方向に直線的に器壁がのびる形状である。420のみ明確な上げ底である。多くは甕底部であると考えられるが、いずれも同様のハケメ及びナデ調整であ



第42図 1地区出土遺物実測図(27)



第43図 1地区出土遺物実測図(28)



第44図 1地区出土遺物実測図(29)

るので、壺底部との区別がつきにくい。

S K 166(第44図421・422) 広口壺口頸部と無頸壺を掲載した。421の広口壺は口縁端部がわずかに斜め下方にのびる。頸部には櫛描波状文が飾られる。422の無文の無頸壺は、外面ハケメ調整で内面はナデ調整である。接合痕が観察できるやや粗雑なものである。

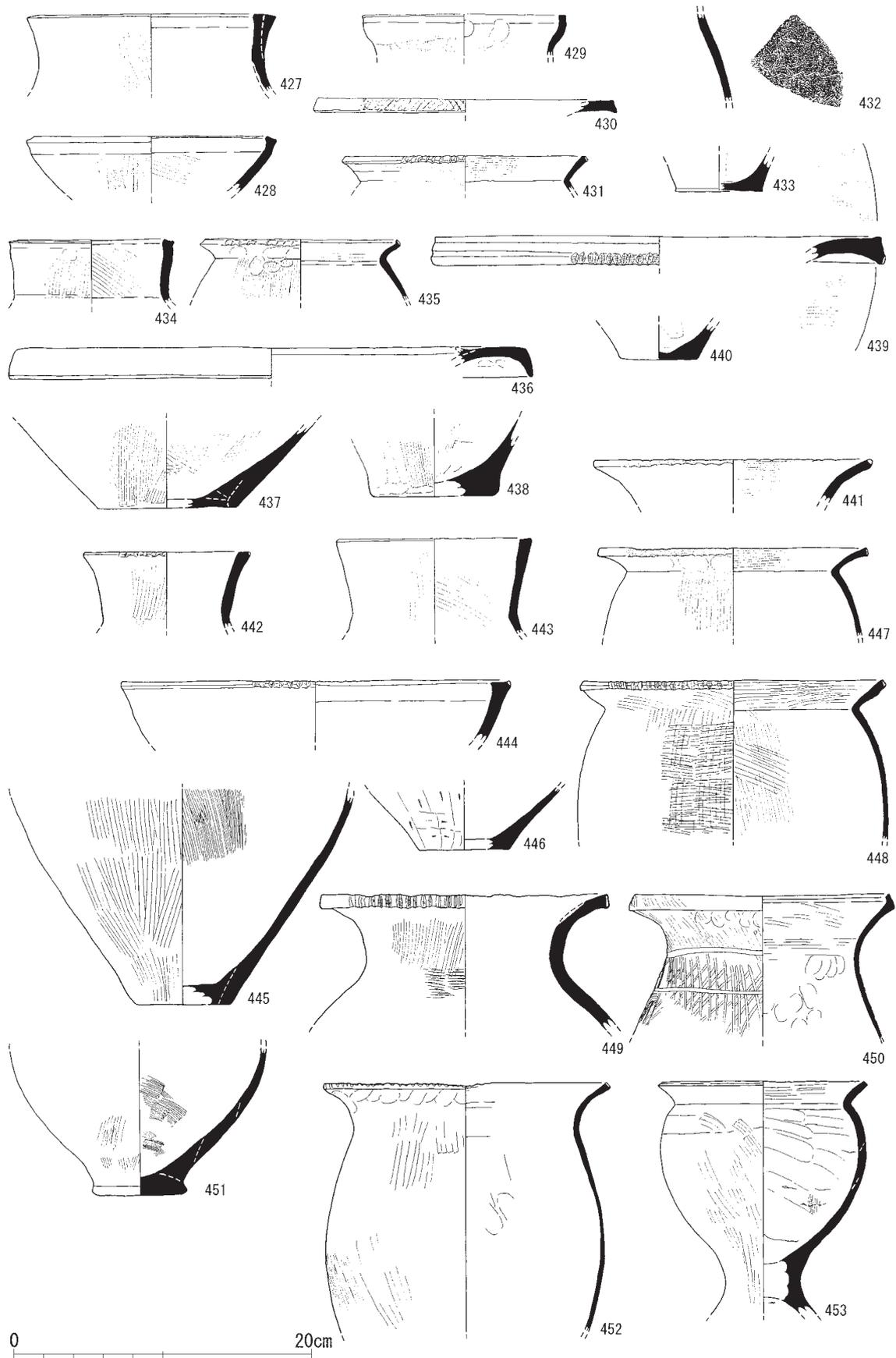
S X 246(第44図423~425) やや受口状の甕口縁と壺頸部、脚裾部を掲載した。423の甕は、粗いハケメをもち、近江系のものである。424の壺頸部は櫛描直線文で飾る。ハケメ調整である。425の脚裾部は、裾端部がやや上方に拡張する。

S K 213(第44図426) 口縁端面と口縁内面を全て扇形文で飾った広口壺である。口縁端部がやや上下に拡張する形態である。

S P 27(第45図427) 大型の直口壺口頸部である。器壁が厚い。

S P 53(第45図428) 直口の鉢である。口縁端部が内外に広がる。

S P 41(第45図429) 屈曲のゆるい受口状口縁壺の口縁部である。



第45図 1地区出土遺物実測図(30)

S P 50(第45図430) 広口壺口縁部である。端面にヘラ描きの斜格子刻目が入る。

S P 37(第45図431) 「く」字状口縁の甕口縁で、丸みのある端面が刻目で飾られる。

S P 120(第45図432) 壺体部片である。条数の少ない粗雑な波状文が施されている。

S P 127(第45図433) 広めの底面をもつ甕底部である。

S P 180(第45図434～438・440) 底部を中心に6点掲載した。434は、短頸壺の口頸部である。口縁端部が強いヨコナデによって、外方につまみ出される形状である。体部は欠損しているが、恐らくタタキ調整がなされているであろうことが想定される。435の甕は「く」字状口縁で、刻目をもつ口縁端部が上方に拡張している。436は水平口縁高杯である。水平部先端が垂下する。437・438はそのプロポーションから壺底部であると考えられる。いずれも内外ともにハケメ調整を施す。440の甕底部は内面にケズリ調整を施し、底面が薄く作られている。

S P 104(第45図439) 大型の広口壺の口縁部である。口縁下端に深い刻目をもつ。また、断面の形状から、当遺跡内でも古相を示すものであると考えられる。

S P 187(第45図441～448) 多数の弥生土器が出土している。441は全体が無文で口縁端部に刻目をもつ広口壺である。442・443は直口壺口頸部である。体部から外傾気味にのびる口頸部をもつ。442のみ口縁端部に刻目をもつ。甕は「く」字状口縁甕であり(447・448)、いずれも刻目をもつ。447は内湾気味にのびる口縁部をもち、448はまっすぐにのびる口縁部をもつ。443は刻目をもつ直口の鉢である。446は壺底部で、445は甕底部であると思われる。446は外面にケズリ調整を施す。

S P 209(第45図451) 突出する底部をもつ壺下半部である。内外共にハケメ調整をするが、内面のハケメが非常に細かい。

S P 202(第45図452) ゆるく外反する口縁部をもつ甕である。

S P 188(第45図449・450・453) 449の広口壺にはタタキ目がみられる。450は受口状口縁の甕である。外面ハケメ調整、内面にナデ調整を施す。文様は斜格子文と直線文を太めの工具で1本ずつ施したものである。調整・形態共に近江のものと共通するが、在地胎土である。453は台付甕である。寸詰まりの形状を呈す。

S P 189(第46図454) 広口壺の口縁部である。口縁外面に波状文を施す。

S P 329(第46図455) 丸みのある面をもつ甕口縁である。

S P 234(第46図456) 外湾する口縁部をもつ受口状口縁壺である。ハケメ工具による刻目をもつ頸部突帯である。

S P 330(第46図457～459) 457は、口縁部が強く折れ曲がる広口短頸壺である。459の受口状口縁壺は、直立する口縁をもつ。458は鉢体部かと思われる。

S P 350(第46図460) 垂下する口縁をもつ広口壺口縁部である。

S P 419(第46図461) 無文の広口壺口縁部である。

S P 334(第46図462) 刻目をもつ「く」字状口縁甕である。

S P 386(第46図463) 大型の折り曲げ口縁の甕である。



第46図 1地区出土遺物実測図(31)

- S P 442(第46図464) 甕底部である。内外に細かいハケメがみられる。
- S P 363(第46図465) 折り曲げ口縁の甕である。折り曲げがやや強い。
- S P 441(第46図466) 丸みのある口縁端部をもつ折り曲げ口縁の甕である。
- S P 449(第46図467) ゆるく外湾する口縁部をもつ受口状口縁甕である。凹線文で飾られる。
- S P 448(第46図468～470) 「く」字状口縁甕(468)と折り曲げ口縁の甕(469)がある。470は底面に木葉痕が残る。
- S P 468(第46図471) 内湾しながらのびる口縁をもつ「く」字状口縁甕である。
- S P 489(第46図473・478) 広口壺は、垂下口縁をもち、口縁内を2列の櫛描扇形文で、口縁端面を櫛描波状文で飾る(473)。「く」字状口縁甕は直線的で外傾する口縁部をもつ。
- S P 475(第46図472) 口縁端部に広い面をもつ、大型の「く」字状口縁甕口縁部である。
- S P 590(第46図474・475) 折り曲げ口縁の甕と底部である。
- S P 1015(第46図476) 外傾する口縁部をもつ、広口短頸壺である。
- S P 601(第46図477) 甕底部であると思われる。
- S P 1025(第46図479) 折り曲げ口縁の甕である。
- S P 1076(第46図480) 木葉痕を残す底部である。
- S P 1084(第46図481) 垂下口縁をもつ広口壺の破片である。櫛描扇形文を口縁端面と内面にもつ。口縁端面のものは、半円に近い形状である。
- S P 1098(第46図482) ケズリ調整を施した台形土器である。15次調査では、多数の台形土器を確認しているが、形状も調整も個体差が激しい。
- S P 1092(第46図483) 壺体部片である。櫛描斜格子文と直線文で飾られている。
- S P 1136(第46図484) 折り曲げ口縁の甕である。外面のハケメが粗い。
- S P 1167(第46図485) 広口短頸壺の口縁であると考えられる。
- S P 1145(第46図486) 「く」字状口縁甕である。内外共にハケメ調整で仕上げる。底部がすぼまる形状を呈す。顕著な接合痕が観察される。
- S P 1146(第46図487) 甕底部かと思われる。底面に丸みを帯び、中央がやや上げ底になっている。

(谷上真由美)

2)奈良・平安時代の遺構・遺物

A. 検出遺構

1 地区で検出した奈良・平安時代の遺構として掘立柱建物跡、柵、土坑などがある。遺構は1地区北半で分布密度が高く、南半では希薄である。また、掘立柱建物跡を構成しない柱穴、ピットなども多数検出された。以下、主要な遺構について概観する。

なお、掘立柱建物跡の復原については、現地調査段階で、一定程度の復原作業がなされている



第47図 1地区検出遺構配置図(奈良・平安時代、1/400)

が、遺構密度が極めて高く、整理作業段階で改めて検討を行っているため、現地説明会段階や、『京都府埋蔵文化財情報』第103号執筆段階とは異なっている点をお断りしておく。

掘立柱建物跡SB1-01(第48図) 調査区北東部で検出された南北3間、東西2間の総柱掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北6.3m、東西4.1mを測る。主軸方位は座標北から西に振る。

柱穴は一辺0.6～1mの不整な方形を呈するものと不整な円形のものがみられる。断面形は、柱痕部分のみを一段掘り下げた形態のものと、素掘りのものが混在している。また、柱痕跡の確認できるものから、直径30cmの柱が使用されていたものと考えられる。

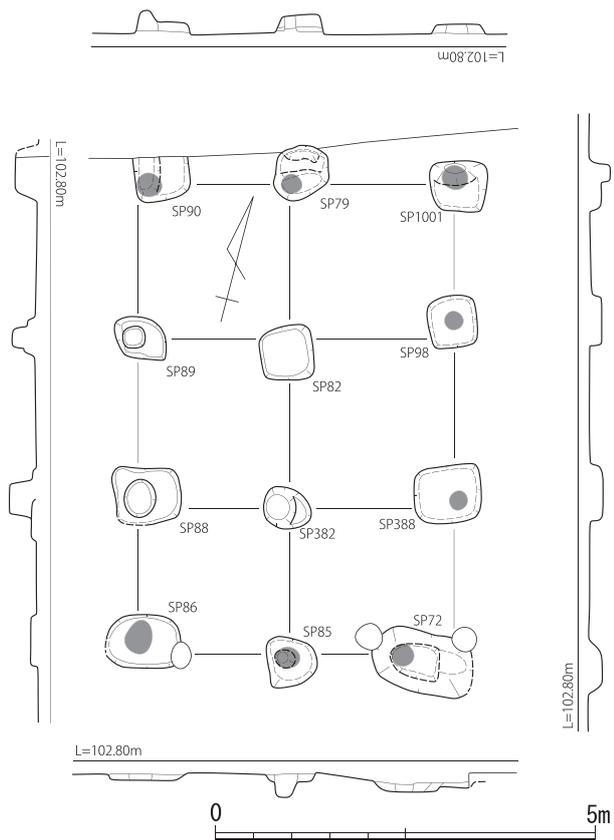
遺物はSP90から製塩土器(205)、SP1001から須恵器杯身(136)、SP82から製塩土器(195)、SP98から製塩土器(207)、SP88から須恵器碗(200)と製塩土器(201)、SP85から須恵器杯(193)と製塩土器(194)、SP72から須恵器杯身(140)がそれぞれ出土している。

掘立柱建物跡SB1-02(第49図) 調査区中央北部で検出された北側に庇をもつ東西軸の掘立柱建物跡である。主軸は座標北から西に振っている。

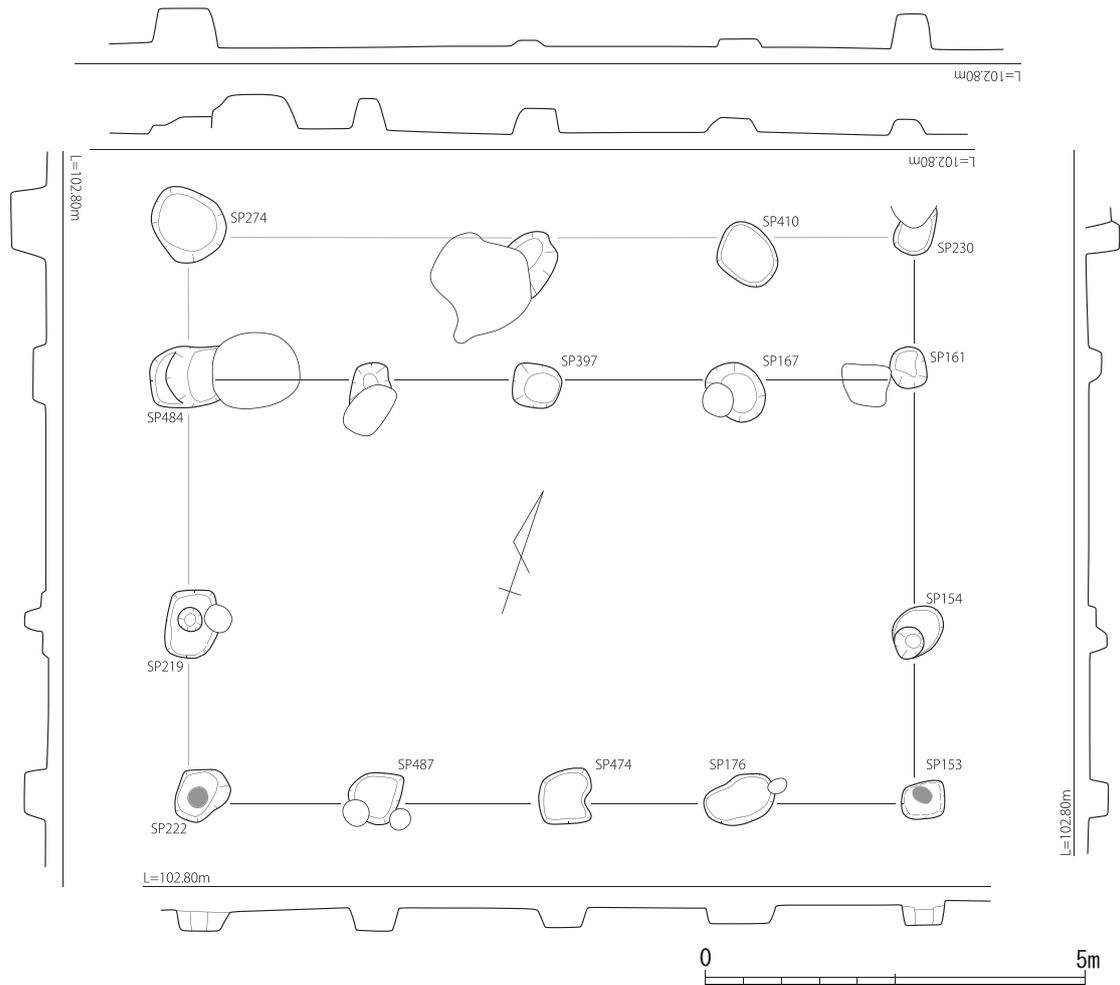
南北2間、東西4間の身舎に一間分の庇が北側にとりつく。身舎の規模は芯々間で東西9.6m、南北5.6mを測り、庇との間は1.9mを測る。また、身舎の梁行き側の柱間は、北側が1間3.2mを測るのに対し、南側の柱間は1間2.4mと短いのが特徴的である。

柱穴は一辺0.7～1mの不整な方形を呈するものと、径0.4～0.7mの不整な円形を呈するものが認められる。また、柱穴の断面形では、梁行きの中心柱が柱を据え付けるため、一段深く掘り込まれているのに対し、他の柱穴は素掘りの断面形を示している。また、庇の北東および北西の柱穴は構造上の必要性からか、他の柱穴よりも深く掘られている点の特徴的である。庇を構成する他の柱穴は比較的浅く、そのためか、北西から1間西側の柱穴については検出することができなかった。遺物はSP397から須恵器杯蓋(150)と製塩土器(151)、SP167から土師器鍋(210)と須恵器碗(212)、SP219から須恵器杯身(179)と製塩土器(180)、SP154から製塩土器(202)、SP474から須恵器蓋杯(111～114)がそれぞれ出土している。

掘立柱建物跡SB1-03(第50図) 調査地西北部で検出された南北3間、東西2間の掘立柱建



第48図 掘立柱建物跡SB1-01実測図(1/100)



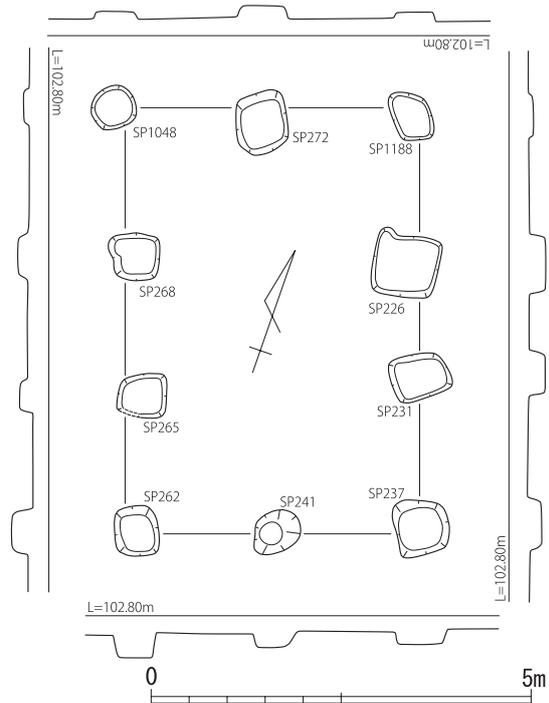
第49図 掘立柱建物跡SB 1-02実測図(1/100)

物跡である。規模は芯々間で南北6.8m、東西3.9mを測る。主軸は座標北から西に振っている。

柱穴は一辺0.6~0.8mの不整な方形を呈するものと、径0.6~0.7mの不整な円形を呈するものが認められる。

出土遺物はS P 231から土師器杯(165)と製塩土器(166)、S P 237から須恵器(156~159)、製塩土器(155)、S P 241から土師器椀(209)がそれぞれ出土した。

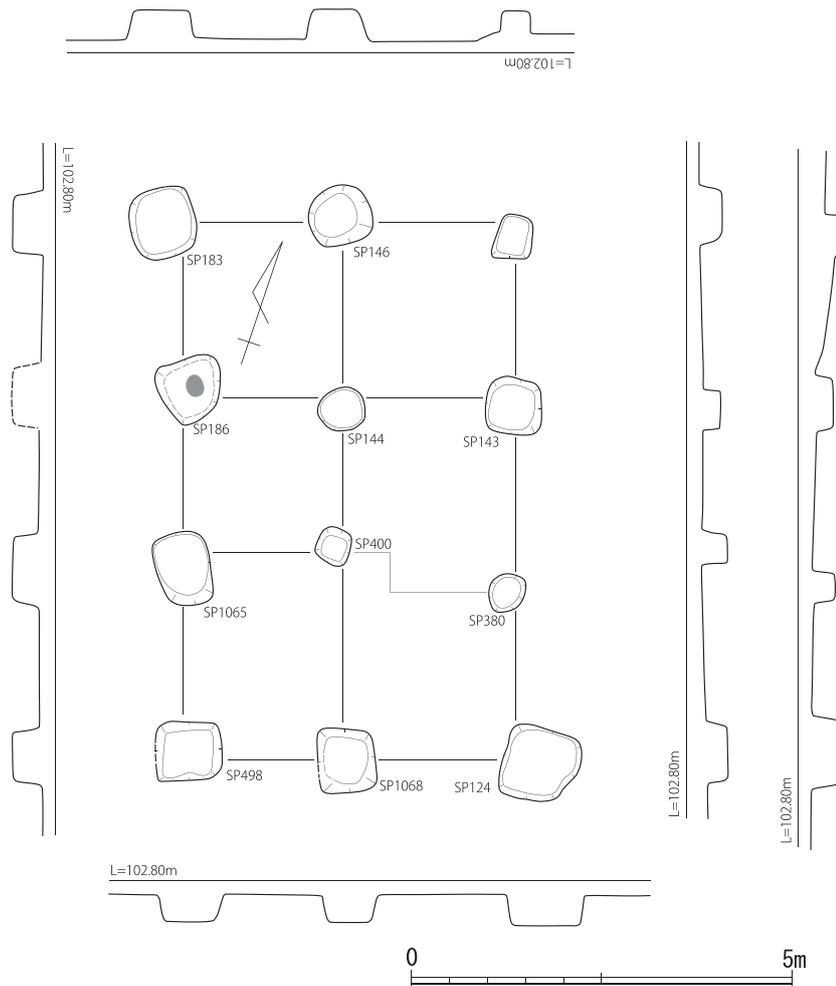
掘立柱建物跡SB 1-04(第51図) 調査地中央部で検出された南北3間、東西2間の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北7.1m、東西4.4mを測る。主軸は座標北から西に振っ



第50図 掘立柱建物跡SB 1-03実測図(1/100)

ている。後述する掘立柱建物跡S B06とは、ほぼ南北の軸を揃えて建てられている。

柱穴は一辺0.5～1 mの不整な方形を呈するものと、径0.4～0.5mの不整な円形を呈するものが認められる。なお、南から2列目の柱は筋が完全には通っていない。遺物はS P146から須恵器杯と土師器甕(168～170)、S P186から須恵器杯(85)、S P1065から須恵器杯(163)、製塩土器(164)、S P400から製塩土器(187・188)、S P1068から土師器杯(84)、S P143から須恵器蓋(100)、



第51図 掘立柱建物跡S B 1 -04実測図(1/100)

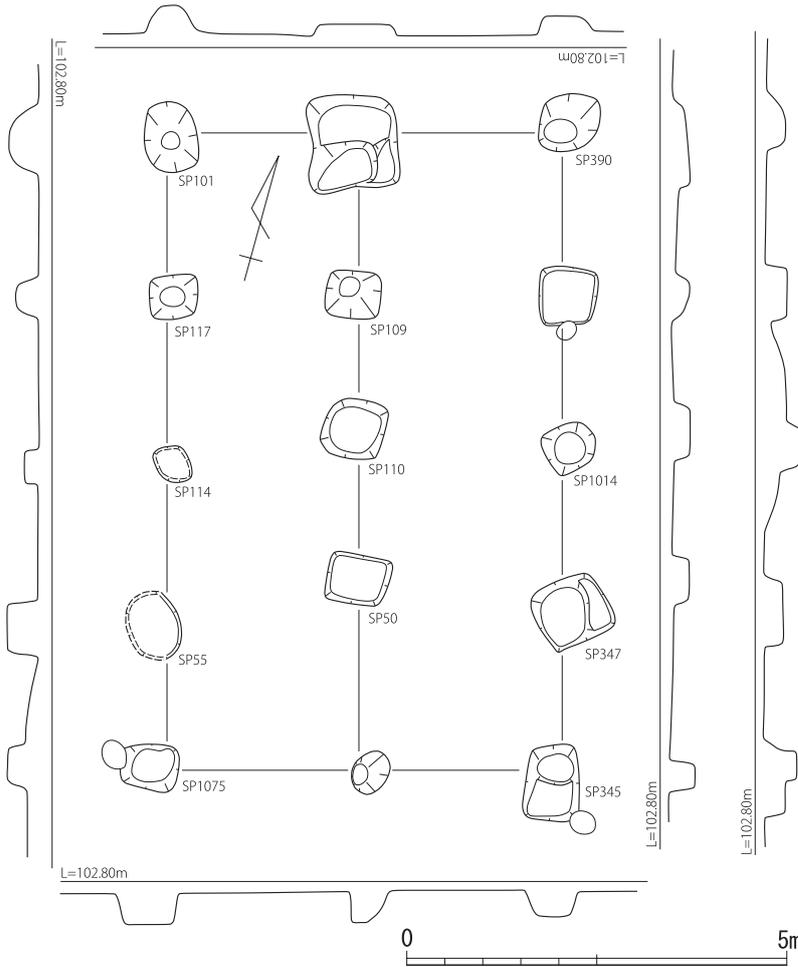
S P380から須恵器蓋杯類(173～176)、S P124から須恵器杯(196・197)がそれぞれ出土した。

掘立柱建物跡S B 1 -05 (第52図) 調査地東北部で検出された南北4間、東西2間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北8.4m、東西5.2mを測る。主軸は座標北から西に振っている。東西の柱間は西側が2.4m、東側が2.7mである。

柱穴は一辺0.5～1 mの不整な方形を呈するものと、径0.4～0.5mの不整な円形を呈するものが認められる。遺物はS P101から製塩土器(185・186)、S P110から須恵器杯(85)、土師器杯(86)、S P390から須恵器杯(152・153)、S P345から須恵器杯(191・192)が出土した。

掘立柱建物跡S B 1 -06 (第53図) 調査地の中央部で検出された南北3間、東西2間の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北6 m、東西3.9mを測る。主軸は座標北から西に振っている。柱穴は一辺0.7～0.8mの不整な方形を呈するものと、径0.5～0.6mの不整な円形を呈するものが認められる。遺物はS P479から須恵器杯蓋(97)、S P614から製塩土器(181)が出土した。

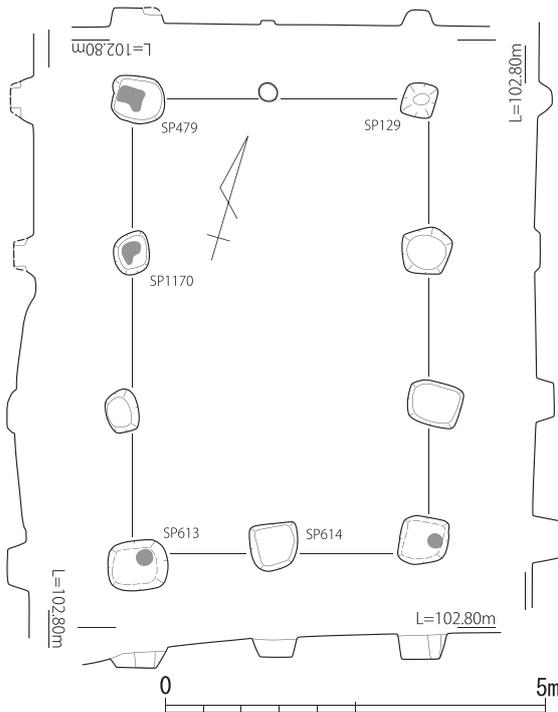
掘立柱建物跡S B 1 -07 (第54図) 調査地の中央部東寄りで検出された南北2間、東西2間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北3.4m、東西3.4mを測る。主軸は座標北から西に振っている。東西の柱間は西側が1.7m、東側が1.7mである。柱穴は一辺0.5～0.7mの不整な



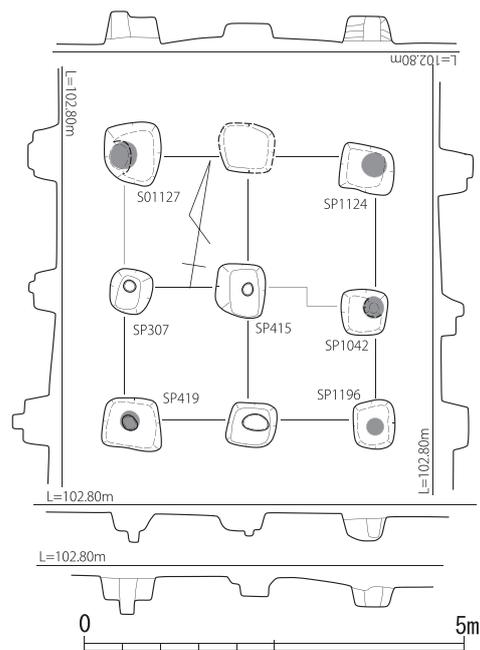
第52図 掘立柱建物跡S B 1 - 05実測図(1/100)

方形を呈するものが認められる。建物構造から倉としての機能が考えられる。遺物はS P 1127より製塩土器(160・161)、S P 419から須恵器杯(148)、製塩土器(149)が出土している。

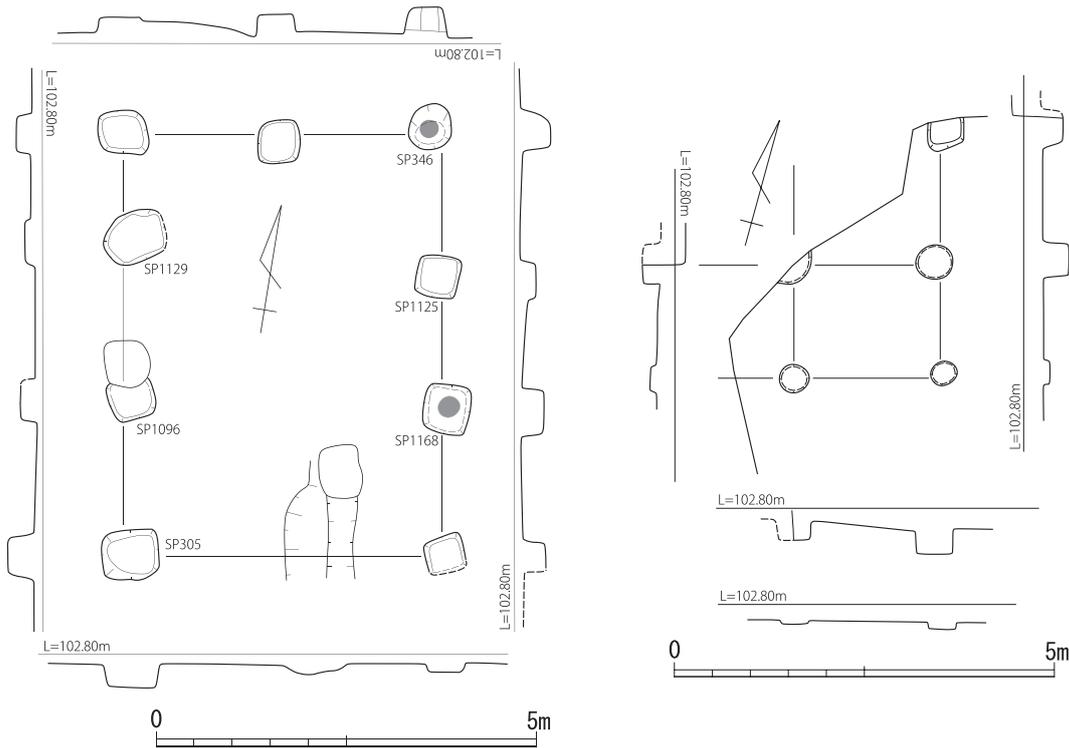
掘立柱建物跡S B 1 - 08(第55図) 調査地の中央部東寄りで検出された南北3間、東西2間の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北5.6m、東西4.2mを測る。掘立柱建物跡S B 1 - 07と重複して建てられている。前後関係は不明である。掘立柱建物跡S B 1 - 05とは南北に連なっており、一連の施設であったことを示している。主軸は座



第53図 掘立柱建物跡S B 1 - 06実測図(1/100)



第54図 掘立柱建物跡S B 1 - 07実測図(1/100)



第55図 掘立柱建物跡 S B 1 - 08実測図(1/100) 第56図 掘立柱建物跡 S B 1 - 09実測図(1/100)

標北から西に振っている。東西の柱間は西側が2.1m、東側が2.1mである。南北の柱間は北から1.3・1.9・2.4mと不揃いである。柱穴は一辺0.5~0.8mの不整な方形を呈するものが認められる。遺物は S P 346から須恵器杯(88)が出土した。

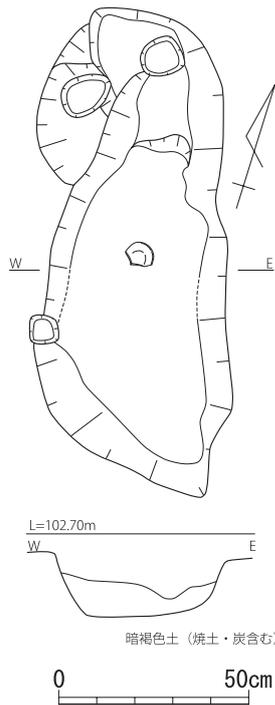
掘立柱建物跡 S B 1 - 09 (第56図) 調査地西北部で検出された南北2間以上、東西1間以上の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北3.2m以上、東西1.9mを測る。主軸は座標北から西に振っている。柱穴は一辺0.4~0.5mの不整な方形を呈するものと、径0.3~0.4mの不整な円形を呈するものが認められる。総柱建物の可能性がある。図示しうる遺物はない。

S K 220 (第57図) 調査地西北部で検出された南北1.2m、東西0.46mの不定形な土坑である。埋め土には大量の遺物があった。奈良時代の製塩土器や須恵器杯などが出土した。

2) 出土遺物(第58~62図)

1 地区では、土坑・溝・柱穴などから多量の土器が出土した。

1~40は S K 220から出土した。この土坑からは多量の製塩土器が出土している点が注目される。1~7は須恵器蓋である。1の天井部には「神」の墨書が描かれている。天井が低く、口縁はやや面をもったのち、端部を下方へ折り曲げている。8~12は須恵器杯^(注1)Aである。8の底部には杯蓋1と同様、「神」の墨書が記されている。体部外側面はやや直線気味に立ち上がる個体が多い。13・14は須恵器杯Bである。13は口径が小さく器高が高い。15は須恵器碗である。丸みを帯びる体部から外反する口縁をもつ。16は須恵器壺の口縁である。外反気味に広がる頸部をもち、口縁は上方に拡張する。17は須恵器壺体部である。体部は丸みを帯びた肩をもち、平坦な底部外縁に高台を付す。16と17は同一個体の可能性がある。18は土師器大型鍋である。正確な口径を出



第57図 S K 220実測図
(1/20)

すことは困難であるが、口径40cm前後に復原される。体部外面に煤が付着しており、煮沸具として使用されたとみられる。19～21は土師器甕である。21は口縁端部を上方につまみ上げる。22は把手の破片である。23は土師器杯である。浅い椀状を呈する。24は土錘である。25～40は製塩土器である。砲弾型になると思われるものと、椀状のもの2者に大別される。これらの遺物は一括性が高く、また、墨書土器や製塩土器の存在から祭祀に関連する遺構・遺物であると考えられる。

41～52はS K 221から出土した。須恵器杯蓋・壺蓋のほか、S K 220同様、製塩土器が多く含まれる。

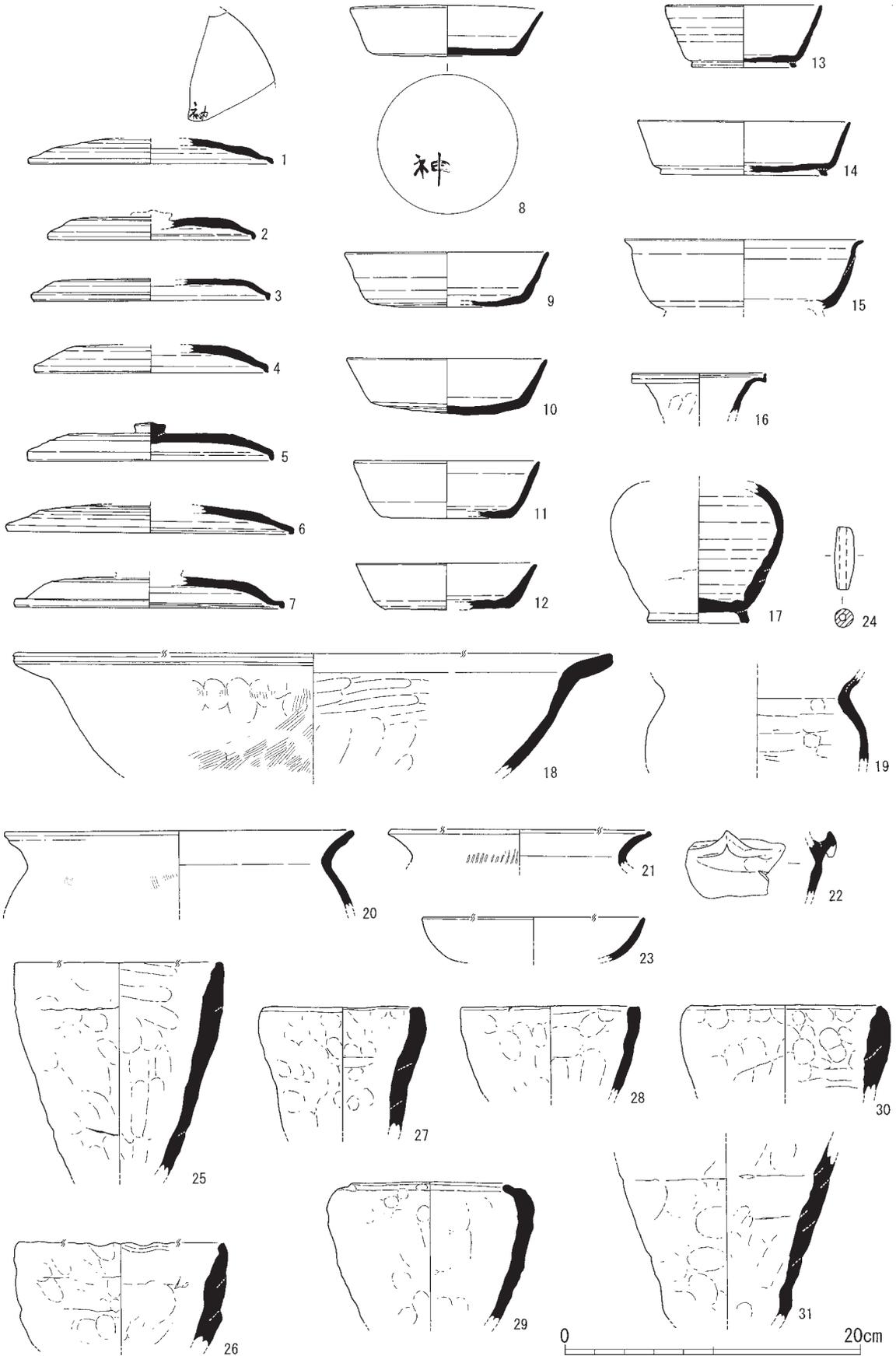
53～57はS K 274出土の須恵器杯と製塩土器である。58・59はS K 107出土の須恵器杯G蓋と杯身の破片である。58は混入の可能性がある。60はS K 563出土の須恵器杯Bである。61はS K 429出土の内面にミガキを施す土師器椀である。62はS K 537出土の須恵器杯である。63はS K 419出土の須恵器杯片である。64はS K 303出土の須恵器杯A

である。65・66はS K 107出土の製塩土器である。67はS K 566出土の土師器杯であり、内面に暗文がみられる。68・69はS D 503出土の須恵器蓋と壺と思われる個体である。70はS D 542出土の糸切り底をもつ須恵器椀の底部である。71はS D 63出土の須恵器杯G蓋である。72はS D 1出土の須恵器杯Aである。73はS D 133出土の平底の須恵器壺と思われる個体である。74はやや口径の大きいかえりをもつ須恵器杯蓋である。75・76はS D 515出土遺物である。75は須恵器の椀、76は緑釉陶器の椀である。

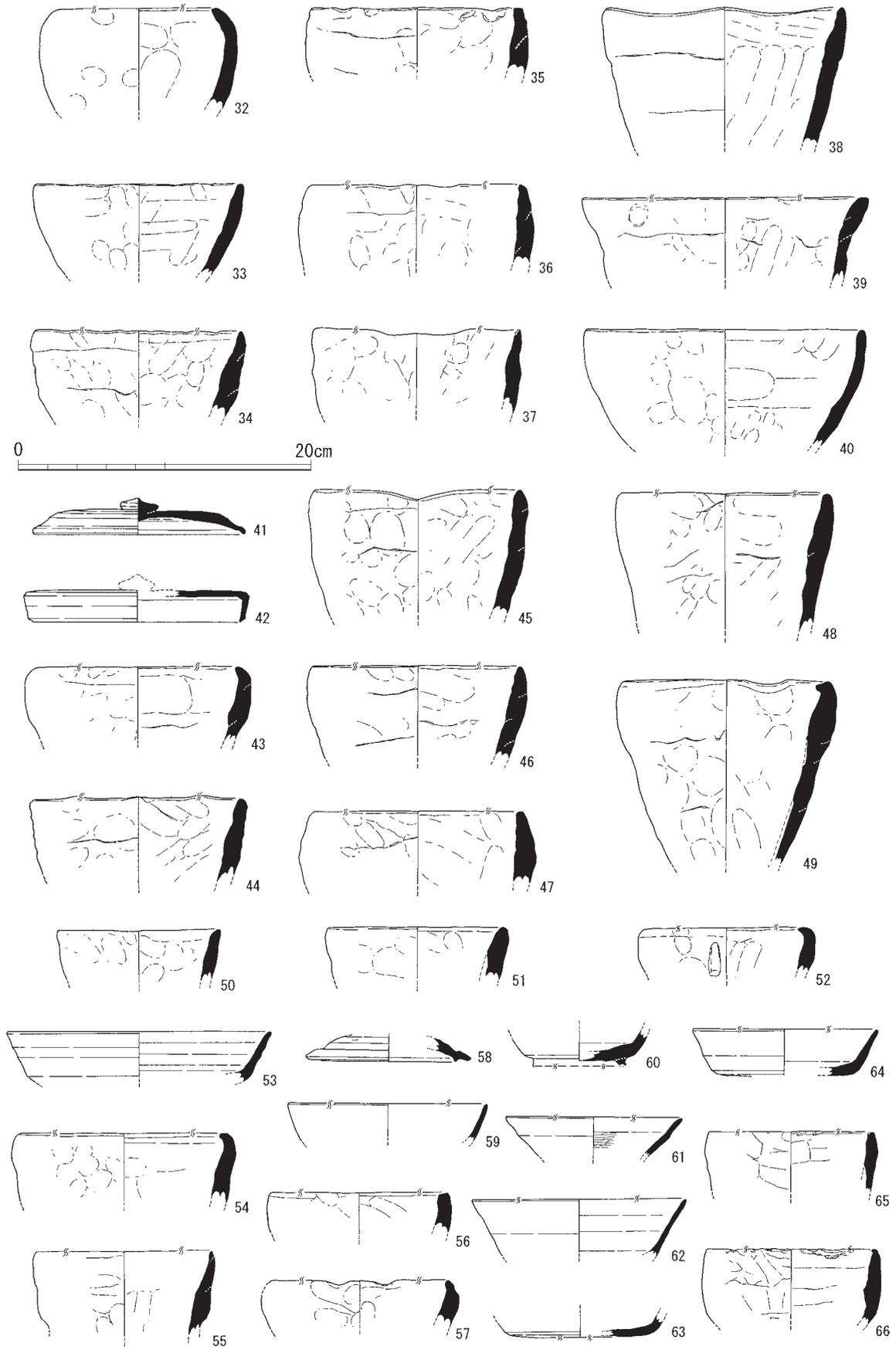
77～212は各柱穴から出土した。なお、遺物の出土遺構名と器種については対照表を付した。77～91はおおむね飛鳥時代中葉から奈良時代初頭の土器である。92～212は奈良時代後半から平安時代初頭を中心とする時期の遺物である。多くの柱穴出土遺物に製塩土器がみられる点が注目される。

S B 1 - 01には、140・193～195・200・201・205・207が、S B 1 - 02には111～114・150・151・179・180・202・210・211が、S B 1 - 03には155～159・165・166・209が、S B 1 - 04には84・85・100・163・164・168～170・173～176・187・188・196・197が、S B 1 - 05には86・87・152・153・185・186・191・192が、S B 1 - 06には97・181が、S B 1 - 07には148・149・160・161が、S B 1 - 08には88がそれぞれ伴う。大部分の建物から製塩土器が出土している。S B 01 - 08出土の杯は混入品の可能性がある。

(石崎善久)



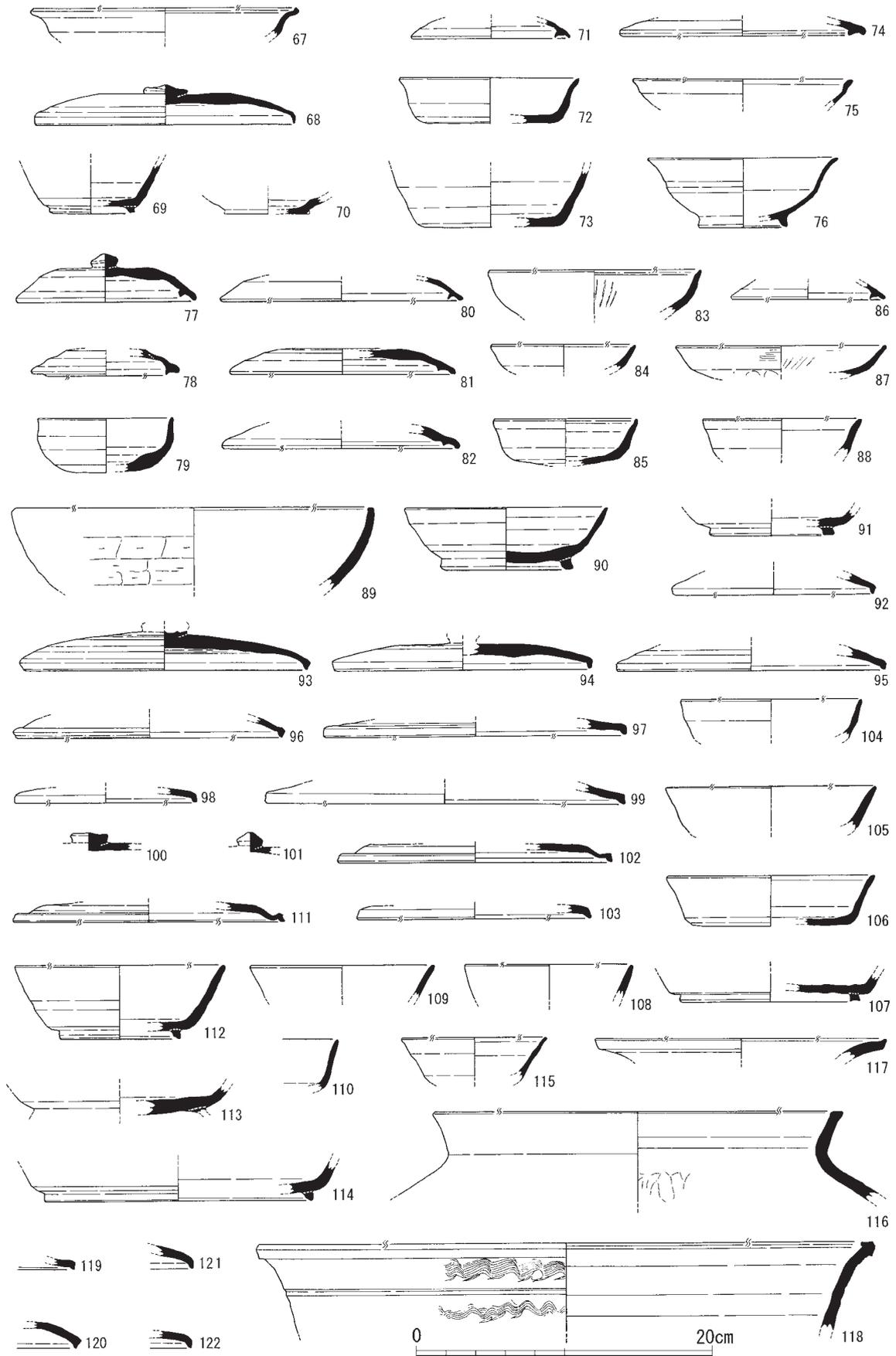
第58図 1地区出土遺物実測図(32)



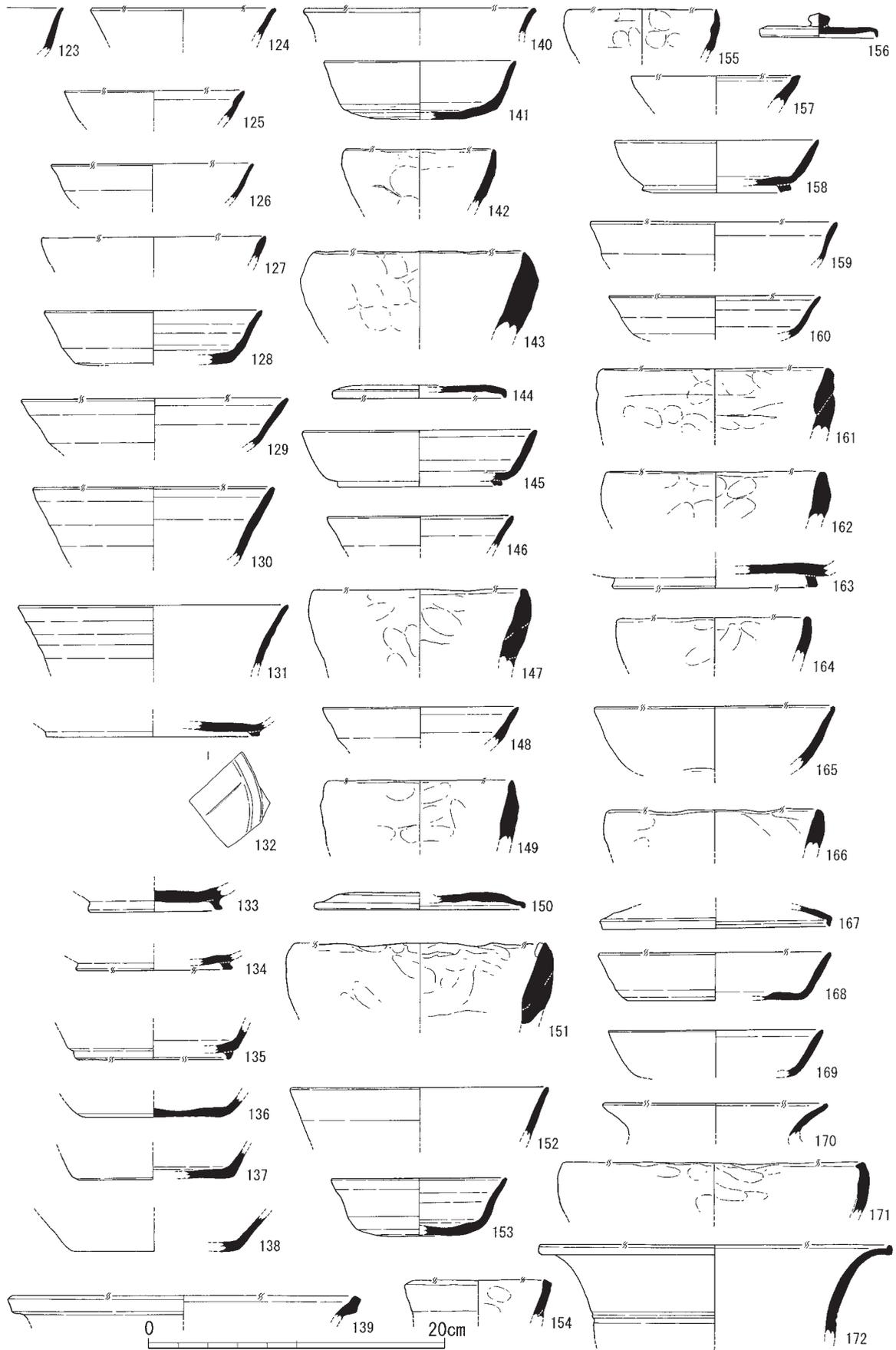
第59図 15-1地区出土遺物実測図(33)

付表1 15-1地区出土遺物対照表

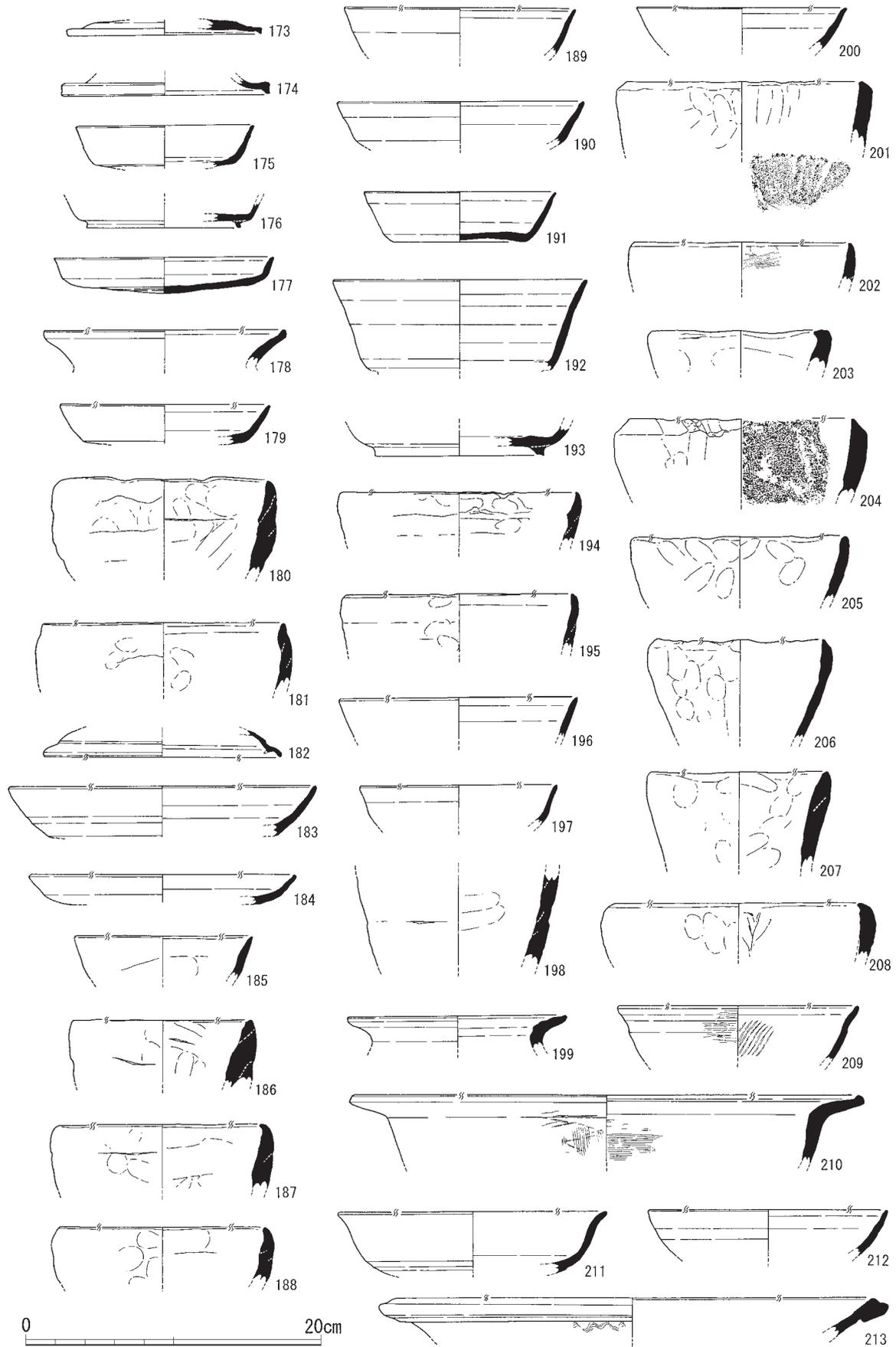
図番号	出土遺構	器種	図番号	出土遺構	器種	図番号	出土遺構	器種
77	SP318	須惠器杯G蓋	123	SP1029	須惠器杯身	169	SP146	須惠器杯身
78	SP443	須惠器杯G蓋	124	SP304	須惠器杯身	170	SP146	土師器甕
79	SP317	須惠器杯G身	125	SP1045	須惠器杯身	171	SP1180	製塩土器
80	SP60	須惠器杯G蓋	126	SP503	須惠器杯身	172	SP1180	須惠器甕
81	SP1142	須惠器杯G蓋	127	SP567	須惠器杯身	173	SP380	須惠器杯蓋
82	SP383	須惠器杯G蓋	128	SP580	須惠器杯A身	174	SP380	須惠器杯蓋
83	SP188	土師器杯	129	SP1156	須惠器杯身	175	SP380	須惠器杯A身
84	SP1068	土師器杯	130	SP249	須惠器杯身	176	SP380	須惠器杯B身
85	SP186	須惠器杯G身	131	SP244	須惠器杯身	177	SP483	須惠器皿
86	SP110	須惠器杯G蓋	132	SP1026	須惠器杯B身	178	SP483	土師器甕
87	SP110	土師器杯	133	SP133	須惠器杯B身	179	SP219	須惠器杯身
88	SP346	須惠器杯G身	134	SP134	須惠器杯B身	180	SP219	製塩土器
89	SP191	土師器碗	135	SP205	須惠器杯B身	181	SP614	製塩土器
90	SP191	須惠器杯B身	136	SP1001	須惠器杯A身	182	SP193	須惠器杯G蓋
91	SP416	須惠器杯B身	137	SP255	須惠器杯A身	183	SP193	須惠器杯身
92	SP431	須惠器杯蓋	138	SP373	須惠器杯A身	184	SP193	土師器皿
93	SP202	須惠器杯蓋	139	SP276	須惠器甕	185	SP101	製塩土器
94	SP1143	須惠器杯蓋	140	SP72	須惠器杯身	186	SP101	製塩土器
95	SP1173	須惠器杯蓋	141	SP436	須惠器杯A身	187	SP400	製塩土器
96	SP360	須惠器杯蓋	142	SP436	製塩土器	188	SP400	製塩土器
97	SP479	須惠器杯蓋	143	SP436	製塩土器	189	SK221	須惠器杯身
98	SP1174	須惠器杯蓋	144	SP477	須惠器杯蓋	190	SP221	須惠器杯身
99	SP74	須惠器杯蓋	145	SP477	須惠器杯B身	191	SP345	須惠器杯A身
100	SP143	須惠器蓋つまみ	146	SP477	須惠器杯身	192	SP345	須惠器杯身
101	SP101	須惠器蓋つまみ	147	SP477	製塩土器	193	SP85	須惠器杯B身
102	SP470	須惠器杯蓋	148	SP419	須惠器杯身	194	SP85	製塩土器
103	SP587	須惠器杯蓋	149	SP419	製塩土器	195	SP82	製塩土器
104	SP1094	須惠器杯身	150	SP397	須惠器杯蓋	196	SP124	須惠器杯身
105	SP1053	須惠器杯身	151	SP397	製塩土器	197	SP124	須惠器杯身
106	SP424	須惠器杯A身	152	SP390	須惠器杯身	198	SP427	製塩土器
107	SP208	須惠器杯B身	153	SP390	須惠器杯B身	199	SP266	土師器甕
108	SP266	須惠器杯身	154	SP471	製塩土器	200	SP88	須惠器碗
109	SP417	須惠器杯身	155	SP237	製塩土器	201	SP88	製塩土器
110	SP372	須惠器杯身	156	SP237	須惠器壺蓋	202	SP154	製塩土器
111	SP474	須惠器杯蓋	157	SP237	須惠器杯身	203	SP217	製塩土器
112	SP474	須惠器杯B身	158	SP237	須惠器杯B身	204	SP68	製塩土器
113	SP474	須惠器杯B身	159	SP237	須惠器杯身	205	SP90	製塩土器
114	SP474	須惠器杯B身	160	SP1127	須惠器杯身	206	SP97	製塩土器
115	SP603	須惠器杯身	161	SP1127	製塩土器	207	SP98	製塩土器
116	SP603	須惠器甕	162	SP595	製塩土器	208	SP168	製塩土器
117	SP478	須惠器甕	163	SP1065	須惠器杯B身	209	SP241	土師器碗
118	SP288	須惠器甕	164	SP1065	製塩土器	210	SP167	土師器鍋
119	SP225	須惠器杯蓋	165	SP231	土師器杯	211	SP167	須惠器碗
120	SP225	須惠器杯蓋	166	SP231	製塩土器	212	SP121	須惠器碗
121	SP182	須惠器杯蓋	167	SP1180	須惠器杯蓋	213	SP121	須惠器甕
122	SP139	須惠器杯蓋	168	SP146	須惠器杯A身			



第60図 1地区出土遺物実測図(34)



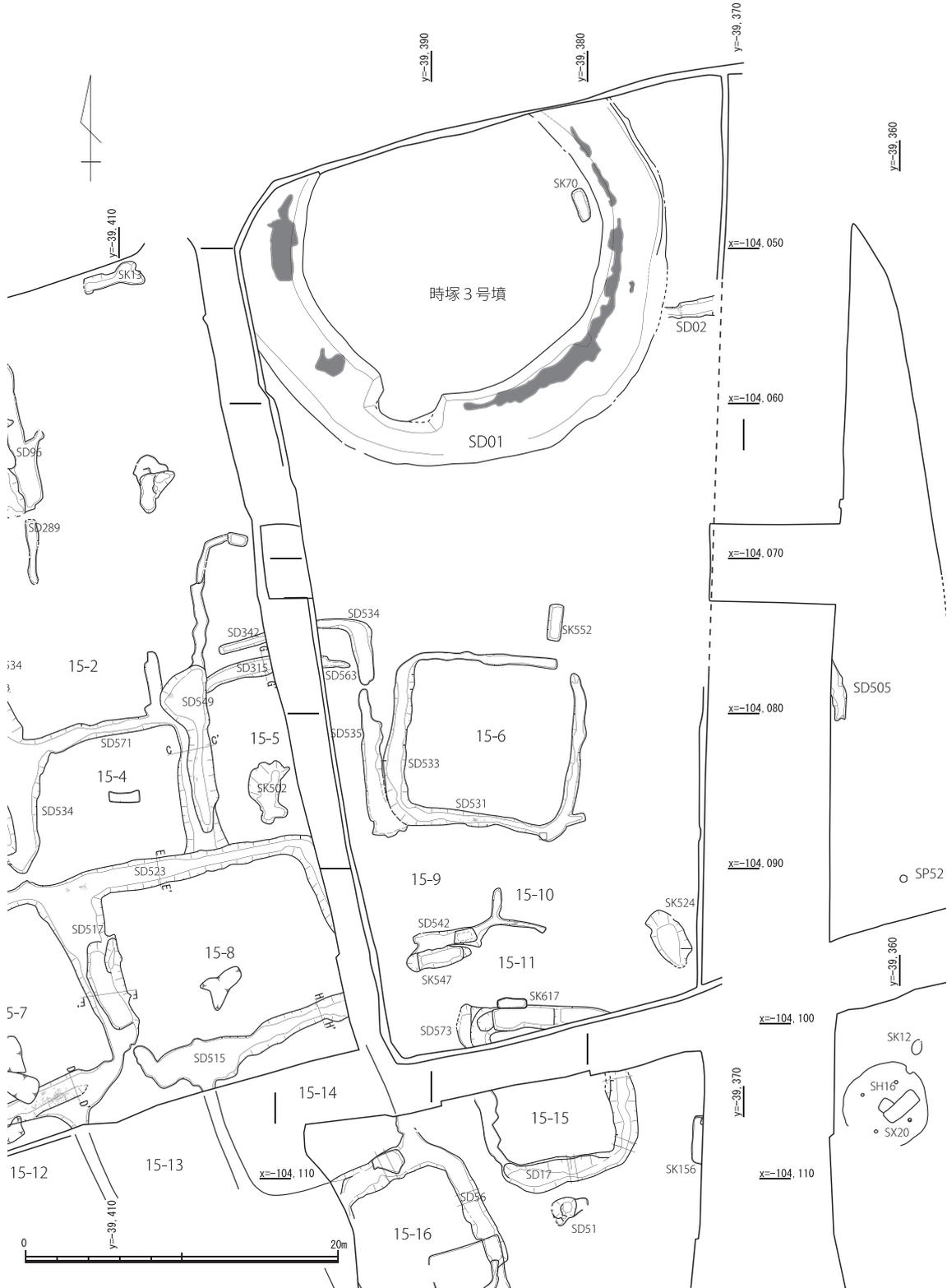
第61図 1地区出土遺物実測図(35)



第62図 1地区出土遺物実測図(36)

2. 15-2地区

15-2地区は今回の調査対象地の中でも北西に設定した調査区である15-1地区の東に設定し



第63図 2地区検出遺構配置図(弥生・古墳時代、1/400)

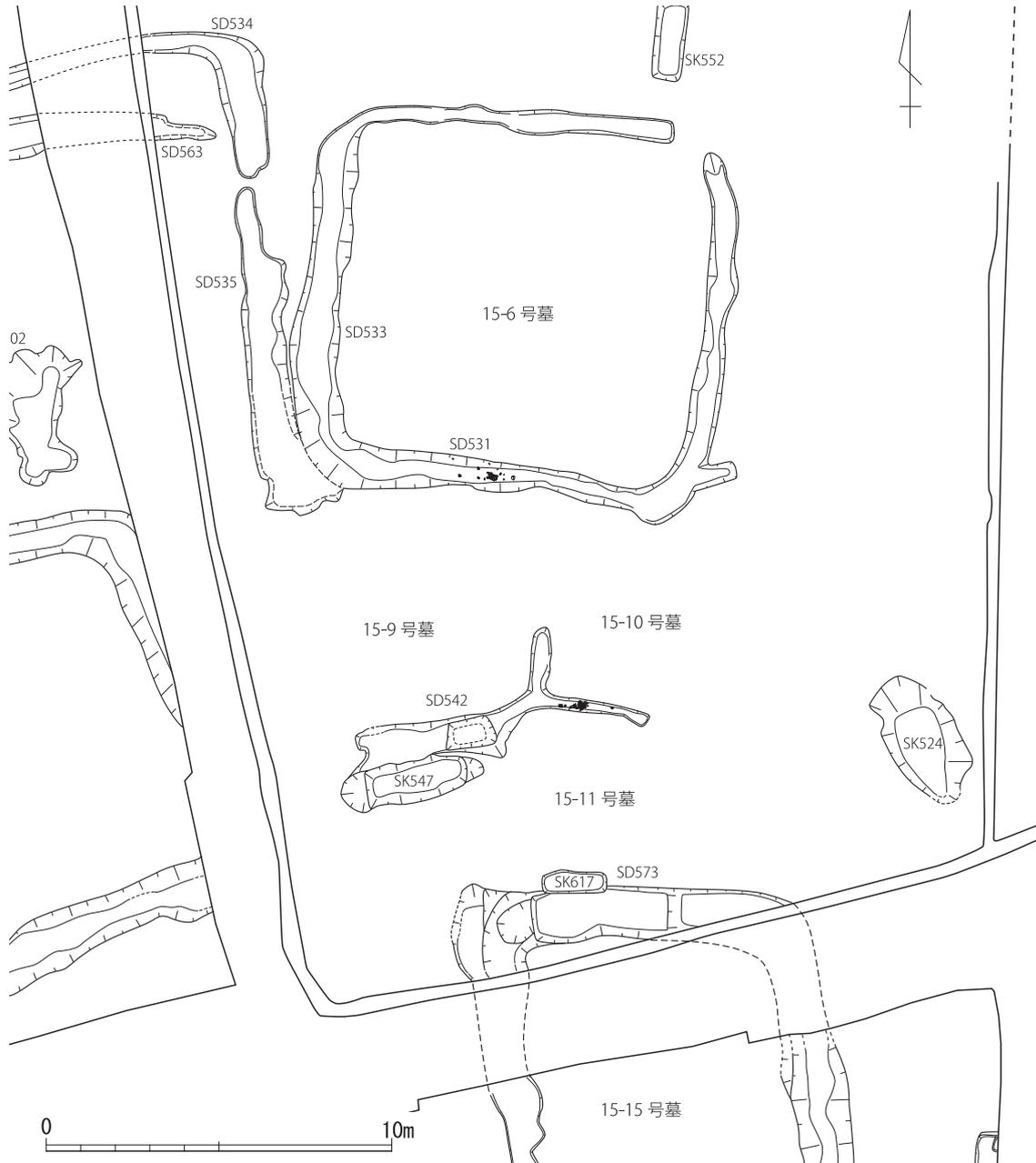
た調査区である。調査区では上層遺構として掘立柱建物跡群や土坑、性格不明のピット、溝を、下層遺構として古墳時代の造り出し付き円墳である時塚3号墳(S D01)と弥生時代の方形周溝墓、土坑などを検出した。

A. 弥生時代・古墳時代の遺構・遺物

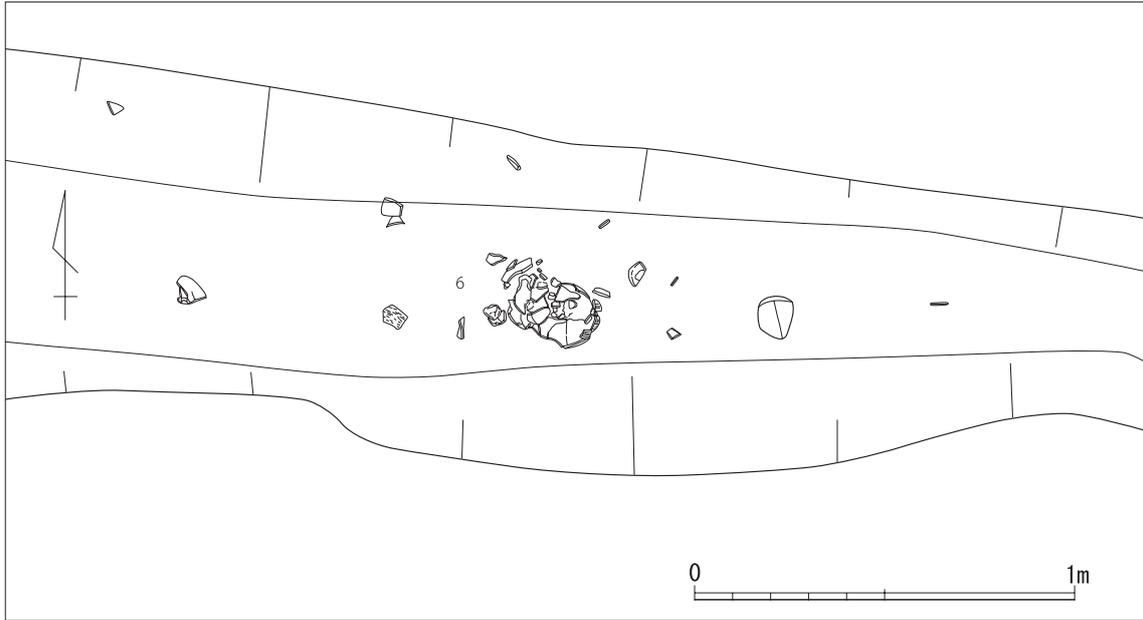
1) 遺構

弥生時代に属する遺構として方形周溝墓5基を検出した。その他、弥生時代の遺構として確実に視されるものとして、溝・土坑がある。方形周溝墓15-13号墓は南の4地区にもおよんでおり、4地区の項で報告を実施する。以下、各遺構について概観する。

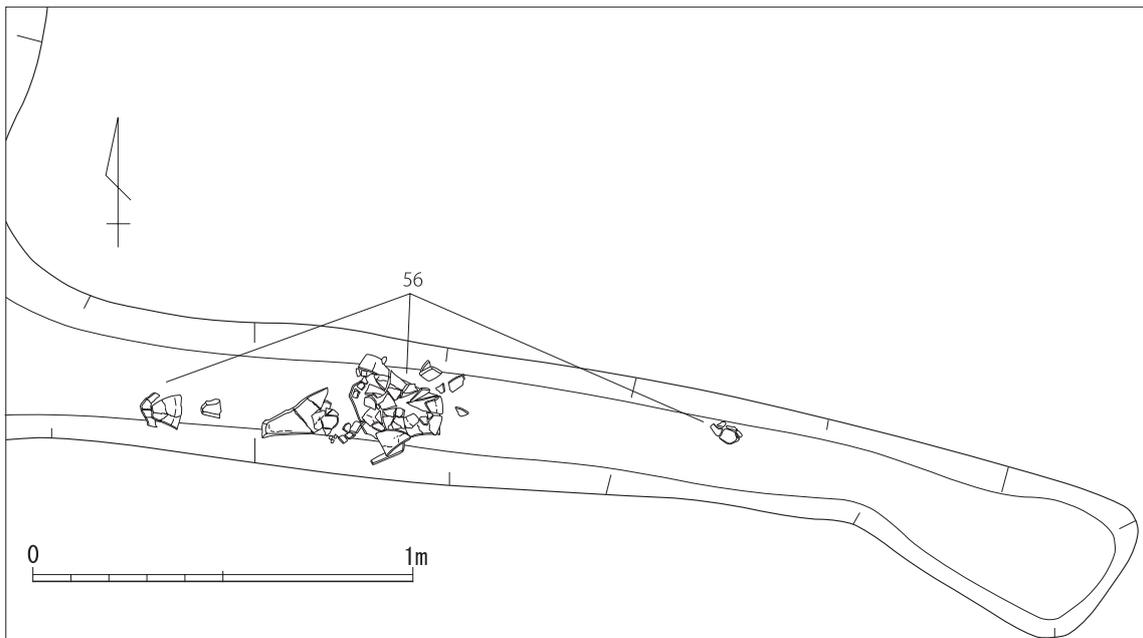
15-6号墓 S D533(北:幅0.8m、深さ0.1m、西:幅1.5m、深さ0.2m)を北辺および西辺に、



第64図 2地区方形周溝墓平面図(1/200)



第65図 S D 531遺物出土状況図(1/20)



第66図 S D 542遺物出土状況図(1/20)

S D 531(南：幅1 m、深さ0.2m、東：幅0.8m、深さ0.1m)を南辺および東辺にもつ方形周溝墓である。各周溝が浅く、削平を受けている可能性がある。検出状況で周溝は完周せず、北東隅が削り残されている。また、S D 531の南東部は東に突出している。周溝墓の規模は東西10.5m、南北10.4mを測る。なお、西は15-5号墓と、南は15-9、10号墓と接するが、周溝の切り合いや、前後関係については明確ではない。

南辺の区画溝S D 531中央部での遺物出土状況を図示した(第65図)。壺(6)が細片化して出土している。出土状況からこの周溝墓側からの転落と考えられる。

15-9号墓 15-6号墓の南西に位置する。SD531を北辺に、東で2条に分かれるSD542を南辺(幅1.1m、深さ0.1m)および東辺(幅0.6m、深さ0.15m)にもつ方形周溝墓である。西側の様相については不明であるが、15-8号墓の東溝SD523を共有している可能性が高い。また、SD542はSK547に接しているが、切り合い関係は不明である。周溝墓の規模は南北8m、東西8m前後を測る。

埋葬施設は検出されていない。また、SD542底面には方形の土坑状の掘形(長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.1m)がみられるが、これが溝内埋葬であるかどうか判断し得ない。

15-10号墓 15-9号墓の東に位置する。溝SD531を北辺に15-6号墓と共有し、西および南は溝SD542で区画される周溝墓として復原した。なお、15-6号墓の周溝南東部が不自然に広がっているが、この周溝墓の盛土確保のため再掘削された可能性を考えておきたい。

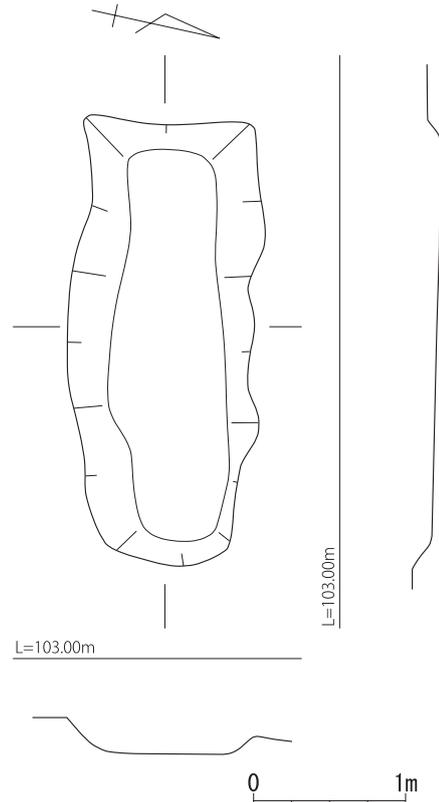
遺物はSD542における遺物出土状況を図示した(第66図)。広口壺(56)が破片となって出土した。この壺は完形個体に復原された。なお、出土状況からはこの壺が15-10号墓に伴うものか、15-11号墓に伴うものか判断することはできない。

15-11号墓 15-10号墓の南に位置する方形周溝墓である。北辺および西辺はSD542で、南側は15-15号墓の北辺のSD573(幅1.2m、深さ0.15m)で区画される周溝墓と考える。SD573は底面が階段状を呈しており、複数回の掘り直しのあった可能性がある。これを前提とすれば、SD573を再掘削し、15-11号墓の盛土を確保した可能性がある。

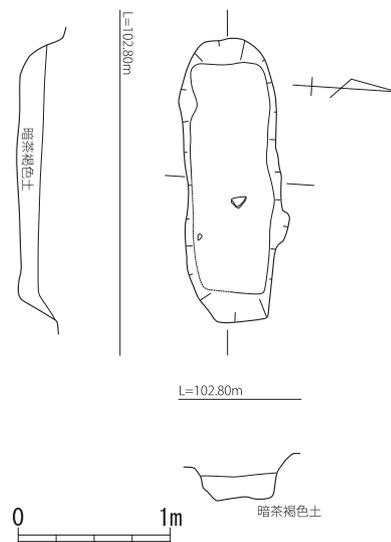
以上の方形周溝墓のほかに、弥生時代の遺構として、土坑、溝などがある。柱穴については弥生時代と確実視されるものはない。

SK547(第68図) SD542の南で検出された土坑である。東西方向に主軸をとり、不整形な長方形プランを呈する。規模は長軸3m、短軸1.25m、深さ0.3mを測る。弥生時代の埋葬施設としては大きいため、周溝墓の周溝残欠である可能性がある。埋土中から弥生土器が出土した。

SK617(第69図) SD573の北で検出された素掘りの土坑である。長軸1.9m、短軸0.6m、深さ0.3mを測る。やや不整形な長方形プランを呈する。埋土中から弥生土器片が出土している。



第68図 SK547実測図(1/50)

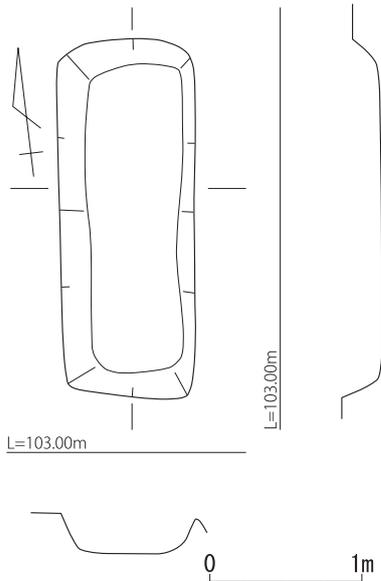


第69図 SK617実測図(1/50)

平面的にはS D573を切っているようである。埋土は単層であり、木棺等の痕跡は確認されなかった。

S K552(第70図) 15-6号墓の北東で検出された南北方向に主軸をもつ素掘りの土坑である。平面は長方形プランを呈し、規模は長軸2.4m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る。墓壙床面は北側がやや高くなっている。木棺の痕跡などは確認されていないが、規模や、形状からみて、弥生時代の埋葬施設であると判断した。

S K524 調査区の南東部で検出した不整形な土坑である。性格については不明である。



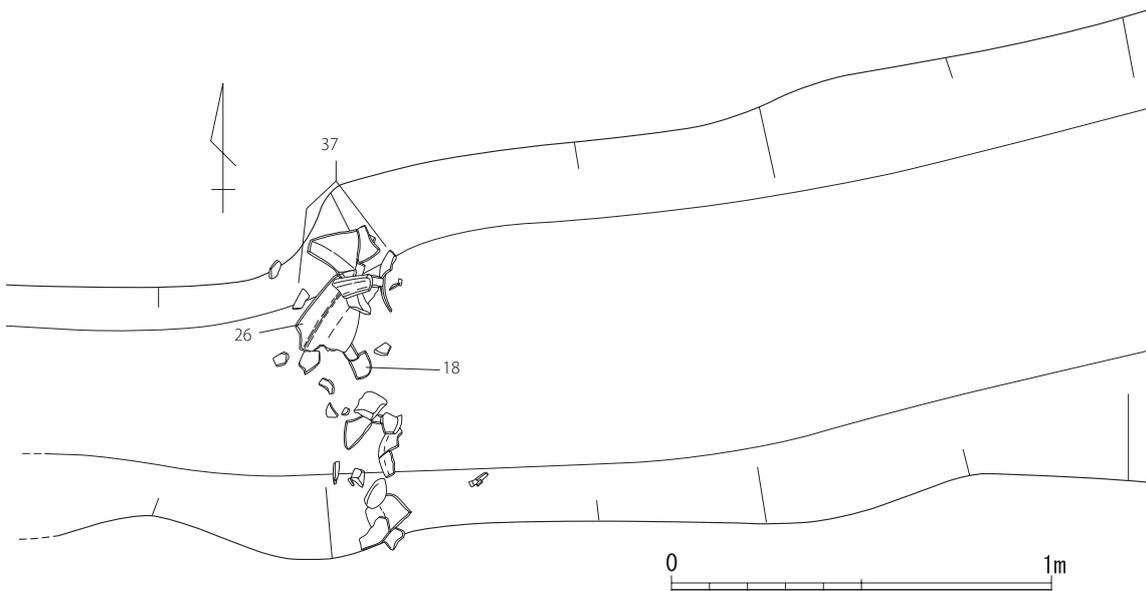
第70図 S K552実測図(1/50)

S D02(第71図) 調査地北東部で検出された幅1m、深さ0.3mを測る東西方向の溝である。時塚3号墳の周溝S D01および上層のS D02に切られる。なお、遺構番号が上層遺構と重複しており、遺物の混乱がある。遺物は壺(18・26)、鉢(37)が71図のように出土しているため弥生時代の遺構であることは間違いない。遺構の性格については、居住域に伴うものか、墓域に伴うものか不明である。

S K70(第72図) 調査区北東部、時塚3号墳の周溝西肩部で検出された主軸を南北方向にとる木棺直葬墓である。

墓壙の平面形は、両端がやや丸みを帯びた長方形プランを呈し、規模は全長2.2m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。また、北側の方がわずかに幅が広い。

墓壙埋土上層から弥生土器が細片化した状態で検出され



第71図 S D02実測図(1/20)

ている。おそらく、棺の腐朽に伴って棺内に落ち込んだ土器群と考えられる。部分的に木棺の腐食痕跡が確認されたが、平面的に捉えることはできず、また、断面としても木棺の痕跡を把握することができなかった。そのため、棺の陥没痕検出状況と、完掘状況図を掲載した。

2地区では上記の弥生時代の遺構のほかに、古墳時代の遺構として造り出し付きの円墳である時塚3号墳(S D01)を検出した。

時塚3号墳(第73図) 調査地北端で検出した造り出し付きの円墳である。古墳の墳丘は大きく削平され、盛土や埋葬施設は全く遺存していない。また、墳丘中央部が大きく攪乱を受けている。周溝のみが遺存していた。

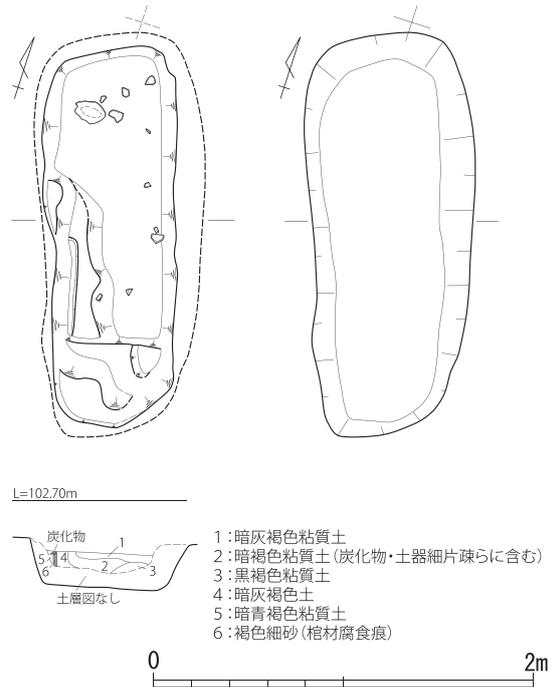
墳丘の基底は周溝を掘削し、地山を削り出している。造り出しは南側に地山を削り残すこと

により構築されている。周溝は幅約5m・深さ0.5~0.6mを測り、円形に巡る。そのため、この造り出し先端部のみ周溝は幅を減じ、周溝の深さも約0.36mと浅くなっている。墳丘の規模は直径約20mを測り、造り出しを含めた全長は推定22.4mである。また、周溝を含めた古墳の直径は約28mを測る。造り出しは主丘部側で幅4.7m、先端部で幅5.2m、全長2.4mを測る。

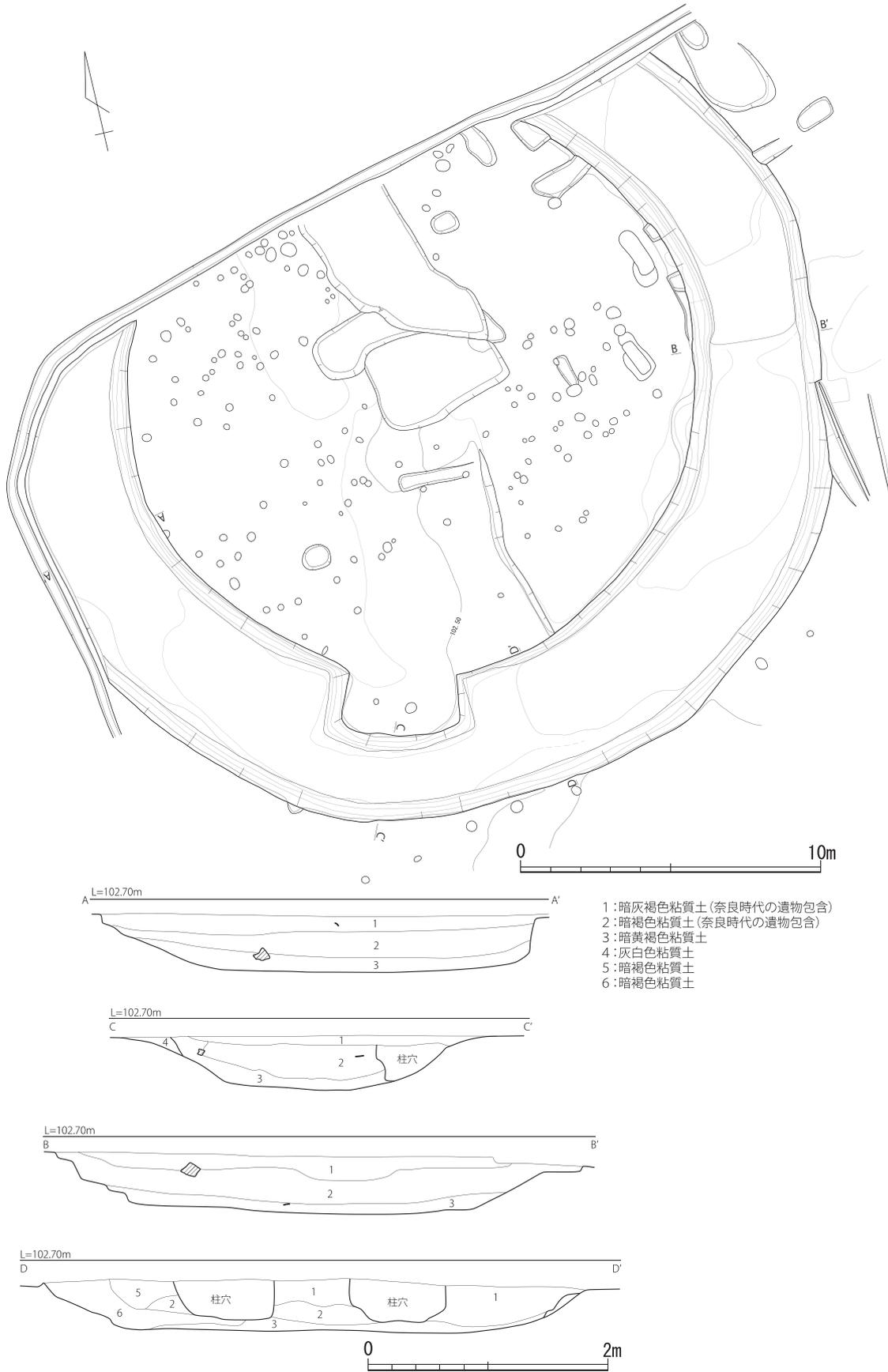
周溝埋土中(第73図1・2層)からは10~30cm大の角礫、亜角礫が多数検出された。また、ほぼ同一面で奈良時代の須恵器が検出されている(第63図網目部分)。この礫群については葺石として用いられていたものの可能性があるが、墳丘基底には葺石の存在を示す遺構は検出されておらず、この古墳に葺石が存在したことを明らかにすることはできない。また、奈良時代の須恵器などが出土していることから、周溝は奈良時代には完全には埋没していなかったことを示している。また、平面的には検出されていないものの、土層図には周溝埋没後に掘削された柱穴が記載されており、周溝の埋没後に掘立柱建物が築造されたとみられ、土地利用のあり方を伺う資料である。

遺物は奈良時代の須恵器のほかに、築造時期を示すと思われる須恵器甕(第78図57)や土師器壺(第78図58)が周溝内から出土している。

(伊野近富・石崎善久)



第72図 S K 70実測図(1/40)
左：遺物出土状況、右：完掘状況



第73図 時塚3号墳実測図(平面空撮図化：1/200、断面：1/50)

B. 出土遺物(第73～78図)

2地区出土遺物として、弥生土器とともに時塚3号墳(S D01)出土遺物について概観する。

S D531(1～6) 1の広口壺の頸部は、櫛描直線文をもつ。長めの頸部をもち、ゆるく口が開く形状であるとみられる。2の「く」字状口縁の甕は、体部が上半で張る形状で、口縁端部が上方に拡張する。甕とみられる底部(4・5)は、いずれも外面ハケメ調整で内面ナデ調整である。4は器壁が薄く、5は上げ底である。6の水差し形土器は、磨滅の進行のため、調整などは不明である。底部が小さく、わずかであるが把手側の口縁部に切り込みが見られる。断面楕円形の把手は、大部に差し込んで貼り付けている。3は底部がドーナツ状を呈すミニチュアの甕である。

S D600(7) 無文の広口壺である。口縁端部がわずかに上方に広がる。

S D525(8) 底面に木葉痕をもつ底部である。

S D526(9) 受口状口縁の甕である。口縁部に綾杉状の刻目が施される。

S D71(10・13) 体部最大径が口径に近い大型甕(10)と、底部(13)が出土した。

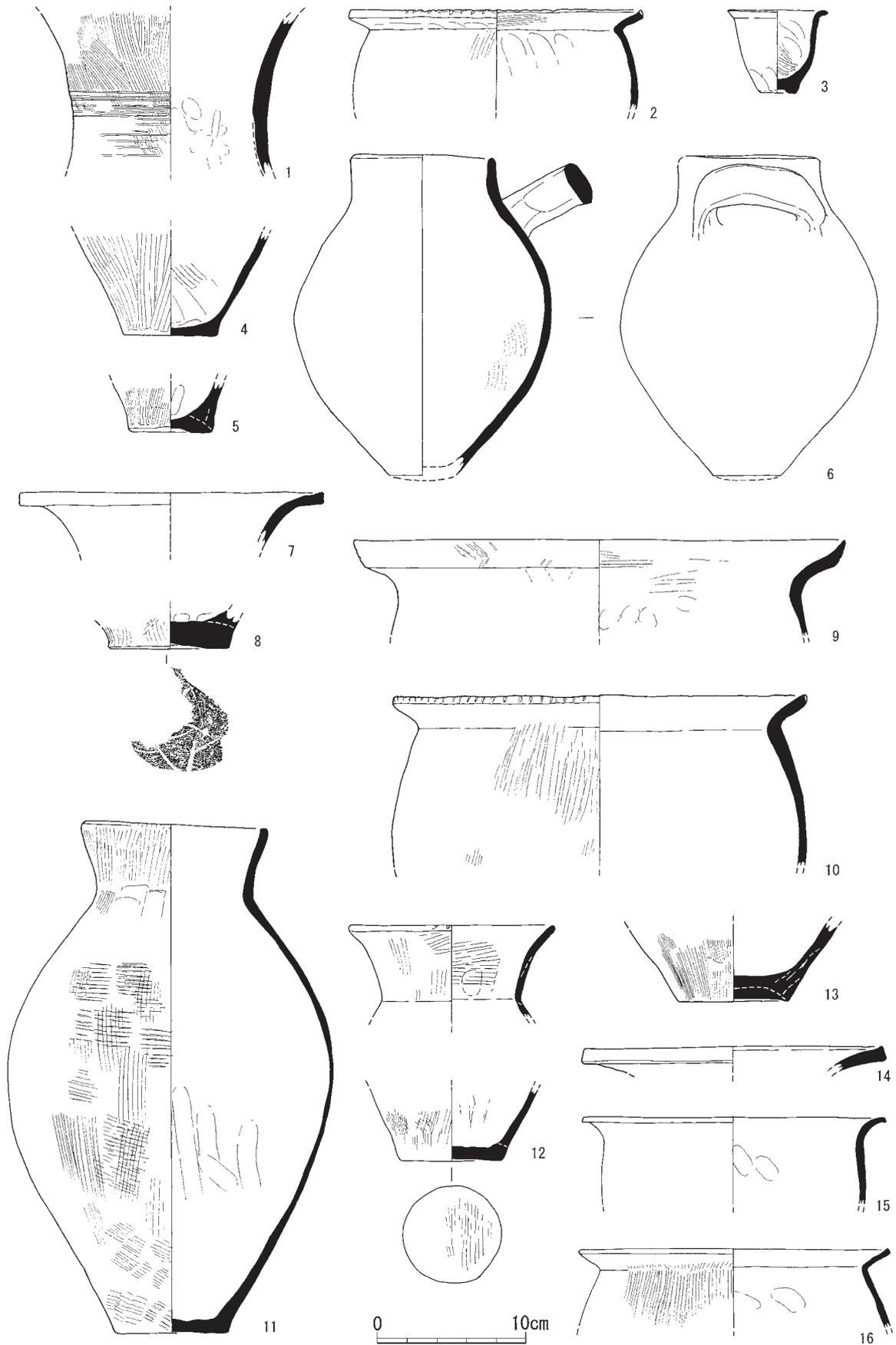
S D11(14～16) 広口壺口縁部(14)と折り曲げ口縁甕(15)、「く」字状口縁甕(16)を挙げた。いずれも口縁端部には刻目を施さない。

S D2(第74図17～第75図42) 広口壺は無文で短頸のものが中心である(17～22)。調整はナデやハケメ調整が主体で、19の体部にはタタキ調整がみられる。小型のものは頸部の締まりが強い形態をしている(21・22)。21は口縁端部に刻目をもつものである。24～26には、受口状口縁壺を挙げた。口縁部の屈曲は比較的明瞭である(25・26)。いずれも頸部には指圧痕文突帯が貼りつけられている。23は細片であるのでよく分からないが、やはり受口状口縁壺であると思われる。「く」字状に折り曲げられた口縁をもつ無頸壺もみられる(27)。体部は櫛描波状文で飾られる。体部下半にはケズリ調整が施される。28の直口の細頸壺は、口縁部から凹線文、櫛描直線文、頸部と体部の境界に突帯をそれぞれ施している。一方、無文の短頸壺(29・30)には、深いタタキ目が刻まれている。特に、29のタタキ目は激しい凹凸を呈する。甕は「く」字状口縁の甕が中心である(32～34・36)。いずれも体部にはタタキ調整とハケメ調整が施される。口縁内面に横方向のハケメを施す点は、折り曲げ口縁甕(31)でも共通する。34には内面にケズリ調整がみられる。35・38・39は甕底部であると考えられる。38の「く」字状口縁の鉢にも内面にケズリ調整がみられる。高杯の脚部(40・41)は、内面ナデ調整である。裾端部は上下に拡張し、広い面を持っている。42の脚部は、ヘラ描直線を主体とした文様と、未貫通の三角形透しをもつ。明らかに文様構成は西播磨以西でみられるものである。

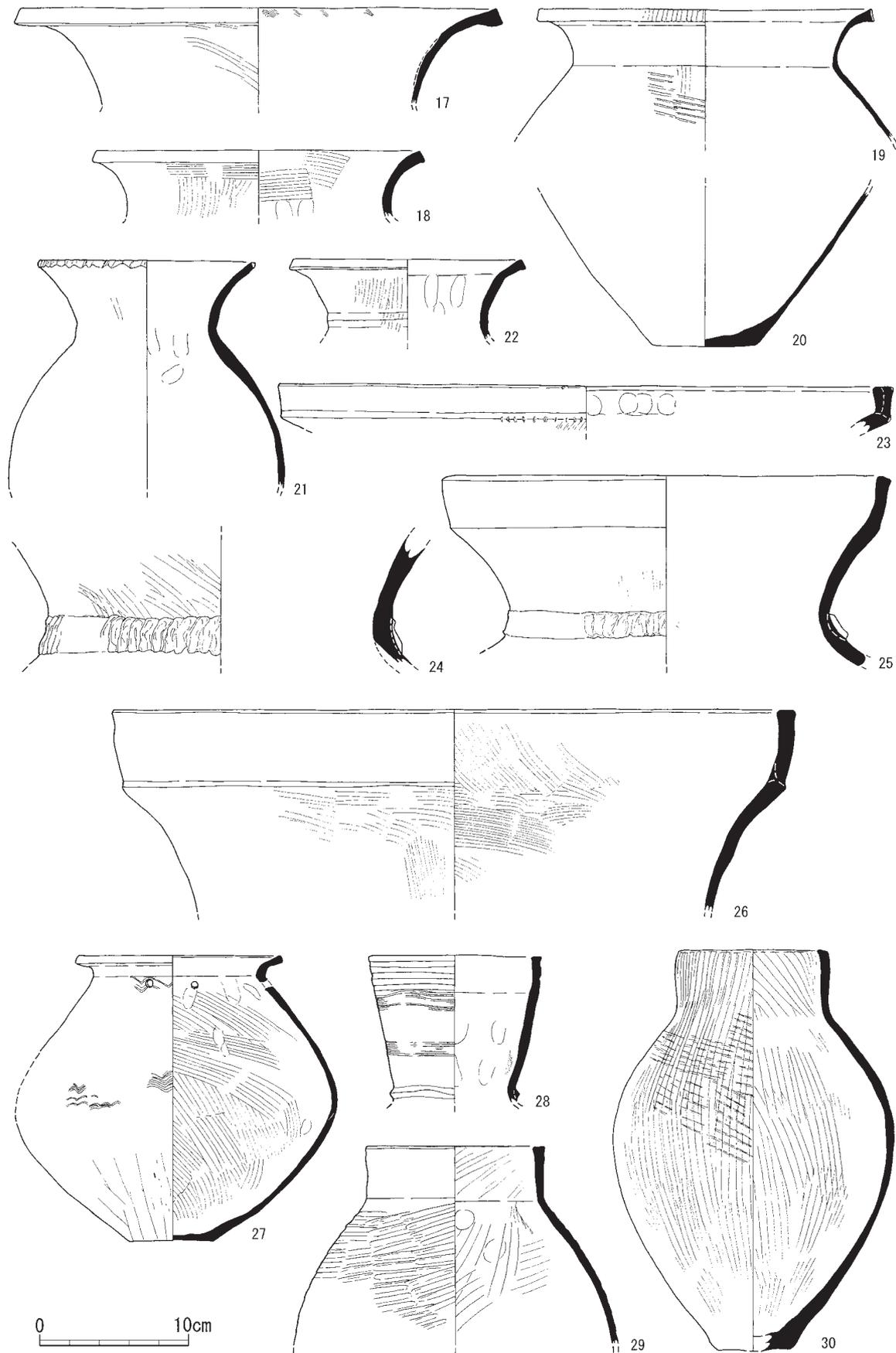
S D05(43・44) 甕底部(43)は薄手である。高杯脚部(44)は、裾端部が下方に広がる形状を呈す。なお、このSD05については、整理段階で、時塚3号周溝埋土の一部であることが明らかとなったため、遺構としては認識していない。

S D552(49・50・52) 49は広口壺口縁の破片である。綾杉状のヘラ描文の上に、円形浮文が貼り付けられる。無文で単純な形状の広口壺もみられる(50)。52は甕底部である。

S K547(45・46) 45は、面をもつみの口縁端部に櫛描波状文を、頸部から体部に櫛描直線



第73図 2地区出土遺物実測図(1)



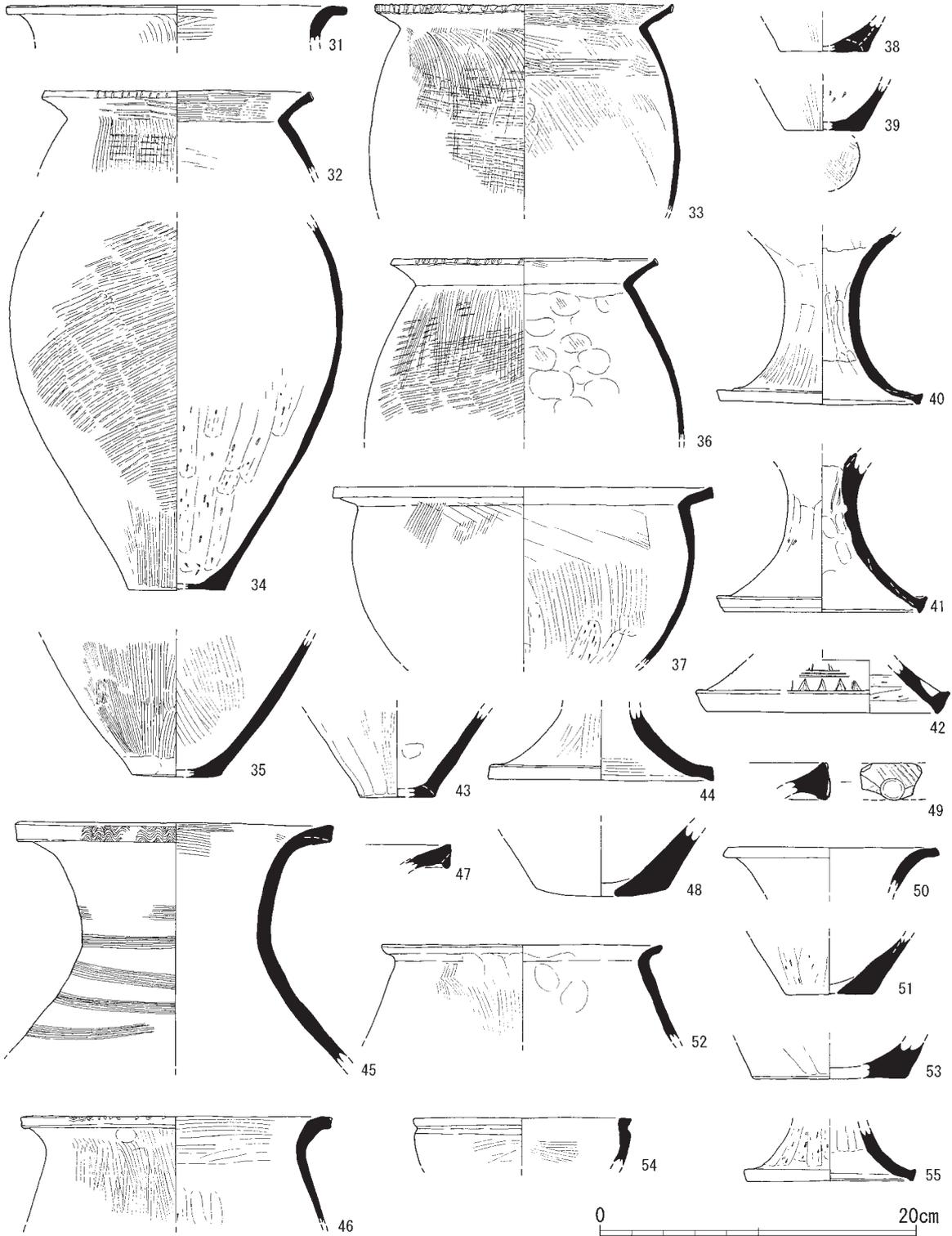
第74図 2地区出土遺物実測図(2)

文を施す広口壺である。46の折り曲げ口縁甕は、口縁上端に刻目をもつ。

S K 524(47・48) やや垂下する口縁をもつ広口壺口縁部片と、甕底部を挙げた。

S P 549(52・53) 口縁部の短い特徴のある「く」字状口縁甕と、底部片が出土している。

S K 70(54・55) 54は、外面ケズリ調整を施す脚部である。55の小型の高杯は、口縁部に凹



第75図 2地区出土遺物実測図(3)

線文をもつ。

S D542 (56) 完形に近い広口壺である。体部は上半が張り、口縁端部が上方に肥厚する形状である。外面はタテおよびナナメのハケメを施し、体部下半にタテミガキを施す。内面はナデ調整を施すが、一部ハケメ調整がみられる。また、内面の頸部以下は残存黒斑のため全体が青みを帯びた濃灰色を呈している。

(谷上真由美)

時塚3号墳(第77・78図) 時塚3号墳出土遺物として、周溝S D01内出土の須恵器・土師器を図示した。古墳に直接伴う遺物のほか、埋没時期を示す資料が多数出土している。

57・58が古墳に直接伴うと判断される資料である。57は須恵器甗である。口縁部を欠損している。扁球状の体部をもち、頸部と体部の接点は細くしまる。体部最大径は体部のほぼ中位にもつ。円孔は最大径の上に施されている。頸部はラッパ状に

大きく広がる。体部は円孔の上部に2条の沈線を施し、頸部は中段に2条の沈線を施して加飾する。やや厚手のつくりである。58は土師器直口壺である。体部は最大径を体部上半にもち、口縁は直立気味に立ち上がる。内面は体部下半がヘラケズリにより調整され、上半はユビによるナデによって調整されている。外面は摩耗が著しく調整不明瞭であるが、粗製の壺と考えられる。須恵器甗の形態はラッパ状に開く口縁や、体部の形態はやや新しい様相を呈しているといえる。陶邑編年^(注2)TK10型式に併行する段階のものと考えておきたい。

59～64は須恵器杯蓋である。60のように天井部の高い笠形を呈するものや、64のように天井部の低い笠形を呈するもの。63のように口縁部が「Z」字状に近く屈曲し、低い天井部をもつものなどがある。

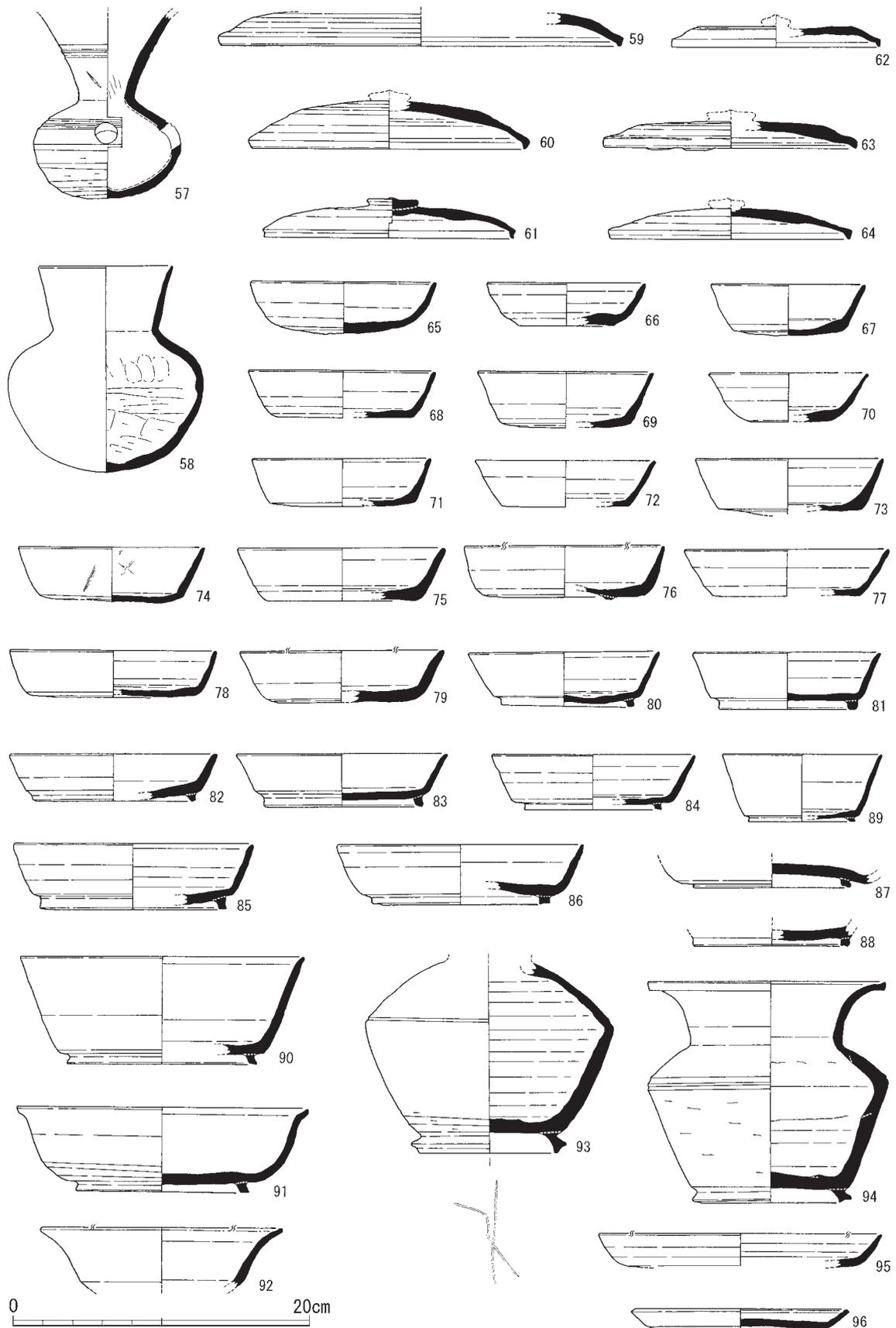
65～78は須恵器杯Aである。64・65は体部側面の立ち上がりが丸みを帯びている。その他のものは直線的に立ち上がるものや、口縁端部を外反させるものなどがある。法量も様々であり、一定の時期幅があるものと考えられる。

79～90は須恵器杯Bである。高台は底部外縁部よりわずかに内側につくものが大部分であるが、小法量の杯89や底部のみの個体88は外縁部に高台がとりつく。また90のように大型の杯Bも含まれている。

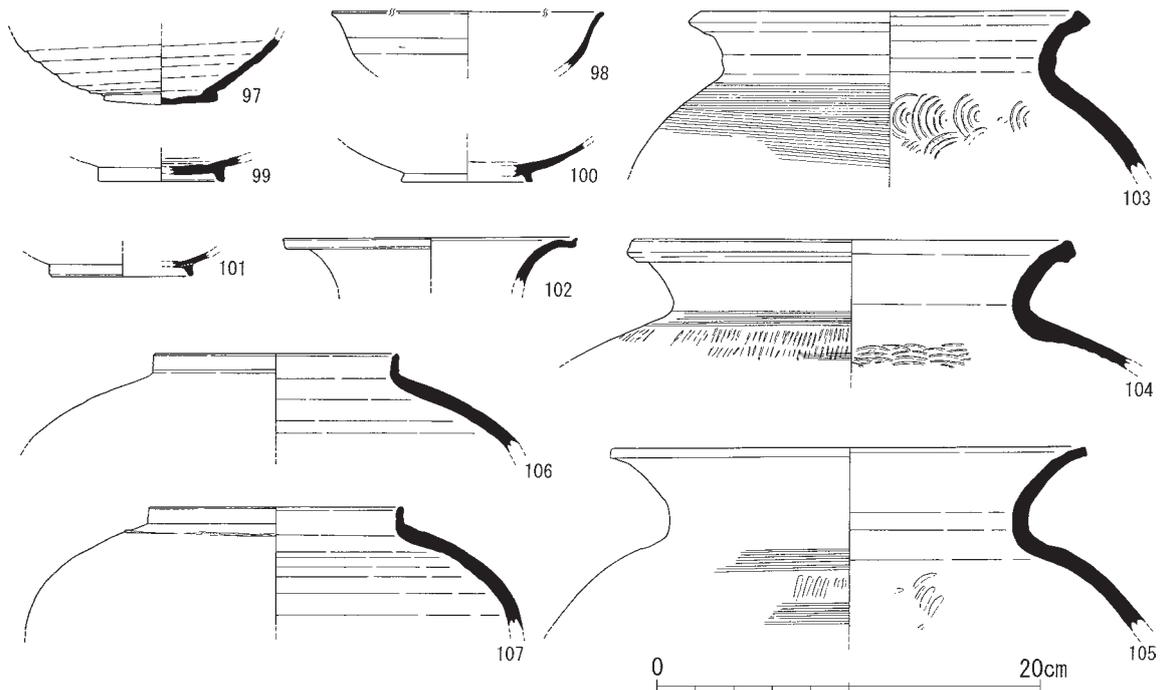
91・92は須恵器椀である体部側面は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端面はやや内湾気味に外方へのびる。



第76図 2地区出土遺物実測図(4)



第77図 時塚3号墳出土遺物実測図(1)



第78図 時塚3号墳出土遺物実測図(2)

93は須恵器長頸壺体部である。肩のはった体部をもち、肩部に1条の沈線を施している。底部外面にはヘラ記号が認められる。

94は高台をもつ須恵器広口壺である。肩部に2条の沈線を施している。

95・96は須恵器皿である。95は端部を丸く収めるが、96は端部に面を形成している。

97は須恵器椀である。ロクロ成型時のヨコナデが多段状に残る個体である。底部は糸切り底である。

98～100は緑釉の椀である。98・99の高台は削り出し高台と思われる。

101は灰釉の椀である。

102は小型の須恵器甕口縁である。薄手のつくりであり、口縁端部は上方に折り曲げて外側に面を形成する。古墳時代に属する可能性も考えられる。

103～105は須恵器甕である。103・104は短い口縁部をもち、105は外方に外反気味に延びる口縁をもつ。

106・107は大型の短頸壺である。短く直立する口縁をもつ。

以上、時塚3号墳の周溝から出土した遺物は、古墳時代後期前半の古墳造墓に伴うものと、奈良時代後半から平安時代にかけての遺物に大別できる。飛鳥時代や、奈良時代前半の遺物が存在しないことは、この古墳が飛鳥時代から奈良時代には塚として認識され、奈良時代後半から平安時代にかけて土地利用に際し、墳丘の削平が行われ、土層断面に示された柱穴などが構成され、居住域として土地利用がなされていったことを示しているものと考えられる。

(石崎善久)

京都府遺跡調査報告集 第135冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141